

選択集通津録講読

・著者…慧雲(1730-1782)深諦院

解題…本書は玄談に自叙する如く、安永己亥(師時に五十歳)の夏、通津専徳寺に講演せる筆録なり。通津の題名即ち茲に取るか。玄談の終わりに末疏を叙して西山派に八部、鎮西派に八部、今家に五部を掲ぐ。即ち是等の諸註を咀嚼し、正すに日溪(法霖(1693-1741))昨夢(僧樸(1719-1762))二師の宗学を以ってす。特に玄談の一篇は文義優麗、他人の企及すべからざる特色を存す。

(メモ)

・安永己亥…安永八年(1779)。

※専徳寺住職は六世超応。天明二年(1782)に本堂上棟(超応75歳)

・末疏…西山派八部、鎮西派八部、真宗五部を「法霖(1693-1741)」と昨夢(僧樸(1719-1762))二師の宗学で正す。

・底本…仏大

・参照…六条法光寺本(法本)(京都市下京区東松屋町840か)

三に本願章に三。初に標章。二に引文。三に私釈。今は初

弥陀如来^止本願之文

(弥陀如来、余行をもつて往生の本願となさず、ただ念仏をもつて往生の本願となしたまへる文。)

今章の来意、上に准じて二義。

もし文に約せば、上にすでに師説明かす。あに本なきや。故にその本を示す。すなわち今章起る。

もし義に約せば、第一・第二はこの楷梯となす。楷梯すでに成ず。正しく堂奥を示すが故に、今章来る。

本願章とは、あるいは(鶉木の太綱)「念仏本願章」と云い、あるいは(要義)「生因本願[43b]章」と云い、あるいは(本義)「本願念仏章」と云い、あるいは(聞香日溪)「選択本願章」と云い、あるいは(私集)ただ「本願章」と云う。義において別なし。故に今はただ略より名づくるのみ。

しかれば本願とは、総じて六人を指し、別して一願を指す。もし今家に依らば、広略中あり。広略は知るべし。中は五願を取る。

およそ願文を釈せば具さに五科。『安永録』のごとし。これはこの宗要なり。今はこれを略述す。

一は文科。影等は三科。古今の通依は、所謂撰法身(三)撰国土(二)撰衆生(余の四十三)。

二は義科。この中に分けて四。上を合して五となす。

一に浄入願心科。これ論主註家の微意に依る。

二に撰生為本科。これ七祖相承の通意に依る。

三は光寿為本科。これ高祖發揮の指帰に依る。

四に真仮別立科。これまた高祖別途の判釈に依る。

初に浄入願心とは何。選択論(※浄土論か)に云く、「三種の成就は、願心をもつて莊嚴せり」と。三種とは何。依正の主伴なり。願心とは何。選択の願心なり。願心清浄なるが故に莊嚴清浄、仏名清浄(清浄覚)、土また清浄(清浄土)、人また清浄(清浄衆)。一事として法蔵の清浄願心の回向成就したまう所にあらざることあることなきなり。行信の因果、往還の諸相、

みな願心によつて成就するなり。

もしこの義に依らば、四十八願の一一は二科なり。前後の二句（※設我得仏と不取正覺）これ願心相。中間は願事なり。この三嚴の相は、本末を問わず、真仮を論ぜず。ただこれ一清浄句中の妙差別相なり。能嚴を略とし、所嚴を広とす。能所の能広は略に入り、所能の所略は広に入る。無碍に入るをこれ広略相入と曰う。これ浄入願心と曰い、これ〔434a〕願心莊嚴と曰う。これ一匹五彩のものなり。

二に撰生為本とは、玄義に云く、

「法蔵比丘、世饒王仏の所にましまして菩薩の道を行じたまひし時、四十八願を發したまへり。一々の願にのたまはく、へもしわれ仏を得たらんに、十方の衆生、わが名号を称してわが国に生ぜん願ぜんに、下十念に至るまで、もし生ぜずは、正覺を取らじ」と。

第十八をもつて撰生の本となし、余の四十七はただ忻慕となす。所被の千差、能被の萬品、故に余願あり。余願に由るが故に忻慕を生ず。すでに忻慕を生ずれば、尋ねて願心を生じ聞信歡喜す。すでによく聞信すれば、往生必定す。当に知るべし、一一の願の後にみな第十八あるなり。ここにおいてか、諸願は第十八の願に従つて出でる。第十八に入りて息む。吉水の一化、ただこの域に在す。七祖の相承の本願力を談ずは、みなこの旨なり。龍樹は「歸命本願力」と謂い、また「阿弥陀仏の本願はかくのごとし、もし人われを念じ名を称してみづから歸すれば」等と云う。天親は「觀仏本願力」と云い、乃至、横川は「別願中の別願」と云う。吉水はすなわち今章これなり。いわんや五帖の法章ただこの旨を述す。

もしこの義に依らば、四十八願は大分二となす。初は別中の別、第十八なり。二は別中の総、四十七なり。別は総に入るが故に、万機普益。総は別に入るが故に、往生業成。ここにおいてか、三世十方の利濟無塞なり。

三に光寿為本科とは、和讃に云々（超世無上等）。原夫弥陀世尊の深重誓願、光寿の徳をもつて安養に影現し、十方を統御す。ここをもつて光寿とは安養自然の妙果。またこれ十方撰化の根本なり。〔434b〕讚偈讚のごときは、専ら安養自然の妙果を嘆じ、正像末のごときは、専ら十方撰化の根本を嘆ず。

いかに自然の妙果なるや。かくのごとき光寿の身と土は不二にして、仏即ち光寿無碍、土はまた諸智土、無量光明土なり。しかして自国の菩薩人天

をして同じく光寿無量に契らせんとす。「長く道徳と合明」(※註釈版六一)するが故に、主伴不二、依正不二、すなわちこれ無畏涅槃界なり。

いかんが撰化根本なるや。名体不二の諸仏称揚なり。經に云く、「十方恒沙諸仏如来、皆共讚嘆」等と。また云く、「十方恒沙の諸仏如来、称嘆せざることなし」と。ここにおいて衆生聞信歡喜す。經に云く、「諸有衆生、その名号を聞きて」、また云く、「名を聞きて往生せんと欲へば」と。これはこれ福智蔵なり。その機未熟ならば、方便蔵を顕開す。ここにおいて定散二善あり。八万の法蔵あり。その機すでに熟せば、福智蔵に撰入す。尅してこれを言う。ただこれ光明名号撰化十方の相なり。華光の往觀、二相の始終、八万の法門、ここより出でて、ここに歸して息む。故に「撰化の根本」と云うなり。

もしこの義に依らば、四十八願は分ちて二科となす。一は内徳光寿の願。十二・十三これなり。二は外用撰化の願。この中を二となす。一は真実。十七・十八及び十一これなり。二は方便。十九・二十これなり。余願は准知す(因みに按ずれば、仏より生に向かうは、光寿を本となす。生より仏に向かうは、十八を本となす。各おの始終あり。十八願のごときは、十七を始とし、十八これ中、十一は終。その旨知るべし。光寿願のごときは、十一を始めとす。如より来生し、身を示現するが故に。光寿これ中、十七を終とす。体をもつて名に属す。化本(※撰化根本)たるが故に。ここに准じてこれと言う。十七・十一はまた始終あり。循環玲瓏、玉の盤を転ずるがごとし。珠の網を懸けるがごとし。しかれば機の未熟、この化を受けず。ここをもつて十一は二十二願を出づ。十七は分ちて施すに方便願を出す。よく仏所説の法を説き、みなこれ利他教化地、方便権門の[435a]道路なり。往還回向、利濟無塞、これを撰するに唯だ一名号の徳あるが故に。「南無阿弥陀仏の回向の」(※註釈版六〇九)等と云う(云々)。

四に真仮差別科とは、行巻偈前の文に云く、「また(※原本..おほよそ)誓願について真実の行信あり、また方便の行信あり」等と。また真土巻の終りに云く、「しかるに願海について真あり仮あり。ここをもつてまた仏土について真あり仮あり。」(※註釈版三七一)等と。また行巻(五十)に云く、「福智蔵を円満し、方便蔵を開顯せしむ」(※註釈版二〇一)と。

もしこの義に依らば、四十八願は分ちて三科となす。一は真の願。十一・十二・十三・十七・十八及び二十二等これなり。二は仮の願。十九・二十及び二十八等これなり。三は真仮通願。その余の諸願これなり。

上来の文義、合して五科となす。七祖の相承、諸家の積義、この趣を出でざるものなり。今の所願のごときは撰生を本とす。義の在るところ知るべし。

二に引文に三。初に大経、二に観念門、三に礼讃。今は初。

無量寿経止不取正覚

（『無量寿経』の上のたまはく、「たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信樂して、わが国に生ぜんと欲して、乃至十念せんに、もし生ぜずといはば、正覚を取らじ」と。）

けだしそれ二尊喚遣の深奥、七祖相承の妙脈、宗祖弘興の真宗、四輩同入の通門、ただこの一願に在するものなり。

試みに願文を解す。文を分ちて三となす。初は発願、二は願事、三は立誓。文に配して見るべし。

「設」はこれ若と言う。唐訳は「若我成仏」と云い、終南はまた数々「若我成仏」と云う。また設は仮設。影や興みなこの積あり。理は宜しくこれに従うべし。相承の諸書（三経文類等）は達登比訓（※？）を用うるが故に。

「我」とは、自指の詞。

「仏」は佛陀。これは覚と云う者なり。これすなわち光寿無量尊なり。

「十方」已下は[435b]願事。分ちて四段となす。一は十方衆生を積す。二は三信を積す。三は乃至十念を積す。四は若不生者を積す。

初に「十方衆生」を積すは、この中に二となす。初は余願に対して解す。二は成就に対して積す。

初の余願に対して解すとは、およそ六八中、この言を置くは、ただ三願たり。謂く、今願及び十九・二十これなり。かくのごとき三願は撰化機尽。一に謂く不定、二十願これなり。二に謂く邪定、十九願これなり。三に謂く正定、すなわち今願これなり。仏の本意に約せば、ただ正定に在す。行巻（終）に謂く、「その機はすなはち一切善悪大小凡愚なり」と。また云く、「一乗海の機」を案ずるに」、金剛の信心は絶対不二の機なり」（※註釈版一九九）と。余願文とその言は同じといえども、義において天懸（てんけん）なり。ここにおいてか、三願三機三蔵三経三往生義あり。鼎時をもつて一家の法門を成ず。法要一（初）の三経文類に云々なるがごとし。

二に成就に対して解すとは、述成（※成就と同義）文に「諸有衆生」と云う。諸有の言はすなわち諸有輪、諸有海。これはかれ大悲の周急を顕すが故に。今は十方と云う。これは大智の普及を示すが故に。これ六義あり。

一は招喚発遣対。謂く、遣はすなわちここより直ちに指示し、喚はすなわちかしこより汎爾（※おほよそ）通じての呼（二経の総意に約す）。

二に本願述成対。謂く、述は一方に局るが故に諸有と云い、願は衆域に通ずる故に十方と云う（願力始終に約す）。

三は報化二身対。謂く、これはすなわち穢土故に諸有と云い、彼はすなわち浄土故に十方と云う（摂化の始終に約す）。

四は悲化智慧対。謂く、悲化は周急、智慧は普及。上に准じて知るべし（発遣の始終に約す）。

五は信機信法対。謂く、[436a] 諸有を聞くによって、機劣を深信し、十方を聞くによって法勝を深信す（行者の受行に約す）。

六は摂受抑止対。謂く、すでに機劣を信ずれば慚愧の日生まる。すでに法勝を信ずれば恭敬息むことなし（信後の余用に約す）。

二に三信を積せば、至玄至要は、信卷の嘆徳に云く、

大信心はすなはちこれ長生不死の神方、欣浄厭穢の妙術、選択回向の直心、利他深広の信樂、金剛不壞の真心、易往無人の浄信、心光摂護の一心、希有最勝の大信、世間難信の捷徑、証大涅槃の真因、極速円融の白道、真如一実の信海なり。
（註釈版・二二一）

しかれば諸師の異解一任して息む。別意の弘願を知らざるが故に。他流の所伝、弘願を談ずるといえども、ただ皮膚にあるのみ。何ぞ駿骨の偉を識るかな。宗祖の広略及び鈔は集成する者なり。因は二力の果を判じ、二土を弁ず。真宗教義ここにおいて備足す。今は直だ宗意について明かさば、これに二意あり。一は三心即一の義、二は一心即三の義。この二は無二、無二にして二。この旨を達せずば、恐らく凝滞を生ず。

初の三心即一とは、略書に云く、

問ふ。念仏往生の願、すでに三心を発したまへり。論主、なにをもつてのゆゑに一心といふや。

答ふ。愚鈍の衆生をして、覚知易からしめんがためのゆゑに、論主、三

を合して一としたまふか。

(註釈版・四八九)

広書の三本(十七)に云く、

如来の本願、すでに至心・信樂・欲生の誓を發したまへり。なにをもつてのゆゑに、論主一心といふや。

答ふ。愚鈍の衆生、解了易からしめんがために、弥陀如来、三心を發したまふといへども、涅槃の真因はただ信心をもつてす。このゆゑに論主三を合して一とせるか。

(註釈版・二二九)

広略二本は[436b]文やや(※稍)異なるといえども、その義全くこれに同じ。ここをもつて経は論より難し。答うるに字訓をもつて三則一を顯すものなり。次の下の字訓に云々。具釈に違あらず。皆これ三即一の義なり。

二に一心即三とは、略書に云く、

また三心といふは、一つには至心。この心は、すなはちこれ如来、至徳・円修・満足・真実の心なり。阿弥陀如来、真実の功德をもつて一切に一回施したまへり。すなはち名号をもつて至心の体とす。

(註釈版・四九〇)

等と。広書の三本(十八)に云く、

また問ふ。字訓のごとき、論主の意、三をもつて一とせる義、その理しかるべしといへども、愚悪の衆生のために阿弥陀如来すでに三心の願を發したまへり。いかんが思念せんや。

答ふ。仏意測りがたし。しかりといへども、ひそかにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもつて如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもつて、円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心をもつて、諸有の一

切煩惱悪業邪智の群生海に回施したまへり。すなはちこれ利他の真心を彰す。ゆゑに疑蓋雜はることなし。この至心はすなはちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。(註釈版・二二二)

等と。次下の諸文、広略異なるといえども、義趣全くこれに同じ。ここをもつて論の難きを經にて答う。義理をもつて一即三を示すものなり。次下の広積、その信樂を結んで、至心を体とす。その欲生を積して、信樂を体とす。展転相成して、みなこれ[437a]一即三の義を成ずるなり。一即三故に、願は三信を誓い、三即一故に、論は一心と云う。經論相成して、他力を著す(※著焉)。いわんや玄簡の三不三信積に依らば、その義いよいよ明かなり。大義かくのごとし。

次に文句を積せば、これまた三あり。初に文類に依り、二に銘文に依り、三に同異を料簡す。

文類の文は広く安永録のごとし。

二に銘文に依らば、法要一(三十丁)の銘文云々(「至心信樂」といふは、「至心」は真実と申すなり、真実と申すは如来の御ちかひの真実なるを至心と申すなり。煩惱具足の衆生は、もとより真実の心なし、清淨の心なし、濁悪邪見のゆゑなり。「信樂」といふは、如来の本願真実にましますを、ふたごころなくふかく信じて疑はざれば、信樂と申すなり。この「至心信樂」は、すなはち十方の衆生をして、わが真実なる誓願を信樂すべしとすすめたまへる御ちかひの至心信樂なり、凡夫自力のこころにはあらず。「欲生我国」といふは、他力の至心信樂のこころをもつて安樂淨土に生れんとおもへとなり。)

三に同異を料簡すとは、上来の諸文、仏よりこれを言う。至徳の尊号は自ずから三心を具す。三心展転して尊号を体とするが故に。生よりこれを談ぜば、一信樂の中、前後の二を具す。三心は各々疑蓋無雜なるが故に。また銘文のごときは、初はただ仏に属し、中は生仏に属し、終はただ生に属す。帰命を弁ずるがごとく、あい顕著に約す。欲生心をもつて能帰の相となす。かくのごとき異義、異にして同を障げず。三即一なるが故に。同にして異を碍げず。一即三なるが故に。旨を得て領會す。

三に「乃至十念」とは、初に「乃至」を積し、次に「十念」を積す。

初に「乃至」とは、行卷(四十)に云く、「乃至とは一多包容の言なり」、

信末(二)に云く、「乃至」といふは、多少を撰するの言なり」と。略書に云く、「上下を兼ねて中を略するの言なり」、法要二(三)の『証文』云々(「乃至」は、おほきをもすくなきをも、ひさしきをもちかきをも、さきをものちをも、みなかねをさむることばなり)。

次に「十念」[437b]とは、もし諸師に依らば(法位・玄一等)、十法に依りて十念を起すと云う。これ称名の十念にあらず。十法とは、『弥勒所問経』に説く所の十念これなり。この義は不了。採録に足らず、異門の鑰(※かぎ、じょう)、「十方諸有」の言に背く。別意の弘願の宗を失う。故に相承のごとく念声は一に依る。今集の釈のごとし。龍樹はすでに「もし人われを念じ(三信)名を称して(十念)」(註釈版七祖篇・一五)等と云う。宗家は常に称我名号をもつて三信の文に換える。

問う。この文の「十念」、信となすか、行となすか。

答う。成就是「乃至一念」と云い、付属もまた「乃至一念」と云う。行巻(三十九)云々。後をもつて前に属す)、信末(初云々。前をもつて後に属す)、この義旨に准ず。今の十念のごときは自ずから行信に通ず。また信行離れず。確執すべからず。略書は行を証じて成就を連引す。また信本(十五)・行巻(三十九)は礼懺儀下巻の深心積の文を引く。意は一文をもつて行信を証するにある。まさに知るべし、信に約せば、これ相続相。行に約せば、これ称名行なり。左右塞なし。旨を得て思忖す。

問う。他流は専ら十念の口授を事とす。今家は何をもつてこの伝なきなり。答う。他流の所伝は是非すべからず。今家の相承は断じてこの義なし。ただ今家あらず、善導・吉水もまたこれを用いず。本伝になき所なるが故に。しかるに十念の口授は各々、論註の文(上巻終)より出づる。云く、

『経』(観経)に「十念」とのたまへるは、業事成弁を明かすのみ。かならずしも頭数を知ること須るず。「蟪蛄は春秋を識らず」といふがごとし。この虫あに朱陽の節を知らんや。知るものこれをいふのみ。十念業成とは、これまた神に通ずるものこれをいふのみ。ただ念を積み相續して他事を縁ぜざればすなはち罷みぬ。またなんぞ念の頭数を知るを須るることを仮らんや。もしかならずすべからく[438a]知るべくはまた方便あり。かならずすべからく口授すべし。これを筆点に題することを得ざれ。

この文意を按ずるに、すでに「不必須知」(※かならずしも頭数を知ること
を須みず。「現代語訳」必ずしもその念仏の数を知らねばならぬというのではない)
と云う。たとい口授してもただこれ護防に過ぎざるのみ。良忠また言く、「愚
老粗ぼ推せり」(『浄土宗全書』一・三〇八上。)と。しかればすなわち、他流
の所伝、また輓近(※ばんきん。最近。未来)を出づるか(※口伝は最近でき
たものだろう)。

四に「若不生者」を釈せば、これ二解あり。一に余願に対する解し、二に
成就に対して解す。

初に余願に対して解すとは、およそ六八中、この句を置くは、ただこの願
にあり。それ別中の別たらんとする所、けだしここにあるか。余の諸願のご
ときは、けだし忻慕にあり。忻慕すでに生ず。聞信を尋ね発し、聞信すでに
発す。往生決定の所由、ただこの句に属す。宜しきかな、高祖も断じて願目
となす。和讃(云々。若不生者のちかひゆえ等)。

問う。唐訳の二十願はまたこの句あり。何ぞ誇り足るか。また和讃の何ぞ
名はこれ通じて謾なるや(?)。

答う。たとい余願にこの句ありて百を重ねるとも、今とあい濫るからず。
今願生する所、ただ真に局る故に。例えば方便の二願のごときは、また「十
方衆生」の句ありとも、三定(※正定・邪定・不定)位を殊とす。

問う。何をもつてただ真に局ると知る。

答う。理あり文あり。理はすなわち上文のごとし。すなわち「※文は」左の
法要一(四十七)の銘文(云々)のごとし(「若不生者不取正覚」といふは、
ちかひを信じたる人、もし本願の実報土に生れずは、仏に成らじと誓ひたま
へるみのりなり(註釈版・六五七)。

二に成就に対して解せば、文に云く、「至心に回向せしめたまへり。即ち
往生を得、不退転に住せん」と。すなわちこれこの句の意を述成するなり。
法要六(二十二)の『願願鈔』に(云々)。「至心廻向」の四字は承上起下
とならふなり。承上といふは、上の「信心歡喜」を引起すること、法藏因中
の至心より生ず。起下といふは、しもの「住不退転」の前途を達つすること、
また至心に廻向したまへる如来「※原本…如来大悲」の无缘の慈悲より成せら
るるものなり(浄真全四・三三六)。

これはこれ今宗の相承の遺訓なり。しかれば和讃に云々(若不生者の等)

(※若不生者のちかひゆえ 信樂まことときいたり 一念慶喜するひとは 往

生かならずさだまりぬ」と[438b]符号す。解(?)に云く、

「首句の「故」の字は下の三句に貫く。謂く、若不生者の誓願に由るが故に、信樂の時至り、また一念慶喜し、また往生必定す。「故」字、三呼す。初の二は上を成じ、後の一は下を起す。尋ぬればそれ弥陀の本願は衆生往生と同時に具足の成就の者なり。ここをもつて時至り、慶喜す。必定はこの一句よりして成就するなり(凡そ讚偈の讚中、偈略・讚広の例あり。偈すなわち六句。讚は三首十二句に及ぶ。知るべし)。

また禿鈔に云く、「本願を信受するは、前念命終なり。即得往生は、後念即生なり」と。即得往生をもつて平生業成に約す。此等の義意はみなこの句より出づるものなり。

「不取」等とは、文意解すべし。

二に観念門

観念法門止不取正覚

(『観念法門』に上の文を引きはいはく、「もしわれ仏にならん、十方の衆生、わが国に生ぜん」と願じて、わが名号を称すること下十声に至らん、わが願力に乗りて、もし生ぜずは、正覚を取らじ」と。)

更に二文を引く。これ釈を加減し、願意を助顕す。

いかんが助顕す。今文は「至心」等を減じ、「称我」等を加える。

謹んで按ずるに、願文はもと信行の二法を具す。その信相とは、文に在りて分明なり。その行相に至ればその濫はなきにあらず。諸師(法位玄一等)はこの十念を解して云く、「十法に依りて十念を起す」。これ称名の十念にあらず。ここをもつて終南は義に依りて加減す。今はまた引用す。集意を助顕するのみ。余文は准じて解す。

三に礼讚

往生礼讚止必得往生

（『往生礼讚』に同じき上の文を引きていはく、「へもしわれ仏にならんに、十方の衆生、わが名号を称すること下十声に至るまで、もし生ぜずは、正覚を取らじ」と。かの仏いま現に世にましまして仏になりたまへり。まさに知るべし、本誓重願虚しからず、衆生称念すればかならず往生することを得」と。）

この文、行巻（二十）に引きて大行を証す。また真影の讚は、元祖自筆の書なり。この文を与えていかんが助顕す。次上すでに信行[439a]の互具を顕す。今は三心を略してただ称名を挙ぐ。さらに数語を加え、果上の徳を嘆ず。世の字の有無、無をもって正とす。法要五（三十五）の『口伝鈔』（云々）（「彼仏今現在成仏」等。この御釈に世流布の本には「在世」とあり。しかるに黒谷・本願寺両師（源空・親鸞）ともに、この「世」の字を略して引かれたり。わたくしにそのゆゑを案ずるに、略せらるる条、もつともそのゆゑあるか。まづ『大乘同性経』にはく「浄土中成仏悉是報身 穢土中成仏悉是化身」（意）「文」。この文を依憑として、大師（善導）、報身報土の義を成ぜらるるに、この「世」の字をおきてはすこぶる義理浅近なるべしとおぼしめさるるか。そのゆゑは浄土中成仏の弥陀如来につきて、「いま世にましまして」とこの文を訓ぜば、いますこし義理言はれざるか。（註釈版八九〇）。相承の釈義、知らざるべからず。

三の私釈に四。初は且く願の総別を分つ。二に広く別願の相を釈す。三に本願の已成を決す。四に経釈の相違を会す。今は初。

私云一切止別願也

（わたくしにいはく、一切の諸仏のおの総別二種の願あり。「総」といふは四弘誓願これなり。「別」といふは釈迦の五百の大願、薬師の十二の上願等のごときこれなり。いまこの四十八の願はこれ弥陀の別願なり。）

「四弘」等とは、『止観輔行』一の四（二十八）に云く、「弘は広なり。誓は約なり」と。釈名に云く、「誓は制なり。今、四法（度断智証）をもつて要す。初心は上求をして下化せしむるが故に」。云く（『肇論』云々）、

僧那を始心に発せば、終に大悲をもって難に赴く。僧那は西音。これを弘誓と云う。起行は願を填ずる（満たす）が故がに、「赴難」と云う。」
度断智証、四諦の境に対すれば願なり。正六度を兼じ、所発の願を填ずれば行なり。願行円備し二利満足すれば証なり。これはこれ通総の道理、成仏の法の者なり。故に総願と云う。

「釈迦」等とは、已下は別願。『大乘止観』下（二十三）に云く、

問う。仏すでに我を離る。何ぞ別を有するを得んや。

答う。常同は常別。古今の法爾なり。（以上取意）

今謂く、別は同を碍げず。常同をもつての故に。同は別を障げず。常別をもつての故に。同は[439b]別を障げざるが故に別願あり。別は同を碍げざるが故に総願に順ず。仏仏同軌なるが故に法爾と云う。宗師云く、「諸仏の所証は平等にしてこれ一なれども（常同）、もし別願（※原本・願行）をもつて来し収むるに因縁なきにあらず（常別）」（註釈版六五九）等と。この謂なり。

「五百大願」は、『悲華経』（十卷。曇無讖訳。『大悲分陀利経』八卷、同本の異訳）の第六より第七に至りて明かすところなり。

「十二上願」は、『薬師本願経』（これ三訳あり。二卷義浄訳、一卷隋の達磨笈多訳、一卷玄奘訳）の所説なり。

广大を「大」と曰い、最勝を「上」と曰う。みな美辞なり。

二に広く別願の相を釈すに三。初は発願の時処を明かす。二は選択の名義を釈す。三は正しく選択の相を明かす。初の発願の時処を明かすに二。初に大経を引き、二に異訳を引く。初の大経を引くに四。初に已過の仏を明かす。二に今値の仏を明かす。三に発願相を明かす。四に選択の相を明かす。今は初。

問曰弥陀止皆悉已過

（問ひていはく、弥陀如来、いづれの時、いづれの仏の所にしてかこの願を發したまへるや。答へていはく、『寿経』（大経・上）にのたまはく、「仏、

阿難に告げたまはく、(乃往過去久遠無量不可思議無央數劫に、定光如来世に興出したまひて、無量の衆生を教化し度脱して、みな道を得しめて、すなはち滅度を取りたまへり。次に如来まします、名づけて光遠といふ。「乃至」次を処世と名づく。かくのごとき諸仏「五十三仏なり。」みなことごとくすでに過ぎて、)

「乃往」とは、『苑音』一(十三)に云く、

『説文』に曰く、乃の語は辞なり。『広雅』に曰く、乃は往なり。重ねて言うは、義を訓じてなおし清浄のごときなり。

但単を往と言う。義は近遠に通ずるが故に。重言をもって久遠を顕すのみ。

「久遠」とは、上は『広韻』に暫之の反なり。嶧山の碑に云く、「利澤長久」と。下は『説文』は遼なり。『広韻』は遙なり。青龍(?)中の二に云く、「時無始故にただ「久遠」と言うなり」と。

「無量」等(無量不可思議無央數劫)とは、解に二義あり。一に謂く、「無量不可思議無央數の大劫」。一に謂く、「無央數は梵に阿僧祇と言う。この名は小乗・世俗、ともに極數となす」と。今はすなわち、「無量不可思議の阿[440a]僧祇」なり。

『大論』五(二紙)に『不可思議經』を引く(すなわち入法界品なり)。一百三十六の數目を列す。一より「不可説不可説」に至る。中に就いて、「無量」は百二十三位にあり。「不可思議」は百三十三位にあり。「阿僧祇」は百二十一位にあり。余所に文多し。繁を恐れてこれを略す。

「錠光」とは、『応音』一(六)に云く、「すなわち燃灯仏なり」と。漢訳は今に同じ。呉訳に云く、提和竭羅(だいわがつら)。唐宋並んで燃灯と云う。『法華祥疏』十(四十二)に云く、

『智度論』九(十三紙)に云く、太子の初生は、身光四辺し、灯に似るが故に、燃灯と名く。後に成仏の時、燃灯仏と名く。余經に「錠光仏と云うは、なおこれ燃灯のみ」と(已上)。(大正三四・六〇四上一二)

按ずるに「錠」は『説文』に「鐙(あぶみ)なり」と。徐(徐鉉)に云く、

錠の中に燭を置くが故に、これを燈と謂う。今俗は別に灯と作す。これにあらず（已上）。

当に知るべし。燃灯と義同じ。

問う。華嚴（入法界品）・法華（寿命品）・大論（第九）等、燃灯は今と同異あるや。

答う。望西に依りて、その二説あり。一はすなわち同義。玄一・智光・証真等これなり。一はすなわち異義。義寂・憬興等これなり（憬興は亦同亦異の義を立つといえども、剋実すれば同名異体の義なり）。今は謂く、異義を正となす。根本始末の分際異なるが故に。同義もまた通ず。撰化無方、局分すべからざるが故に。已下の列する所、具さに五十三仏あり。漢は三十六、吳は三十三、唐は四十一、宋は三十七、梵漢は雜出。別図に出すがごとし。

二に今値の仏を明かす。

爾時次有_止如来

（その時に次に仏まします、世自在王如来と名づく。）

「爾時」とは、『仁王祥疏』一に「**当爾の[440b]時**」と云う。

「世自在」とは別号、「如来」とは、通号。ある解は、「一切法において自在を得るが故に」と（興疏）。これは自行に約す。ある解は、「世間利益自在なるが故に」と（玄一疏）。これは化他に約す。漢・吳は樓夷亘（音桓）羅と云う。唐は世自在王と云う。宋は今と同じかまた世饒と名く。義はまた准知す。

三に発心の相を明かす。

時有国王_止如来所

（時に国王あり。仏の説法を聞きて心に悦予を懐きて、尋いで無上正真道の意を發し、国を棄て王を捐てて、行じて沙門となる。号けて法藏といふ。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如来の所に詣でたまふ。（乃至））

漢訳に云く、「世饒王、聞経修道し、歡喜開解し、国位を捨てて比丘に行じて作らしむ（※原文…世饒王「に過ぎたるものなし」。経道を聞き、歡喜し開解して、便ち国位を棄て行じて比丘と作り）」等と。

義寂はこの文に依りて云く、「世饒王とは、法蔵在俗時の名」と（已上望西（※了慧道光の無量寿経鈔記か）引く）。会疏云く、「仏の名はまた世饒王と号す。いまだ世饒王の所値の仏を審かにせざるが故に、世饒王仏となすかと。

また玄一云く、「法蔵とは、これ出家の名。乃至。俗は龍珍王と名く。山に入り道を修して、時に中臣の二女、随い入りて学道す。一を祿波那と名け、一を洗濯河と名く。法蔵は山南、二女は山北にて然りて修行す。かの時の国王は今弥陀と成す。祿波那は今これ觀世音これなり。洗濯河は今これ大勢至これなり」と（已上、望西に引く）。会疏云く、「この説ありといえども、いまだ典拠を見ず」（已上）。

今謂く、この説甚だ信用し難し。五訳に説なきが故に。列祖に伝わらざるが故に。末学は輕爾として伝説すべからず。欠如これ可なり。

「悦予」とは、歡喜と名くるなり。

「尋」とは、『苑音』一（十三）に云く、「杜註左伝に曰く、尋は続なり」と。

「無上」等とは、梵に「阿耨多羅三藐三菩提」と言う。これ無上正真道意と云う。註論の下 [441a]（云々）。

「棄国」等とは、その初相を挙げ。国はこれ大器。王はこれ大宝。且くこの二を挙げ、諸欲を捐てたる沙門を顕す。知るべし。

「法蔵」とは、漢は「曇摩迦留」と云い、また「法宝藏」と云う。呉は「曇摩迦」と云う。唐は「法処」と云う。宋は「作法」と云う。大論十五及び五十には「法積」と云う。

「法」とは法門。因位の万行、果上の萬徳、皆撰して法と云う。

「蔵」とは『探玄』三（三十紙）に依らば、蔵と云うに四義あり。一に含撰（当今の法処）、二に蘊積（当今の論の名）、三に出生（当今の作法）、四に無尽（当今の法宝蔵）。今はまた准じて解す。

「高才」等とは、略してその徳を嘆ず。称えるに逸群の能故に「高才」と云う。精進故に「勇」。智慧故に「哲」。常人のよく及ぶ所にあらざるが故

に「世と超異せり」と云う。宋訳に云く、「信解第一、明記第一、修行第一、精進第一、智慧第一、大乘第一」（浄真全一・三四六）と。今解せば、初の三は今「高才」に当る。次の二は「勇哲」。後の一は今「世と超異せり」に当る。初の五は次のごとく信念定進慧の五法。その余の五事・五蓋・五欲・五縁具足はすなわち、これ通前の方便となすなり。「大乘」とは、所謂大乘の無上超世。別願の下なり。讚にまた「国土第一其衆奇妙道場超絶」等と云うこれなり。また唐訳に云く、「殊勝の願行及び念恵力増上あり。その心堅固不動なり。福智殊勝にして人相端嚴なり」（浄真全一・二九八）と。今解せば、次のごとく、信念慧進定の五法、福智殊勝はすなわち別願なり。「詣世」等とは、至仏所なり。

[441b]

四に選択の相に二。初は師仏の説。二に法蔵の選。今は初。

於是世自在^止悉現与之

（ここに世自在王仏、すなはち「法蔵比丘の」ために広く二百一十億の諸仏の刹土の人天の善悪、国土の粗妙を説きて、その心願に応じてことごとくこれを現与したまふ。）

正しくこれ説法現土の相なり。唐訳に云く、「この法を説く時、千億歳を経る」と。宋訳に云く、「一劫を経て、方に究竟すべし」と。今謂く、諸仏境界不可思議なり。且く華嚴六十二（十五）に依る。海雲比丘、善財に告げる文に云く、

たとい人ありて、大海量の墨、須弥山の聚筆をもつて、この普眼法門を
書写するに、一品中の一門、一門中の一法、一法中の一義、一義中の一
句、少分も得ず。いかに況んやよく尽さんや。（大正十・三三六上七）

今仏の説法もこれに准じて知るべし。

「二百一十億」とは、漢・呉の二訳、この数全く同じ。唐訳は二十一億と云う。宋訳は八十四百千俱胝と云う。

問う。刹海無量。何ぞ但だ二百一十と説かんや。

答う。かくのごときの問いは無究なり。捨て置く。あるいは華嚴によく世

界を繞らんとするものは、無識甚だし。根本修多羅、何ぞ枝末經と比類せん。虚空無辺、仏土無量、経経異説、みなこれ無量中の一数のみ。

「応其」等とは、上にすなわち説示し、今すなわち「現与しまたふ」。漢訳に云く、「自ら天眼を得て、所説の土を徹視す」と。呉訳また然り。また智論十(二十八)、また三十八(二十八)、また五十に云く(九)、「仏はまたに十方に至りて清浄世界を示す」(大正二十五・四一八上)と。かくのごとき異説、あるいは自徳に約し、あるいは仏加に約す。内外の因縁互いに挙ぐるのみ。理実不動にして至る。不動にして遍く至る。故に不來にして來。不往にして往。これはこれ菩薩の正しき修行相故に。経論の各説全く相違にあらず。

[442a] 二に法蔵の選。

時彼比丘^止清浄之行

(時にかの比丘、仏の所説の嚴淨の国土を聞き、みなことごとく觀見して、超えて無上殊勝の願を發す。その心寂靜にして、志所着なく、一切世間によく及ぶものなし。五劫を具足して莊嚴仏国の清浄の行を思惟し撰取しき)と。阿難、仏にまうさく、へかの仏の国土の寿命いくばくぞや)と。仏ののたまはく、へその仏の寿命四十二劫なり。時に法蔵比丘二百一十億の諸仏の妙土の清浄の行を撰取しき)と。(以上)

問う。師仏は現に俱に淨穢に通じて説く(註論また然り)。今何ぞただ嚴淨国土と言うや。

答う。所願はただ淨土あるが故に。偈に云く、「觀見諸仏淨土因」等と。この文に依るなり。

「超發」等とは、信末(※末の間違い)に横超の名を積して、下に重誓の「我建」等の文と、並んで引く。超發とは、横超の發超(※超發か)なり。

「無上」とは、絶倫に比較するが故に。

「殊勝」とは、諸願に秀でて出るが故に。偈に「建立無上殊勝願 超發希有大弘誓」と云う。この文に依るなり。

「その心」等とは、『論註』上(五)に眞実功德相を積して云く、

菩薩の智慧清浄の業より起りて仏事を莊嚴す。法性によりて清浄の相に

入る。この法顛倒せず、虚偽ならず。名づけて真実功德となす。いかんが顛倒せざる。法性によりて二諦に順ずるがゆゑなり。いかんが虚偽ならざる。衆生を撰して畢竟浄に入らしむるがゆゑなり。

(註釈版七祖篇・五六)

また性功德を積して云く、

「性」はこれ本の義なり。いふところは、この浄土は法性に随順して法本に乖かず。事、『華嚴経』の宝王如来の性起の義に同じ。

(註釈版七祖篇・六〇～六一)

深入三昧故に寂絶。離囂塵(ごうじん) (※囂塵…さわがしい俗世のけがれ。序分義に) 故に永静。無顛倒虚偽故に無着。果上の無着無碍と相通ず。

「一切」等とは、華嚴の三世、涅槃の五世故に。

「無能」等とは、別願不共故に。

「具足」等とは、「劫」とは劫波。これ分別時節を云う。

「思惟」等とは、『義章』(大正蔵四四・1851)に云く、「審意籌慮を名けて思惟と曰う」(大正蔵四四・七一八上九)と。すなわち選択の義なり。「撰取」もまた選択の義。

語に寛狭あり。この始中終、思惟は[442b]選択より広し。一切事において汎爾(はんんに)思惟するが故に。選択は撰取より広し。取捨未決なるが故に。撰取はすなわち究竟に約す。事すでに決定なるが故に。しかれば選択の言、漢吳二訳に出づ。吉水が採用してもって別願の洪目となすは、義すなわち廃立なり。今集下(二十八)に八種の選択を挙ぐ。禿鈔上(四)は十六選択に開く。上に已に弁ずるがごとし。

「莊嚴仏国」とは、十二・十三及び十一願これなり。

「清浄の行」とは、十七・十八願これなり。もし文科に約せば義は真化を撰す。今、義科に約すが故に爾りと云うのみ。

「阿難」等とは、阿難はそれを聞き思惟すること甚だ長遠なるが故に、この問いあるなり。答意見るべし。影(※無量寿経義疏)の上(四十七)に云く、

問いて曰く、もしかれ寿の多劫を得て、劫尽の時、何所に居住して修行を得ん。釈して言く、余人はその劫尽を見る。その法藏は等しくかの国土の安穩不動なるを見るが故に起修を得る。法華中の「衆生劫尽の大火に焼かれるを見る時、我がこの土は安穩にして、天人常に充滿する」と、その義相似す。
(大正三七・一〇三上十三)

この釈は善いかな。興の中(四十)には「引例不斉報化の別(※?)となして破すが故に」と。この破は理にあらず。すでに相似と云うが故に。またたとい化身は無方を摂化すとも、あに種々の相なきかな。また興は自ら解して「これ歳数となす」。この義甚だ非なり。望西の二(六十)に破して五義をもつてす。余文解すべし。

二に異訳を引く

又大阿弥陀経^上二十四願経

(『大阿弥陀経』(上)にのたまはく、「その仏(世自在王仏)すなはち二百一十億の仏の国土中の諸天・人民の善悪、国土の好醜を撰択す。「法藏比丘の、」心中の所欲の願を撰択せんがためなり。楼夷亘羅仏「ここには世自在王仏といふ。」経を説きをはりて、曇摩迦「ここには法藏といふ。」すなはちその心を一にして、すなはち天眼を得、徹視してことごとくみづから二百一十億の諸仏の国土のなかの諸天・人民の善悪、国土の好醜を見、すなはち心中の所願を撰択して、すなはちこの二十四の願経を結得す」と。『平等覚経』またこれに同じ。)」

要義の三(三十三)に云く、「かの経はいまだ見ず」と。聞香の三本(二十五)に云々。余は要義に依る)、しかれば今の所引、呉訳上卷(四紙左)の全[443a]文なり。他は龍舒輯経について檢尋すれば、龜味甚だし。文意解すべし。

「平等」等とは、漢訳と知るべし。

二に撰択の名義を釈すに二。初に正釈、二に会釈。今は初。

此中選択止選択義如是

(このなか、「選択」とはすなはちこれ取捨の義なり。いはく二百一十億の諸仏の浄土のなかにおいて、人天の悪を捨て人天の善を取り、国土の醜を捨て国土の好を取るなり。『大阿弥陀経』の選択の義かくのごとし。)

思惟は初に約す。選択は中に約す。撰取は後に約す。寛狭異なりと雖も、義趣は全く同じ。ただ選択の名は甚だ廃立を便ず。取捨を具すが故に。今引く助顕の旨ここにあり。

二に会釈

双卷経意止准此応知

(『双卷経』(大経・上)の意また選択の義あり。いはく、「二百一十億の諸仏の妙土の清浄の行を撰取す」といふこれなり。選択と撰取とその言異なりといへども、その意これ同じ。しかれば不清浄の行を捨てて、清浄の行を取る。上の天・人の善悪、国土の粗妙、その義またしかなり。これに准じて知るべし。)

「双卷経」とは大本の上下あるが故に。要集は双観経と称す。けだし同義なり。文意見るべし。

三に正しく選択の相を明かすに二。初は総じて諸願の相を明かす。二に別して選択の行を判ず。初に総じて諸願の相を明かすに二。初は五願に就いて明かす。二に諸願の例を挙ぐ。初に五願に就いて明かすに二。初は前の四願を明かす。二に第十八を明かす。今は初。

凡約四十止云選択也

(それ四十八願に約して、一往おのおの選択撰取の義を論ぜば、第一に無三悪趣の願は、覩見するところの二百一十億の土のなかにおいて、あるいは三悪趣ある国土あり。あるいは三悪趣なき国土あり。すなはちその三悪趣ある粗悪の国土を選捨て、その三悪趣なき善妙の国土を選取す。ゆゑに選択といふ。第二に不更悪趣の願は、かの諸仏の土のなかにおいて、あるいはたと

ひ国のなかに三悪道なしといへども、その国の人天寿終りて後に、その国より去りてまた三悪趣に更る土あり。あるいは悪道に更らざる土あり。すなはちその悪道に更る粗悪の国土を選捨て、その悪道に更らざる善妙の国土を選取す。ゆゑに選択といふ。第三に悉皆金色の願は、かの諸仏の土のなかにおいて、あるいは一土のなかに黄・白二類の人天ある国土あり。あるいはもつばら黄金色の国土あり。すなはち黄・白二類の粗悪の国土を選捨て、黄金一色の善妙の国土を選取す。ゆゑに選択といふ。第四に無有好醜の願は、かの諸仏の土のなかにおいて、あるいは人天の形色好醜不同の国土あり。あるいは形色一類にして好醜あることなき国土あり。すなはち好醜不同の粗悪の国土を選捨て、好醜あることなき善妙の国土を選取す。ゆゑに選択といふ。)

「無三悪趣の願」とは、寂は「令国無悪趣願」と云う。興は「無若苦願」と云う。智光は「国土嚴淨無諸悪趣願」と云い（御廟全く同じ）、また「就人天趣願」と云う。法位・玄一・恵心・静照・真源及び吉水すなわち今の名なり。

「三悪」とは、具さに涅槃十六、念経十六、大集二[443b]十の日密品、長含十九（十三）、智論三十（十四）、『仏地論』六（三紙）、瑜伽四（十二）、地持八、雑心八、『婆娑』七十二（四紙）、また百七十二（六紙）、俱舍十一（五紙）の世間品、順正理三十一（八）、嘉祥の妙疏十一（六紙）、玄讚二（三十紙）、また六（三十四）等の説のごとし。

問う。現有する「鳧・雁」（『観経』、註釈版一〇一）等は何。

答う。経には云わざるか。「欲令法音宣流变化所作」故に。『礼讚』に云く、

鳥群、実の鳥にあらず。天類あに眞の天ならんや。（七祖註釈版六九七）

問う。五趣の横截、何ぞ三塗に止めん（※なぜ無五悪趣願でないのか？）。

答う。劣機を先に表す故に。その実は昇道無極。横截の益、何ぞ五趣に止めん。これ大智門。今は三塗を先として、凡をして欣慕せしむ。これ大悲門。あに思議すべきかな。

「不更悪趣の願」とは、影は「命終不向他国受苦願」と云う。寂は「命終

復不更惡願」と云う（恵心、静照、真源、澄顯、これに同じ）。法位・玄一は「無惡趣願」と云う。興は「無壞苦願」と云う。智光は「有情命終展轉増上願」と云う（御廟これに同じ）。吉水すなわち今の名なり。

「寿終」とは、妙用自在、出沒長短随意に得るが故に。宗家はいわゆる如化非化、還相神力、あに思議すべきか。

問う。すでに眷属長寿を云う。今何ぞ寿終を云うや。

答う。あに云わずや。「除其本願修短自在神力」、今「寿終」と云うはその義なり。これすなわち別徳にして、還來度人の相なり。漢訳に云く、「我が国より來生する者あらんに、我が国より去りて」（浄真全一・二〇八）と。いわゆる不來にして來、不去にして去、不動遍至、一妙相なり。遍至不動も一妙相なり。

「悉皆金色」とは、寂は「身皆金色願」と云う（恵心これを用いる）。法位・玄一は「色齊等願」と云う。智光[444a]は「所化成就紫磨金色願」と云う。御廟は「真金色願」と云う。吉水すなわち今の名なり。

「真金色」とは、無漏清淨の相なり。宗家云く、金剛無漏の体なり。また云く、究竟解脱金剛身、あに思議すべきや。龍樹の偈云く、「人天身相同（第四偈）、なお金山頂のごとし（第三願）」（浄真全一・四一五）と。

「無有好醜願」とは、寂は「令形無好醜願」と云う。恵心は「無好醜別願」と云う。智光は「有情容顏均等無差別願」と云う。静照・真源及び吉水すなわち今の名なり。

「形色」とは、顯色に約す。すなわち四中の一（黄色）なり。今すなわち形色、すなわち八中の一（正色）なり。

「無有」等とは、内徳、平等なるが故に、外相もまた平等。影の正なる形の正なるによるがごとし。

「好」は妍好、「醜」は醜惡、余文は見るべし。

二に第十八に明かすに二。初に汎に取捨の境を明かす。二に正しく取捨の相を明かす。初の汎に取捨の境を明かすに二。初に一土一行、二に多少不定。今は初。

乃至第十止一往之義也

（乃至、第十八の念仏往生の願は、かの諸仏の土のなかにおいて、あるいは

布施をもつて往生の行となす土あり。あるいは持戒をもつて往生の行となす土あり。あるいは忍辱をもつて往生の行となす土あり。あるいは精進をもつて往生の行となす土あり。あるいは禅定をもつて往生の行となす土あり。あるいは般若「第一義を信ずる等これなり。」をもつて往生の行となす土あり。あるいは菩提心をもつて往生の行となす土あり。あるいは六念をもつて往生の行となす土あり。あるいは持経をもつて往生の行となす土あり。あるいは起立塔像、飯食沙門および孝養父母、奉事師長等の種々の行をもつておのの往生の行となす国土等あり。あるいはもつばらその国の仏の名を称して往生の行となす土あり。かくのごとく一行をもつて一仏の土に配することは、これしばらく一往の義なり。）

六度名義、具さに義章（十二之三十五紙）、孔目（二之二紙）等の説のごとし。

「菩提心」とは、四弘誓願。次上の釈のごとし。

「六念」とは、北本涅槃十七（二十三）・二十五（二十三）に云く、「念仏念法、念僧念戒、念施念天」これなり。具さに義章（十二之十五紙）等の説のごとし。

「持経」とは、四安樂行五種法師等、集下（十六紙）云々のごとし。

「持呪」とは、陀羅尼を持つに等し。集下（二十二）**[444b]**云々のごとし。

「起立」等とは、これを要すれば三福散善、三世諸仏の浄業正因の者なり。

「専称仏名」とは、『十住論』に指す所、『宝月童子所問経』の「阿惟越致品」の説のごときは是なり。

二に多少不定

再往論之不可具述也

（再往これを論ぜば、その義不定なり。あるいは一仏の土のなかに、多行をもつて往生の行となす土あり。あるいは多仏の土のなかに、一行をもつて通じて往生の行となす土あり。かくのごとく往生の行、種々不同なり。つぶさに述べべからず。）

次下は推論広論、その相けだし維摩（佛国品）の隨願往生等の意によるのみ。

二に正しく取捨の相を明かす

即今選捨止云選択也

（すなはちいま前の布施・持戒、乃至孝養父母等の諸行を選捨して、専称仏号を選取す。ゆゑに選択といふ。）

文意分明なり。在昔に梅尾は今集を難じて云く、「菩提心をもって所廢の行となす」と。ことに菩提心に二種あることを知らず。自力起行をもって所廢となし、他力安心をもって所立となす。『和語灯』一（十二）（云々。浄土宗の意は、浄土にむまれんとねかふを菩提心という等）、信本（二十七）に云く、

しかるに菩提心について二種あり。一つには豎、二つには横なり。（乃至）横超とは、これすなはち願力回向の信樂、これを願作仏心といふ。願作仏心すなはちこれ横の大菩提心なり。これを横超の金剛心と名づくるなり。
（註釈版二四六）

ああ、梅尾何を思わざるか。

二に諸願の例を挙ぐ

且約五願止准之応知

（しばらく五の願に約して略して選択を論ずること、その義かくのごとし。自余の諸願はこれに准じて知るべし。）

選捨摂取の義、准じて知るべし。また註論の二浄三嚴のごとし。一一これを論ず。

[445a]

二に別して選取の行を判ずに二。初に聞、二に答。今は初。

問曰普約^止往生本願乎

(問ひていはく、あまねく諸願に約して粗悪を選捨し善妙を選取すること、その理しかるべし。なんがゆゑぞ、第十八の願に、一切の諸行を選捨して、ただひとへに念仏一行を選取して往生の本願となしたまふや。)

文意見るべし。

二に答に二。初に二義を標す。二に二義を釈す。今は初。

答曰聖意^止難易義

(答へていはく、聖意測りがたし。たやすく解することあたはず。しかりといへどもいま試みに二の義をもつてこれを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。)

序題門に云く、

また仏の密意弘深なり、教門曉めがたし。三賢・十聖も測りて窺ふところにあらず。いはんやわれ信外の軽毛なり、あへて旨趣を知らんや。

(七祖篇註釈版三〇一)

「試みに」とは、恐慮謙退の辞なり。

二に二義を釈すに二。初に勝劣の義、二に難易の義。初の勝劣の義に三。初は標、二に釈、三に決。今は初。

初勝劣者^止余行是劣

(初めの勝劣とは、念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。)

勝易の二義、上は法徳に約し、下は機受に約す。上は信法を成じ、下は信機を成ず。上は恭敬を生じ、下は慚愧を生ず。当に知るべし、二義の教相、安心と行儀は須臾に離るべからず。しかして離るべきは淨門の人にあらざる

なり。三部の所詮、列祖の相承、ただここにあるが故に。

二に釈に二。初は法、二は譬。今は初。

所以者何^止是以為劣

（所はいかんとならば、名号はこれ万徳の帰するところなり。しかればすなはち弥陀一仏のあらゆる四智・三身・十力・四無畏等の一切の内証の功德、相好・光明・説法・利生等の一切の外用の功德、みなことごとく阿弥陀仏の名号のなかに撰在せり。ゆゑに名号の功德もつとも勝となす。余行はしからず。おのおの一隅を守る。ここをもつて劣となす。）

「万徳の帰するところなり」とは、その文は甚だ多し。試みに一二を挙げれば、元照（行巻引用）に云く、

一乗の極唱、終帰をことごとく樂邦を指す。万行の円修、最勝を独り果号に推る。

また慈雲（行巻引用）に云く、

了義のなかの了義なり。円頓のなかの円頓なり。

また戒度（行巻所引）に云く、

仏名はすなはちこれ劫を積んで薰修し、**[445b]**その万徳を攬る、すべて四字に彰る。

また嘉祥（行巻引用）に云く、

仏に無量の功德います。仏の無量の功德を念ずるがゆゑに、無量の罪を滅することを得しむ。

また飛錫（行巻引用）に云く、

念仏三昧の善、これ最上なり。万行の元首なるがゆゑに、三昧王といふ。

これら諸文は皆その義なり。

「四智」とは、『心地観経』（報恩品）および『唯識』（第十）等に依りて云く、

一は大円鏡智（第八識なり。転識得智）、二は平等性智（第七識也。転識得智）、三は妙観察智（第六識也。転識得智）、四は成所作智（前五識也。転識得智）

「三身」とは、『義章』十九（十三）、『義林』七本（初一）に依りて云く、
「一は法身、二は報身、三は応身」と。法身義のごとし。

「十力」とは、『義章』七末（六紙）、『俱舍』二十七等に依りて云く、
一は処非処智力（処は理を言ずるがごとし。情と非情に通じ、理と非理を知る）、二は業異熟智力（業所感の異熟を知るなり）、三は等持等至智力（諸の三昧を知る）、四は根上下智力（信等の根の上下を知るなり）、五は種種勝解智力（有情の勝れし意樂の別を知るなり）、六は種種界智力（有情の志の性相を知るなり）、七は遍趣行智力（生死の因果の相を知るなり）、八は宿住随念智力（自他の宿住の諸事を知るなり）、九は生死智力（未来の世相を知るなり）、十は漏尽智力（諸の漏尽なり）。

「四無畏」とは、『義章』七末（六紙）、『大論』二十五等に依る。一は一切智無所畏、二は漏尽無所畏、三は説障道無所畏、四は説尽苦道無所畏（按ずるに次のごとく智断。断の中、三となす。謂く、惑業苦）。

当に知るべし、四智はよく三身を生ず。所生の三身はよく十力を具す。所具の十力は内徳、四無は外相なり。

「相好」とは、いわゆる八万四千の相及び好なり。

「光明」とは、相好の所放なり。

「説法」とは、いわゆる今現在説法これなり。

「利生」とは、十方三世[446a]の利益無極なり。余分解すべし。
「一隅」とは、『論語』述而に云々。

二に譬。

譬如世間止以此応知

(たとへば世間の屋舎の、その屋舎の名字のなかには棟・梁・椽・柱等の一切の家具を撰せり。棟・梁等の一々の名字のなかには一切を撰することあたはざるがごとし。これをもつて知るべし。)

依教分記(?)に、屋舎の譬をもつて六相義を合すもまた転用なり。応のごとく知るべし。

三に結。

然則仏名止為本願敷

(しかればすなはち仏の名号の功德、余の一切の功德に勝れたり。ゆゑに劣を捨てて勝を取りてもつて本願となしたまへるか。)

文意見るべし。

二に難易義に三。初は標。二に文証を引く。三にその義を積す。今は初。

(※省略…次難易義止諸行難修)

(次に難易の義とは、念仏は修しやすし、諸行は修しがたし。)

二に文証を引くに二。初は礼讃、二に要集。今は初。

是故往生止相續即生

(このゆゑに『往生礼讃』にはく、「問ひていはく、なんがゆゑぞ、観をなさしめずしてただちにもつぱら名字を称せしむるは、なんの意かあるや。答へていはく、すなはち衆生障重く、境は細く心は粗し。識颺り神飛びて、

観成就しがたきによるなり。ここをもつて大聖（釈尊）悲憐して、ただちにもつばら名字を称せよと勧めたまふ。まさしく称名の易きによるがゆゑに、相續してすなはち生ず」と。「以上」

前序の文なり。行巻（十八紙）にまた引きて大行を証す。

この中二となす。初は問。次に答。問意見るべし。

答にまた二となす。初は観の成し難きを示す。「乃由」等の文これなり。次に称の修し易きを明す。「是以」等の文これなり。

難に三義あり。一は罪障深重難。これその体に約す。二は心境不応難。これその相に約す。境はすなわち二淨三嚴微妙の相なるが故に。心はいまし散地麤動なるが故に。三に乱想飛颺難。これその用に約す。識・神はただこの心の異名のみ。

易にまた三義。一は無障重難。逆謗闡提を捨てざるが故に。二に無不応難。観行の威儀を須みざるが故に。三に無乱想難。時処諸縁を問わざるが故に。その易は何ぞ局るや。かつ反示のみ。

[446b] 二に要集

又往生要集止不如念仏

（また『往生要集』（下）に、「問ひていはく、一切の善業おのおの利益あり、おのおの往生を得。なんがゆゑぞただ念仏一門を勧むるや。答へていはく、いま念仏を勧むることは、これ余の種々の妙行を遮せんとはあらず。ただこれ男女・貴賤、行住坐臥を簡ばず、時処諸縁を論ぜず、これを修するに難からず、乃至、臨終に往生を願求するに、その便宜を得たるは念仏にかざればなり」と。「以上」）

第八念仏証拋門の文なり。和讃に云々。この文二となす。初は問、次は答。問意見るべし。答中にまた二。

初は先づ余行を遮せざるを示す。「今勧」等の文これなり。これ『群疑論』第五（十六紙）の文に依る。従容としてこれを示す。今師は台門にあるが故に。

二は正しく勧めるは念仏にしかず、ただこれ已下の文これなり。これにま

た三あり。一は男女貴賤を問わざるが故に。これその体に約す。二は行住座臥を簡ばざるが故に。これその相に約す。三は時処諸縁に論ぜざるが故に。これその用に約す。上の余行のごときは、反じて三難あり。余文解すべし。

三はその義を積すに三。初は総示、二は別示、三は引文の結。今は初。

故知念仏易止為本願歟

(ゆゑに知りぬ、念仏は易きがゆゑに一切に通ず。諸行は難きがゆゑに諸機に通ぜず。しかればすなはち一切衆生をして平等に往生せしめんがために、難を捨て易を取りて、本願となしたまへるか。)

文意見るべし。

二に別示

若夫以造止其本願也

(もしそれ造像起塔をもつて本願となさば、貧窮困乏の類はさだめて往生の望みを絶たん。しかも富貴のものは少なく、貧賤のものはなほ多し。もし智慧高才をもつて本願となさば、愚鈍下智のものはさだめて往生の望みを絶たん。しかも智慧のものは少なく、愚痴のものはなほ多し。もし多聞多見をもつて本願となさば、少聞少見の輩はさだめて往生の望みを絶たん。しかも多聞のものは少なく、少聞のものはなほ多し。もし持戒持律をもつて本願となさば、破戒無戒の人はさだめて往生の望みを絶たん。しかも持戒のものは少なく、破戒のものはなほ多し。自余の諸行これに准じて知るべし。まさに知るべし、上の諸行等をもつて本願となさば、往生を得るものは少なく、往生せざるものは多からん。しかればすなはち弥陀如来、法蔵比丘の昔平等の慈悲に催されて、あまねく一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行をもつて往生の本願となしたまはず。ただ称名念仏一行をもつてその本願となしたまへり。)

已下は四双八重。余行の難を示す。一雙二重は念仏の易を勧む。預じめ『五会讚』の意を述べる者なり。「以造」等とは、「貧窮と富貴とを」(※将富貴)

簡ばず」の文の意を述讚するなり。「若以智慧」等とは、「下智と高才とを簡ばず」の意を述ぶるなり。「若以多聞」等とは、「多聞を簡ばず」の意を述ぶるなり。「若以持戒」等とは、「淨戒を持つを簡ばず」の意を述ぶるなり。「自余」等とは、総じて一切余行の難を撰むるなり。「当知」等とは、「被（※彼の誤字）仏因中」等の二句の意を述ぶるなり。

[447a] 三に引文の結

故法照禪師_止變成金

（ゆゑに法照禪師の『五会法事讚』にいはく、

「かの仏の因中に弘誓を立てたまへり。名を聞きてわれを念ぜばすべて迎へに来らん。貧窮と富貴とを簡ばず、下智と高才とを簡ばず、多聞にして淨戒を持つを簡ばず、破戒にして罪根の深きをも簡ばず。ただ心を回して多く念仏せば、よく瓦礫をして変じて金となさしめん」と。〔以上〕

禪師の事蹟は、具さに宋僧伝二十一のごとし。往生略伝に云く、「後に法照大師あり。すなわち善導の後身」と。法要二（四十一）、唯信文意に云々。正しくこれ十八願を明かすの文なり。

三に本願の成不を決すに二。初は問、二は答。今は初

問曰一切_止未成就也

（問ひていはく、一切の菩薩はその願を立つといへども、あるいは已成就あり、また未成就あり。いぶかし、法蔵菩薩の四十八願はすでに成就すとやなさん、はた未成就とやなさん。）

文意見るべし。

二の答に二。初は総じて成就を答う。二に別してその義を釈す。今は初。

答曰法蔵_止一一成就

(答へていはく、法蔵の誓願、一々に成就す。)

文意見るべし。

二に別してその義を積すに二。初は先に三願を挙ぐ。二に正しく一願を積す。今は初。

何者極樂止二相是也

(いかんとならば、極樂界のなかにすでに三惡趣なし。まさに知るべし、これすなはち無三惡趣の願(第一願)を成就するなり。なにをもつてか知ることを得る。すなはち願成就の文(大經・上)に、「また地獄・餓鬼・畜生、諸難の趣なし」といふこれなり。またかの国の人天寿終りて後に、三惡趣に更ることなし。まさに知るべし、これすなはち不更惡趣の願(第二願)を成就するなり。なにをもつてか知ることを得る。すなはち願成就の文(大經・下)に、「またかの菩薩、乃至成仏まで惡趣に更らず」といふこれなり。また極樂の人天すでもつて一人として三十二相を具せずといふことあることなし。まさに知るべし、これすなはち具三十二相の願(第二十一願)を成就するなり。なにをもつてか知ることを得る。すなはち願成就の文(同・下)に、「かの国に生るるものは、みなことごとく三十二相を具足す」といふこれなり。)

余文上のごとし。

「三十二相願」とは、寂は令具諸相願と云う。良源は所化成滿三十二相願と云う。今はすなわち用の名義。具さに『報恩經』七(十三)、『大集』六(十四)、『因果經』一(二十二)、『大般若』三百八十一(五紙)、また四百六十九、また五百七十三、『宝女所問經』四(三十二)、『勝天王般若』七(八紙)、『大莊嚴經』三(二十紙)、『座禪三昧經』上(二十四)、『優婆夷淨行法門經』上(十二紙)、『仏本行集經』九(三紙)、『優婆塞戒經』一(十八)、『賢劫經』五(三十二)、『中含』十一(四紙)、また四十一(五紙)、『長阿含』一(十九)、『菩薩善戒經』九(八)、『小品』二十七(三紙)、『智論』四(十八)、また二十五(十五)、また八[447b]十八(二十二)、『瑜伽』四十九(七紙)、『大毘婆娑』一百七十七(二紙)、『十住論』八(十九)等のご

とし。近くは会疏等の説のごとし。

二に正しく十八を釈すに五。初は余を例えて推知す。二に文を挙げて証となす。三に土に就いて況釈す。四に仏に就いて比証す。五に文を挙げて合符す。今は初。

如是初自_止皆以往生

(かくのごとく初め無三悪趣の願(第一願)より終り得三法忍の願(第四十願)に至るまで、一々の誓願みなもつて成就す。第十八の念仏往生の願、あに孤りもつて成就せざらんや。しかればすなはち念仏の人みなもつて往生す。)

「得三法忍」とは、寂は聞名令得至三法忍願と云う。興は自力不退願と云う。

「三法忍」とは下説に、一者音響忍、二者柔順忍、三者無生法忍、これなり。解して二義あり。一の通途は、『月灯三昧経』二に云く、「一は随順音響忍と名く(聞慧)、二は思惟柔順忍と名く(思慧)、三は修習無生忍と名く(修慧)」(※大正蔵一五・五六中二四)と。次のごとく三慧はその所得の位を三法忍と名く。二に別途とは、浄家の別義。聞其名号故に音響、信心歡喜故に柔順、即得不退故に無生。三即一故に、別拆すべからず。余文は解すべし。

二に文を挙げて証となす

以何得知_止退轉是也

(なにももつてか知ることを得る。すなはち念仏往生の願成就の文(同・下)に、「もろもろの衆生ありて、その名号を聞きて信心歡喜して、乃至一念、心を至して回向してかの国に生ぜん」と願すれば、すなはち往生を得て不退轉に住す」といふこれなり。)

文意上のごとし。

三に土に就いて況積す。

凡四十八願^止往生願乎

(おほよそ四十八願莊嚴の浄土は、華池・宝閣、願力にあらずといふことなし。なんぞそのなかにおいて独り念仏往生の願を疑惑すべきや。)

所生の土はすでに成就しおわんぬ。能生の人あに空過かな。天台大師臨終偈に云く、「四十八願は[48a]浄土を莊嚴す。華池宝閣、易往にして人なし」と。『礼讃』に云く、「四十八願莊嚴起」等。造語はこれ等に依るのみ。

四に仏に就いて比証す。

加之一一^止不可虚設

(しかのみならず一一の願の終りに、「もししからずは、正覚を取らじ」といふ。しかも阿弥陀仏、仏になりたまひてよりこのかたいまに十劫、成仏の誓すでもつて成就せり。まさに知るべし、一々の願虚設すべからず。)

能化の主、果徳すでに満ちる。所化の伴、往生いづくんぞ疑う。今において十劫は華園の記のごとし。

五に文を挙げて合符す。

故善導云^止必得往生

(ゆゑに善導いはく(礼讃)、「かの仏いま現に世にましまして仏になりたまへり。まさに知るべし、本誓重願虚しからず、衆生称念すればかならず往生を得」と。「以上」)

本文を結帰す。上に准じて解すべし。

四に経釈の相違を会すに二。初に念声の相違を会す。二に乃下の相違を会す。初めに念声の相違を会すに二。初は問、二は答。今は初。

問曰經云止之義云何

(問ひていはく、『經』(大經・上)には「十念」といふ、「善導の」釈には「十声」といふ。念・声の義いかん。)

文意見るべし。

二に答えに二。初は一を示す。二に引証。今は初。

答曰念声是一

(答へていはく、念・声は是一なり。)

法要二十一(三十七)の一代聞書に云々(念声是一といふことしらずと申し候ふとき、仰せに、おもひ内であればいろ外にあらはるとあり。されば信をえたる体はすなはち南無阿弥陀仏なりとこころうれば、口も心もひとつなり【註釈版一三三二】)。同二(六十三)、唯信文意云々(念と声とはひとつこころなり【※原本…とするべし】)。念をはなれたる声なし、声をはなれたる念なしとするべし【※原本…念なり】【註釈版七一七】)。この義意に准ず。

念声是一とは、信行不離の義を顕すなり。古に「念経は等し」の例を引くは非なり。「念経は等し」の念はただこれ俗語。全く今意にあらず。もし法数に約せば、念はこれ作発の意。念の声はこれ所発の語【48b】声。色心の体は別。能所の義は異。しかりといえども本願の円宗【?】は、色心不二。d法徳しからしむるが故に。

二に引証に二。初は觀経を引く。二に大集経を引く。初に觀経を引くに二。初は引。二は釈。

何以得知止其意明矣

(なにをもつてか知ることを得る。『觀経』の下品下生にのたまはく、「声をして絶えざらしめて、十念を具足して、(南無阿弥陀仏)と称せば、仏の名を称するがゆゑに、念々のうちにおいて八十億劫の生死の罪を除く」と。いまこの文によるに、声はこれ念なり、念はすなはちこれ声なり。その意明らかし。)

これは正証となす。旨は上述のごとし。

二に大集経を引く。

加之大集_止即是唱也

(しかのみならず『大集月藏経』にのたまはく、「大念は大仏を見、小念は小仏を見る」と。感師(懐感)の『釈』(群疑論)にははく、「大念といふは大声に仏を念じ、小念といふは小声に仏を念ずるなり」と。ゆゑに知りぬ、念はすなはちこれ唱なりと。

文は日藏分第九念仏三昧品に出づ。今は「月藏」と云う。恐らくは写誤か。もし本経に依らば、念はすなわち觀念なり。

感師の釈は口称となす。今の引は助証となすものなり。

「感師の『釈』」とは、『群疑論』第七に出づ。

二に乃下相違に会すに二。初は正しく相違を会す。二に因みに願名を定め。初は問、二は答。今は初。

問曰経云_止其意如何

(問ひていはく、『経』(大経・上)には「乃至」といひ、「善導の」釈には「下至」といふ。その意いかん。)

文意知るべし。

二に答に二。初は一を示す。二は広釈。今は初。

答曰乃至_止其意是一

(答へていはく、乃至と下至とその意これ一なり。)

文意知るべし。

二に広釈に三。初は義に就いて示す。二は願を挙げて示す。三は結。今は初。

經云乃至^止上尽一形等（※原本：「等」はなし）也

（『經』に「乃至」といふは、多より少に向かふ言なり。多といふは上一形を尽すなり。少といふは下十声・一声等に至るなり。釈に「下至」といふは、下とは上に対する言なり。下とは下十声・一声等に至るなり。上とは上一形を尽すなり。）

「十声一声」等とは、『礼讚』の後序に云く、「十声乃至一声一念等」（註釈版七祖篇七一）と。一声は行の一念なり。一念は信の一念[449a]なり。これに准じてこれを言わば、今は聞信の一念に等し。これ信樂開發の時剋の極促を顕すなり。ここをもつて一念は願行具足、業事成弁、往生治定の時剋となす。もしその命延びなば、自然に多念に及ぶ。あるいは一声、あるいは十声、あるいは一形、一一の称仏は願行具足にして、ともにこれ信後の相続の称名なり。法要一（四十六）の銘文に云々（「下至」といふは十声にあまされるもの、一念二念聞名のを、往生にもらさずきはぬことをあらはししめすとなり（略本。真聖全一・五六八））。

二に願を挙げて示す

上下相對^止是下至也

（上下相對の文その例多しといへども、宿命通の願（第五願）にのたまはく（同・上）、「たとひわれ仏を得たらんに、国のうちの人天宿命を識らずして、下百千億那由他諸劫の事を知らざるに至るといはば、正覚を取らじ」と。かくのごとく五神通および光明・寿命等の願のなかに、一々に「下至」の言を置く。これすなはち多より少に至り、下をもつて上に対する義なり。上の八種の願に例するに、いまこの願の「乃至」はすなはちこれ下至なり。）

「八種の願」とは、第五の宿命、第六の天眼、第八の他心、第九の神足、第十二三の光明寿命、第十四の声聞の願、これなり。文意見るべし。

二に結釈

是故今^止不相違

(このゆゑにいま善導の引釈するところの「下至」の言、その意相違せず。)

文意見るべし。

二に因みに願名を定む

但善導^止念之故也

(ただし善導と諸師とその意不同なり。諸師の釈には別して十念往生の願(第十八願)といふ。善導独り総じて念仏往生の願といへり。諸師の別して十念往生の願といふは、その意すなはちあまねからず。しかる所以は、上一形を捨て、下一念を捨つるゆゑなり。善導の総じて念仏往生の願といふは、その意すなはちあまねし。しかる所以は、上一形を取り、下一念を取るゆゑなり。)

「諸師」等とは、智光は「諸縁信樂十念往生願」と云う。良源は「聞名信樂十念定生願」と云う。真源は「十念往生願」と云う。法位・玄一は「称名十念」にあらずと云う。余文解すべし。

選択集通津録卷二終

【科段④ (随文釈)】

二に本願章

標章

引文

大經

觀念門

礼讚

私釈

且く願の総別を分つ
広く別願の相を釈す

発願の時処を明かす

大経を引く

已過の仏を明かす

今値の仏を明かす

発願相を明かす

選択の相を明かす

師仏の説

法蔵の選

異訳を引く

選択の名義を積す

正積

会積

正しく選択の相を明かす

総じて諸願の相を明かす

五願について明かす

前の四願を明かす

第十八を明かす

汎に取捨の境を明かす

一土一行

多少不定。

正しく取捨の相を明かす

諸願の例を挙ぐ

別して選択の行を判ず

問

答

二義を標す

二義を積す

勝劣の義

標

積

法

譬

結

難易の義

標

文証を引く

札讚

要集

その義を積す

総示

別示

引文の結

本願の已成（成不）を決す

問

答

総じて成就を答う

別にその義を積す

先に三願を挙ぐ

正しく一願（十八）を積す

余を例えて推知す

文を挙げて証となす

土に就いて況積す

仏に就いて比証す

文を挙げて合符す

経釈の相違を会す

念声の相違を会す

問

答

一を示す

引証

観経を引く

引

積

大集経を引く

乃下の相違を会す

正しく相違を会す

問 答

一を示す

広釈

義に就いて示す

願を挙げて示す

結

因みに願名を定む

[49b]

選択集通津録卷三

芸州報専 慧雲著

四に三輩章に三。初は標章。二に引文。三は私釈。今は初。

三輩念仏止往生之文

【4】 三輩念仏往生の文。

今章の来意は、上に准じて二義。もし文に約せば、大経の四文。願文は初に居す。三輩は第二。次第知るべし。もし義に約せば、念仏の機を広く三願に亘り、普益無窮の相を助顕するのみ。

三輩章とは、あるいは(聞香)三輩念仏往生章と云い、あるいは(決疑)三輩念仏往生篇と云い、あるいは(鵜木要義本義)三輩念仏章と云い、あるいは(大綱)三輩念仏篇と云い、あるいは(私集)三輩章と云う。名異義同なり。今はまた略に従う。

この文は多含にして、古くは三解あり。

一は鸞師に依る。二は吉水に依る。三は宗祖に依る。初の二解のごときは真土義を成ず。すなわち上の十八願成の別相。何をもってこれを言わば、讚偈は「傍経」と別嘆を設けず。今集の章段、第三及び四と、編次は連接す。第三解のごときは、今家の別義。方便蔵に約す。

初の鸞師に依るとは、註下（二十紙）に云く、

王舎城所説の『無量寿経』を案ずるに、三輩生のなかに、行に優劣ありといへども、みな無上菩提の心を発さざるはなし。この無上菩提心とは、すなはちこれ願作仏心なり。願作仏心とは、すなはちこれ度衆生心なり。度衆生心とは、すなはち衆生を攝取して有仏の国土に生ぜしむる心なり。このゆゑにかの安樂浄土に生ぜんと願ずるものは、**[450a]** かならず無上菩提心を発すなり（この文、信本三十及び信末三に引証。また和讃（云々））

この積意に准ずれば、発菩提心はすなわちこれ浄土の大菩提心。一向専念は他力の称名。その余の説相はただこの差別のみ。尅してこれを言わば、上文に「諸有衆生」と言うの品類なり。讚偈巧みにこれを略撰す。「諸聞」の一句（？）は余所に弁ずるがごとし。当にしるべし、また説く。次上の真実大信の章の意なり。ただ文の仮に通ずるをもつて異となすのみ。

二に吉水に依らば、次下に弁ずるがごとし。かくのごとき積意、廢立を正となす。名号定散対の意を見るべし。品位は機に属す。法は唯一法、文は一向専念と云うこれなり。

鸞師は心に就き、空師は行に就く。心行異なるといへども、廢立これ同じくまた合す。次上の大信章の意と合するなり。

三に宗祖に依らば、化土本（初）に十九願を引いてすでに云く、

この願成就の文は、すなはち三輩の文これなり、『觀経』の定散九品の文これなり（法要一（初）三经文類は全文を引く）。

この積意に依らば、化土の生に約す。いわゆる仮の浄土の因は千差、土もまた千差、その千差の中に就いて略して五三を挙げるのみ。意は二十願自力念仏に通ず。これ等三義は同じにしてこれ師説。仰いで信じて止む。同じく別門中の、または同または異の例なり。

二に引文に二。初は総標、二は別説。今は初。

仏告阿難十方凡有三輩

（「[仏、阿難に告げたまはく、へ十方世界の諸天・人民、それ心を至しか](#)

の国に生ぜんと願ずることあるに、おほよそ三輩あり。）

「十方」等とは、もし二師の准ずれば、第十八願の所被の機なり。別に祖判に依らば、方便二願の所被の機なり。

「其有至心」、また准知す。

[450b] 二に別説に三。初は上輩、二は中輩、三は下輩。今は初。

其上輩者止願生彼国

（その上輩は、家を捨て欲を棄てしかも沙門となりて、菩提心を発して一向にもつばら無量寿仏を念じ、もろもろの功德を修してかの国に生れんと願ふ。これらの衆生は、寿終る時に臨みて、無量寿仏、もろもろの大衆とその人の前に現じて、すなはちかの仏に随ひてその国に往生して、すなはち七宝の華のなかにおいて自然に化生して不退転に住す。智慧勇猛、神通自在なり。このゆゑに阿難、それ衆生ありて今世において無量寿仏を見たてまつらんと欲はば、無上菩提の心を発し、功德を修行しかの国に生ぜんと願ずべし」と。）

「其上輩」とは、標挙。

「捨家」等とは、もし二師に順ずれば機の差品を示す。

中に就いて「発菩提」等とは、もし鸞師に准ずれば、もって安心となす。上の「信心歡喜」と同じ。もし今集に准ずれば、もって起行となす。所廢の行を成ず。別して祖判に依らば、十九願中、修諸功德至心發願の相なり。

「一向」等とは、もし二師に准ずれば、弘願大行。上の乃至一念と同じ。別に祖判に依らば、要門及び真門の念仏。

「修諸」等とは、もし二師に准ずれば、機の差品を示す。

中に就いて鸞師は信後の行となし、今集は所廢の行となす。別して祖判に依らば、十九の願成なり。

「願生」等とは、真化二土、応のごとく准じて解す。

「此等」等とは、終時の相を示す。もし二師に准ずれば、顕現の真益。別して祖判に依らば、来迎の仮益。いわゆる臨終現前の願益なり。

「即随」等とは、往生の相を示す。もし二師に准ずれば、真土化土。上の「即得往生」と互相、義を成ず。いわゆる「如来淨華衆、正覺華化生」の者

なり。別して祖判に依らば、なお化土に属す。『観経』の上上品とその相、真に逼る。なお化土に属すに同じ。

「住不」等とは、もし一師に准ずれば、真土不退にして、涅槃の異名なり。別して祖判に依らば、化土不退、いわゆる処不退の願なり。

「智慧」等とは、もし一師に准ずれば、真土聖衆・内徳外用不思議相なり。別して祖判に依らば、ただこれ真化の交際、殆ど真に逼る者なり。

因って問う。宗祖の常判、その化土に生ずれば[451a]三宝を見ず。衆生を利せず、含華未出故に。不審、三輩九品何ぞその生相殊特にして祖判と違ふなり。

答う。あに云わざるや。仮の因は千差、土もまた千差。中について含華未出の者あり。開華已出の者あり。各一相を挙げるにまた何ぞ多相あるを妨げる者かな。それ開華已出の者といえども、いまだ真土を見ず。願心莊嚴の三宝の往相証果いまだ達せざる者なり。往相いまだ達せずば、何ぞ還相あらん。これによってこれを判ず。三輩九品は許多勝相にして、他を出でず。いわゆる他受用の報の域の者なり。何ぞ唯仏与仏、乃し能く知見の境を達せん。故に抑貶して含華未出と云うのみ。当に知るべし、含華未出は当体得名及び貶抑得称(?)を有するなり。貶抑得称は例えば『論註』上(十八)の譏嫌の名を釈して云うがごとし。

軟心の菩薩のはなはだしくは勇猛ならざるを、譏りて声聞といふがごとし。人の諂曲なると、あるいはまた俸弱なるを、譏りて女人といふがごとし。また眼あきらかなりといへども事を識らざるを、譏りて盲人といふがごとし。また耳聴くといへども義を聴きて解らざるを、譏りて聾人といふがごとし。また舌語ふといへども訥口蹇吃なるを、譏りて瘖人といふがごとし。(註釈版七・七六)

また三論家の中仮師を仏と見ざるに等しと云うがごとし。並にこの抑貶の謂なり。

「是故」等とは、結勸。上に准じて解すべし。

二に中輩

仏告阿難^止次如上輩者也

（ 仏、阿難に語りたまはく、へその中輩は、十方世界の諸天・人民、それ心を至してかの国に生ぜんと願ずることあるに、行じて沙門となることあたはずといへども、大きに功德を修し、まさに無上菩提の心を発して、一向にもつばら無量寿仏を念じ、多少善を修し、齋戒を奉持し、塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繪を懸け、灯を燃し、華を散じ、香を焼き、これをもつて回向してかの国に生ぜんと願ずべし。その人終りに臨みて、無量寿仏その身を化現して、光明・相好つぶさに真仏のごとし。もろもろの大衆とその人の前に現じたまふ。すなはち化仏に随ひてその国に往生して、不退転に住す。功德・智慧次いで上輩のもののごとし〜と。）

「其中輩」とは、標挙。

「十方」等とは、上輩に簡ぶ。

「当發」等とは、行業を示す。上に准じて解すべし。

「多少」等 [451b] とは、随分勤行なり。

「齋戒」とは、持齋並に諸戒なり。

「塔」とは、塔婆。

「像」とは、仏像。

「繪」とは、『爾雅』には「五色に通ずるは皆繪なり」、『説文』には「布帛の総名なり」と。

「灯」とは、灯燭。余文知るべし。

「其人」等とは、終相を示す。上に准じて解すべし。

「即随」等とは、生相を示す。

三に下輩

仏告阿難^止次如中輩者也

（ 仏、阿難に告げたまはく、へその下輩は、十方世界の諸天・人民、それ心を至してかの国に生ぜんと欲することあるに、たとひもろもろの功德をなすことあたはずとも、まさに無上菩提の心を発して、一向に意をもつばらにして、乃至十念無量寿仏を念じて、その国に生ぜんと願ずべし。もし深法を聞き歓喜信樂して、疑惑を生ぜず、乃至一念かの仏を念じ、至誠心をもつて

その国に生ぜん願ず。この人終りに臨みて、夢にかの仏を見て、また往生することを得。功德・智慧次いで中輩のものごとし」(大経・下)と。

「其下」等とは、総挙。

「十方」等とは、中輩に簡ぶ。

「当發」等とは、行業を示す。

中に就いて「若聞」等とは、別して十八願の機を示す。この中を糅説して意は上を貫く。例えば九品の三心、首に在りて下を貫くがごとし。いわゆる「一一の願に言く」なるが故に、方便二願と雖も、真実恒存す。なおし水の地中を行ずるがごとし。けだしこれ觀・小の隱頭の根柢なり。

問う。この文の深底何ぞ広略の諸部の中において引証せざるや。

答う。宗祖の判、必ず増勝に従う。その引文は必ず顕著に従う。この一文のごときは、三輩方便藏の中に落在するが故に取らざるのみ。

「深法」とは弥陀の智願海。「深広無涯底」なるが故に。

「歡喜信樂」及び「疑惑」等は、みな次上のごとし。准じて積するを知るべし。

「此人」等とは、終相を示す。

「夢見」等とは、朦朧常在の相。また漢吳二訳に依りて云わば、時に夢中においてかの国土を見ると。

「亦得」等とは、生相を示す。

「功德」等とは、総結。

因って問う。昭公の記す所、宗祖は平太郎に対して教示するに、三輩三心及び一心等の文を引き、混然とこれを証す。[452a] 広略文類等の所判に似ず。この義如何。

答う。建立する門の辺、井井(せいせい)と差別するが故に。一処の混を見ず。権実とは、広略文類等これなり。安心の門の辺は、ただ隨義、便ち直ちに示し勧諭す。平太郎に対する文これなり。

また問う。化土卷の意は、宗家の積に拠りて『觀経』に隱頭を判ず。また『觀経』に准じて『小経』においてまた義、隱頭を立つ。いまだかつて『大経』において隱頭ありと論ぜず。しかるに伝絵は「三経に隱頭あり」と云う。何の説、これ類せざるなり。

答う。伝絵の説のごとし。言総意別なり。しかれば宗祖は『大経』におい

て真実を判ずるは義類に約するのみ。意は五願及び願成文を取る者なり。もし部帙に約せば、いわゆる根本法輪一切諸乗は具足せざるはなし。三輩章のごときはすなわち『観経』の意。また隠顕あり。違妨する所にあらざる故に、伝の言う所、意は別なり。知るべし。

三に私釈に二。初は義に就いて問答す。二は文に就いて問答す。初の義に就いて問答するに二。初は一往、二は再往。初の一往に二。初は問。二は答。今は初。

私問曰上輩止念仏往生乎

（わたくしに問ひていはく、上輩の文のなかに、念仏のほかにもまた捨家棄欲等の余行あり。中輩の文のなかに、また起立塔像等の余行あり。下輩の文のなかに、また菩提心等の余行あり。なんがゆゑぞただ念仏往生といふや。）

文意解すべし。

二に答。

答曰善導止念仏往生也

（答へていはく、善導和尚の『観念法門』にいはく、「またこの『経』（大経）の下巻の初めにのたまはく、へ仏（釈尊）、一切衆生の根性の不同を説きたまふに、上・中・下あり。その根性に随ひて、仏、みなもつばら無量寿仏の名を念ぜよと勧めたまふ。その人命終らんと欲する時、仏（阿弥陀仏）、聖衆とみづから来りて迎接したまひて、ことごとく往生を得しめたまふ」と。この釈の意によるに、三輩ともに念仏往生といふ。）

先に師釈に依りて私創に非ざることを示す。

二に再往に二。初は問。二は答。今は初。

問曰私釈止唯云念仏乎

（問ひていはく、この釈いまだ前の難を遮せず。なんぞ余行を棄ててただ

念仏といふや。)

念仏の該擧の文。理宜しくしかるべし。[452b]その余行を棄て、いまだ何の義をえざる。

二に答に二。初は立義。二に料簡。初の立義に三。初は総標。二は別釈。三に結示。今は初。

答曰斯有^止而説諸行也

(答へていはく、これに三の意あり。一には諸行を廢して念仏に歸せしめんがためにしかも諸行を説く。二には念仏を助成せんがためにしかも諸行を説く。三には念仏・諸行の二門に約して、おのおの三品を立てんがためにしかも諸行を説く。)

かくのごとき三義は至玄至要なり。三家の異解は蘭菊の美を競う。我よりこれを判ぜば、鎮西は文を封ず。西山は義を失す。いわんやまた現前受行の徒、正雜混修し、二力無弁なり。弘願真宗の宗ここに立す。初をもって正となすの判殆ど息む。ただ今宗の解行ありて正を得る。また慶幸せざらんや。

二に別釈に三。初は廢立。二は助正。三は傍正。初の廢立に二。初は標。二は釈。今は初。

一為廢諸行^止説[※諸]行者

(一に、諸行を廢して念仏に歸せしめんがためにしかも諸行を説くといふは、)

文意見るべし。

二に釈に三。初は証を引ききて義を述す。二は例を挙げて文を釈す。三は上を承けて決す。今は初。

唯(※准)云善導^止無量寿仏也

（善導の『観経疏』（散善義）のなかに、「上よりこのかた定散両門の益を説くといへども、仏の本願に望むるに、意、衆生をして一向にもつぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり」といふ釈の意に准じて、しばらくこれを解せば、上輩のなかに菩提心等の余行を説くといへども、上の本願（第十八願）に望むるに、意ただ衆生をしてもつぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり。しかるに本願のなかにさらに余行なし。三輩ともに上の本願によるがゆゑに、「一向専念無量寿仏」（大経・下）といふ。）

疏文は具さに第十二章のごとし。しかるに文中は「一向専称弥陀仏名」と云うは、全く三輩を取るが故に。今准釈のみ。玄簡の吉水は弘願に約して解す。次上の弁ずるがごとし。

二に例を挙げて文を積す

[453a]

一向者^此不兼余明矣

（「一向」は二向・三向等に対する言なり。例するにかの五竺（印度）に三寺あるがごとし。一は一向大乘寺、この寺のなかに小乗を学することなし。二は一向小乗寺、この寺のなかに大乘を学することなし。三は大小兼行寺、この寺のなかに大小兼ね学す。ゆゑに兼行寺といふ。まさに知るべし、大小の両寺には一向の言あり。兼行の寺には一向の言なし。いまこの『経』（同・下）のなかの一向もまたしかなり。もし念仏のほかにまた余行を加へば、すなはち一向にあらず。もし寺に准ぜば兼行といふべし。すでに一向といふ、余を兼ねざること明らけし。）

「例如」等とは、顕戒論（伝教大師作）上（九紙）に云く、「凡そ仏寺に三あり。一は一向大乘寺。初修業菩薩所住の寺。二は一向小乗寺。一向小乗律師所住の寺。三は大小兼行寺。久修業菩薩所住の寺」等。また中（初紙）に云く、「一者一向大乘寺。文殊師利を置いてもつて上座となす。二は一向小乗寺。賓頭盧和上を置いて、もつて上座となす。三は大小兼行寺。文殊と賓頭盧とを両の上座と置く」等。

今これらは合例をもつて文意を示す。見るべし。

三は上を承けて決定す

「既先離説^止最以叵消歟

（すでに先に余行を説くといへども、後に「一向専念」といふ。あきらかに知りぬ、諸行を廃してただ念仏を用ゐるがゆゑに一向といふ。もししからずは一向の言もつとももつて消しがたきか。）

問う。一向専念の語は中間より出づ。何ぞ先に説くと云うか。

答う。これはこれ義説。何ぞ文次に局らん。かくのごとき一義、終南の正意、吉水の所取、今宗の相承、今に儼然なり。西鎮の末流、誰も欽慕随喜せざれば、文を釈すに異なし。義において天懸（天と地のように隔たっている）。噫。

二に助正に二。初は標。二は釈。今は初。

二為助成^止助成念仏

（二に、念仏を助成せんがためにこの諸行を説くとは、これにまた二の意あり。一には同類の善根をもつて念仏を助成す。二には異類の善根をもつて念仏を助成す。）

文意見るべし。按ずるに今家の意、もし信後に約せば、助正なきにあらず。正はすなわち正定業。助はすなわち助縁。均しくこれ念報の経営のみ。もし信前に約せば、兼行・専修・専心・雑心等の種々の法門あり。上下弁ずるがごとし。

[453b] 二に釈に二。初は同類を明かす。二は異類を明かす。今は初。

初同類助成者^止二行之中説

（初めに同類の助成とは、善導和尚の『観經の疏』（散善義）のなかに、五種の助行を挙げて念仏一行を助成すこれなり。つぶさに上の正雑二行のなかに説くがごとし。）

「五種」等とは、これに二解あり。一に云く（私集）、「すなわち称名を除いて讚供を開く故に」と。一に云く（密要私記）、「經疏に五種の助行と云う。彼はすでに合義に従う。今何ぞ開義を存するや。口称の一行また助業に属す。一分の機功を兼ねるが故に。帰仏の一念は願行即具足。正はこれ真実正定の業に等し」と。今謂く、初義を穩となす。後義は西山の一箇の立義のみ。開合の二義、上章の分甄、何ぞ文に拘わる。

二に異類を明かすに三。初は上輩、二は中輩、三は下輩。今は初。

次異類助成者^止妨礙念仏也

（次に異類の助成とは、先づ上輩につきて正助を論ぜば、「一向にもつぱら無量寿仏を念ず」（大經・下）とはこれ正行なり、またこれ所助なり。「家を捨て欲を棄て沙門となりて、菩提心を発す」（同・下）等はこれ助行なり、またこれ能助なり。いはく往生の業には念仏を本となす。ゆゑに一向に念仏を修せんがために、「家を捨て欲を棄て沙門となりて、また菩提心を発す」（大經・下）等なり。就中出家・発心等は、しばらく初出および初発を指す。念仏はこれ長時不退の行、むしろ念仏を妨礙すべけんや。）

文意見るべし。

「往生」等とは、『要集』の助念方法の中、總結要行の文なり。

二に中輩

中輩之中^止供具等是也

（中輩のなかに、また起立塔像・懸繪・燃灯・散華・焼香等の諸行あり。これすなはち念仏の助成なり。その旨『往生要集』（中）に見えたり。いはく助念方法のなかの方処供具等これなり。）

『要集』の中本（十九紙）の大文第五助念方法に云く、

一目の羅、鳥を得ること能はず（この語は止観五の二に出づ（七十二紙）。また『淮南子』十七に云う。一目の羅もつて鳥を得ず）、万術観念を助

けて往生の大事に成せ。今七事を以て略して方法を示さむ。一には方処供具、二には修行の相貌、三には対治懈怠、四には止悪修善、五には懺悔衆罪、六には対治魔事、七には総結要行なり。

けだし今と意同じが故に引証するのみ。

[454a] 三下輩

下輩之中止准前可知

(下輩のなかに、また発心あり、また念仏あり。助正の義前に准じて知るべし。)

文意知るべし。按ずるに他流の意、能所の助義にその二義あり。一に云く(決疑・私集等の意)、因業を助く。『決疑』三(四)に云く、「出家発心いかんが念仏を助く。謂く、在家は縁務多く念仏の違あらず。故に山林に卜居し、跡を煙霞に暗ます」等と。「造像発心いかんが念仏を助く。謂く、在家囂塵に雜り、多く数遍を欠く。もし道場に詣り本尊を拝めば、念仏の便あり」等。『私集』三(三十一)に云く、「成念仏相続の助義等あり」。

今謂く、これ助縁の義。今家と同じ。ただその意を用いること天淵に啼かず。一に云く(鶉木等の意)果徳を助く。『私記』二(二十八)に云く、「これ助業の功德にして、浄土の成仏時、内証外用の功德莊嚴を成ずべし」等と。今謂く、ここをもって正助は満業を配引す。一個の家言依用すべからず。

三に傍正に二。初に標。二に釈。今は初

三約念仏止諸行者

(三に、念仏・諸行に約して、おのおの三品を立てんがためにしかも諸行を説くといふは、)

文意解すべし。按ずるに今家の意この義に順ぜず。念仏諸行あに輩品なからんや。みなこれ自力定散諸機各別の相故に。

二に釈に二。初に念仏三品。二に諸行三品。三は結示。今は初。

先約念仏止感師同之

(先づ念仏に約して三品を立つとは、いはくこの三輩のなかに、通じてみな「一向専念無量寿仏」(大経・下)といふ。これすなはち念仏門に約してその三品を立つ。ゆゑに『往生要集』(下)の念仏証拠門にはく、『双卷経』(大経)の三輩の業、浅深ありといへども、しかも通じてみな「一向専念無量寿仏」といふ)と。「感師(懐感)これに同じ。」)

『私記』(二の三十七)に云く、

「諸行は機に随い、自ずから三品あり。念仏は通因にて、もと差あることなし。しかりて三輩は通じて念仏あるが故に。諸行を機に随え、念仏はまた三品に分つ。これすなわち諸行独立せず。ただこれ機の差にして、必ず[454b]念仏を具して往生を得るが故に。標に「三輩念仏往生」と云う。またかくのごとき三義不同あるといえども、ともにこれ一向念仏をなすと云うなり。」(已上取要)

『要義』(四の三十)の助を解して云く、

今この傍正の一義は、いまし諸行・念仏の各別の分三を標しおわりて云く、「おのおの三品を立てんがために」と。あに諸行の因なるが故に念仏もまた三ありと云うことを得んや。言う所の「各三」とは、諸行の機に随いて三あり。知るべし。念仏もまた機に随いて正しく三あり。「三万六万十万」と云うがごときは、皆これ上品上生の人と、第五章に明かす所、これはその証なり。故に引く所の『要集』の念仏証拠門に『木櫛経』を引きて(云々)。しかりといえどもまた何ぞ諸行の機品、念仏正因の義を言うを妨げるかな(已上略抄)

今謂く、要義の助釈、穩当か。『決疑』三(五)に云く、「第三・第四は通じて二機に約す。謂く、念仏諸行その機別なるが故に」(已上略出)と。今謂く、彼は二類往生を許すが故に、文において通暢なり。

問う。西鎮二家の優劣如何。

答う。これ与奪あり。もしは与、両可。鎮は横川西河の玄簡に准ず。奪はすなわち両否。二土を弁ぜず。二力を判ぜず。上に准じて知るべきが故に。

「要集」とは、『要集』下本。大文第八証拠門中、三重の問答あり。今はその第一なり。

「感師」等とは、『群疑論』第五を指すなり。

二に諸行三品

次約諸行亦不出此

（次に諸行門に約して三品を立つとは、いはくこの三輩のなかに通じてみな菩提心等の諸行あり。これすなはち諸行に約してその三品を立つ。ゆゑに『往生要集』（下）の諸行往生門にいはく、『双卷経』（大経）の三輩またこれを出でず」と。（以上））

「故要」等とは、『要集』下本、大文第九諸行門の中、二重の釈あり。今はその初釈なり。

[455a]

三に結示

凡如此三業通念仏也

（おほよそかくのごときの三義不同ありといへども、ともにこれ一向念仏のための所以なり。初めの義はすなはちこれ廢立のために説く。いはく諸行は廢せんがために説く、念仏は立せんがために説く。次の義はすなはちこれ助正のために説く。いはく念仏の正業を助けんがために諸行の助業を説く。後の義はすなはちこれ傍正のために説く。いはく念仏・諸行の二門を説くといへども、念仏をもつて正となし、諸行をもつて傍となす。ゆゑに三輩通じてみな念仏といふ。）

今略して要を挙げ、至要をもつてするなり。

かつ鎮西のごときは、その廢立の釈相を談ずるに、すなわちこれ修相。すなわち三義並用にあらず。また助正のごときは全く機失に随う。いわゆる序

(※助か) 正兼修にして一心を得ず。念報を知らざるものなり。また傍正のごときは、元に『要集』を出す。しかるに横川は相承の祖といえども、迹は台門に居するが故に。その施設因循いまししかり。しかして今公然のみ。拠するに何ぞ吉水の徒たらん。

もし西山の所談のごときは、廃立たちまち見ること甚だ可なり。一類往生に立つが故に。熟察大害す。開会をもって堂奥となすが故に。義において正しからず。修相何ぞ正しからん。今現にその徒、正雜を弁ぜず。全く鎮と同じ。五帖慨歎し総じて及ぶ。知るべし。また助正のごときは、因に約し(機をもって法を助く)果に約し(助業は果を飾る)、並にこれ一家の私判者なり。二力弁ぜず。勉強し法に契せんと欲すが故に。二土判ぜず。真土を同化せしむるが故に。また傍正のごときはまたこれ家判せば、竹林の助解、その義やや通ず。その開会の判に至りて、もって堂奥となし、すなわちその失甚し。仏を違え(選択本願)師に背き(以初為正)行者を欺誑す(今現に滔滔者はみなこれ)。尽く傷つけざるべきかな。

もし今家に依らば、その積義は略して鎮と同じ。その修相に至りて天地懸隔。何とならば、因は二力を判じ、果は真化を分つ。かの所談のごとき助傍の二義、みな自力に随い俱に化土に生ず。いわゆる要門の益相なり。故にこれに従わず。ただ廃立に約し信を立つ。伝持の一言(初をもって正となす)その他はみなこれ報謝。[45b]「**云為**」は、これ他力なるが故に。直に真土に生ずる時、助正は随宜の作業に似る。その相宛然にして、常にその相を忘るる。助業はこれ助縁の業のみ。これ念報の経営、信後の妙行なるが故に。鎮義と異なる。また廃立のごときは後の二と並用にあらず(鎮に簡ぶ)。また初の階のために更に堂奥を論ずるにあらず(西に簡ぶ)。また諸仏等の六字等を撰し説くがごときは、西山に似るといえども弥陀仏名読他經典等を許するにあらざる(法の開会を談じ機において談ぜず)。これを思え。

二に料簡

但此等三義止以初為耳

(ただしこれらの三義は殿最知りがたし。請ふ、もろもろの学者、取捨心あり。いまもし善導によらば、初め(廃立)をもつて正となすのみ。)

この一段のごときは、選択本願の悲懐なり。釈迦発遣の旨帰、終南楷定の妙判、吉水立宗の高幢、それらはここにあるか。

「殿最」とは漢書の音義に云く「上功を最と曰い、下功を殿と曰う」と。

「請諸師」等とは、投与をもって、選の意をして謙を存せしむ。

「今若」等とは、すなわち「上来雖説」等の釈意なり。下の別章のごとし。

二に文に就いて問答するに二。初は問、二は答。今は初。

問曰三輩止始説念仏也

（問ひていはく、三輩の業みな念仏といふ。その義しかるべし。ただし『観経』の九品と『寿経』（大経）の三輩と、本これ開合の異なり。もししからば、なんぞ『寿経』の三輩のなかにはみな念仏といひ、『観経』の九品に至りて上・中の二品には念仏を説かず、下品に至りてはじめて念仏を説くや。）

輩品の同異は異説紛紜ふんうん。大綱鈔の云々のごとし（同に七家あり、異に四家あり）。

今家の相承、片言をもって獄を断ずるものなり。

『真土卷』（終）に曰く、

真仮みなこれ大悲の願海に酬報せり。ゆゑに知んぬ、報仏土なりといふことを。まことに仮の仏土の業因千差なれば、土もまた千差なるべし。これを方便化身・化土と名づく。

等と。この文意に准れば、同は同じき酬報を得るが故に。異は異果千差を得るが故に。

「若爾」等 [456a] は、正しく相違の文意を問う。知るべし。

二に答えに二。初は標。二に釈。今は初。

答曰此有二義

（答へていはく、これに二の義あり。）

初は横川の意に依り、次は終南の意に依る。

二に釈に二。初は縦に答う。二に奪いて答う。今は初。

一如問端_止可通九品

(一には問端にいふがごとく、『双卷』(大経)の三輩と『観経』の九品とは開合の異ならば、これをもつて知るべし、九品のなかにみな念仏あるべし。いかんが知ることを得る。三輩のなかにみな念仏あり。九品のなかなんぞ念仏なからんや。ゆゑに『往生要集』(下)にはく、「問ふ。念仏の行、九品のなかにおいてこれいづれの品の撰ぞや。答ふ。もし説のごとく行ぜば、理上上に当れり。かくのごとくその勝劣に随ひて九品を分つべし。しかるに『経』(観経)に説くところの九品の行業はこれ一端を示す。理実に無量なり」と。(以上)ゆゑに知りぬ、念仏また九品に通ずべしといふことを。)

「一如」等とは、問に准じて理を述べが故に。

「往」等とは、引証して義を会す。

『要集』はすなわち大文第十問答。料簡に略して十事ある中の第四文なり。

「故知」等とは、総示。

二に奪いて答う

二観経之意_止唯在念仏矣

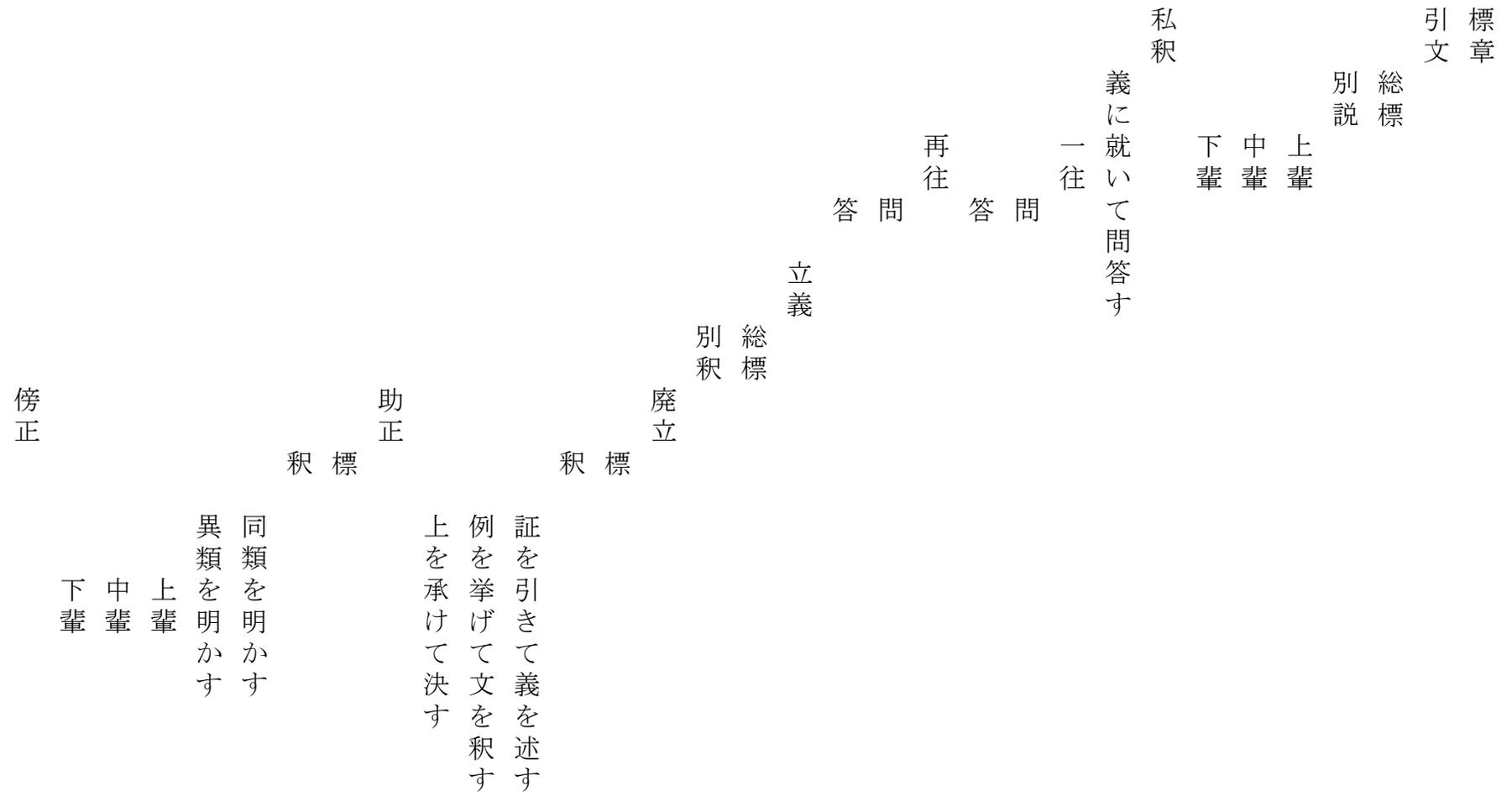
(二には『観経』の意、初め広く定散の行を説きて、あまねく衆機に逗ず。後には定散二善を廃して、念仏一行に帰す。いはゆる「汝好持是語」等の文これなり。その義下につぶさに述ぶるがごとし。ゆゑに知りぬ、九品の行はただ念仏にありといふことを。)

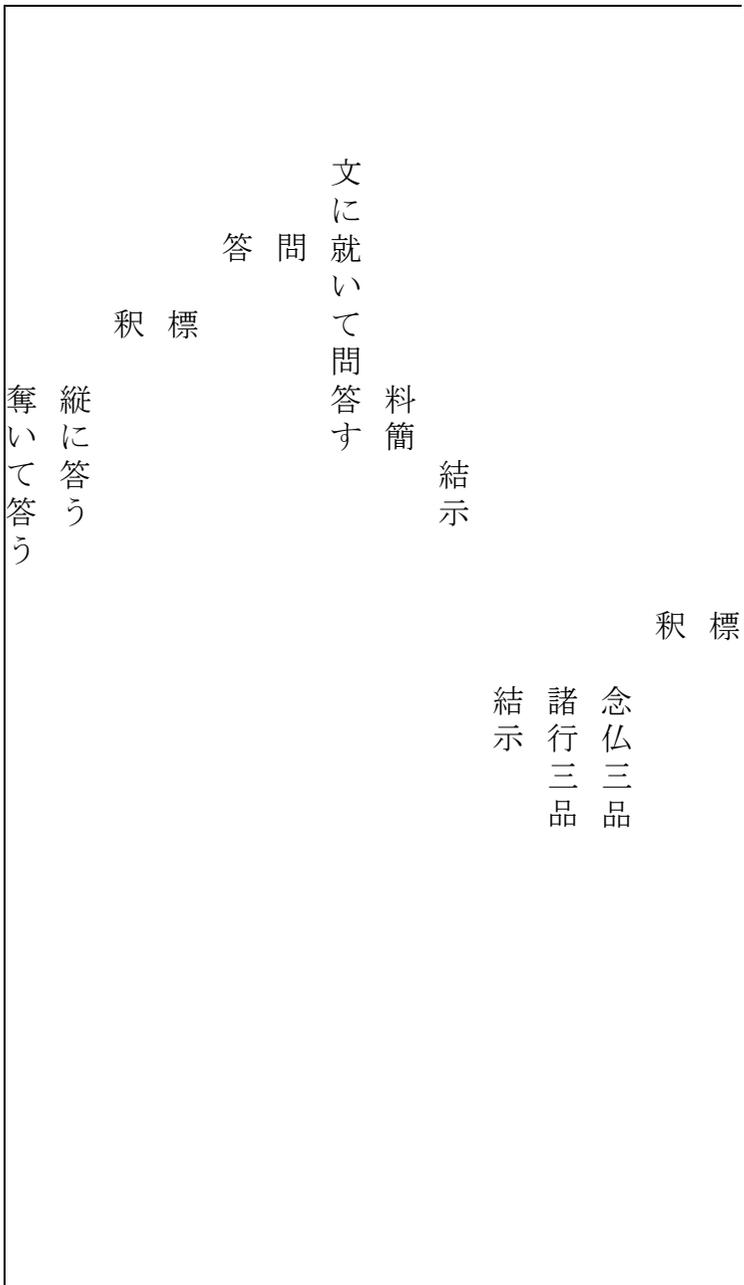
「二観」等とは、経を引ききて義を定む。

「故知」等とは、総示。

【科段⑤(随文釈)】

四に三輩章





五に利益章に三。初に標章。二に引文。三に私積。今は初。

念仏利益之文

【5】 念仏利益の文。

今章の来意、上に准じて二義あり。

もし文に順ずれば、大經の文。中にその第二文なり。次上にすでに引く。今すなわち第三の相承の来なり。

もし義に約せば、次上にすでに念仏の機は広く三類に亘るを明かす。また宜しく念仏の法を顕すべし。その益無上なるが故に、今章来る。

「利益章」とは、あるいは（決疑の大綱）「念仏利益篇」と云い、あるいは（私記・私集・要義・本義・聞香等）「念仏利益章」と云う。今は略して従うのみ。

【456b】無量寿經止無上功德

（『無量寿經』の下にのたまはく、「仏、弥勒に語りたまはく、へそれか

の仏の名号を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍し、乃至一念せん。まさ
に知るべし、この人は大利を得となす。すなはちこれ無上の功德を具足す」と。
と。

この文の枢要、礼讚に（云々）。次下の連引は行巻（三十九）に引きて行
一念を証す（※?）。『禿鈔』には十六選択を判ずる中、大經の釈迦の選択一
これなり。

また「往觀偈」の中に、総じてこの意を説いて云く、

法を聞きてよく忘れず、見て敬ひ得て大きに慶ばば、すなはちわが善き
親友なり。このゆゑにまさ意を發すべし。
（註釈版四七）

この文と互頭す。ただし、かれは諸仏稱讚と心多歡喜を挙げ、これは至徳
具足・転悪成善・挙少撰多を示すをもつて、十益互具する者なり。
また「讚偈」に云く、

もし阿弥陀仏の号を聞きて、歡喜し讚仰し、心帰依すれば、
下一念に至るまで大利を得。すなはち功德の宝を具足すとす。

（註釈版七祖篇一六九）

和讚の婆伽婆を讚じての六首の中、第二これなり。また高僧結讚に云々。
併せて取るに、五悪の機法の実を頭すは、みなこれを干するなり（※?）。
容易に看過すべからず。

「仏諸」等とは、付属の文なり。

問う。何ぞ説相はこれ通慢なるや。

答う。これを異訳に求むれば、文ありて分明なり。唐訳に云く、「今この
法門は汝を付属す」と。吳訳に云く、「この法門をもつて汝を囑累す」と。
吳唐二訳にまた囑累の説あり。あに比して囑累の義を談ぜずや。

「其有」等とは、その言は上に頭す機を承る。

「聞知」（※?）とは、上の聞其名号と同じ。

「彼仏」等とは、仏所施の喜号なり。

「歡喜」等の下、三業の領受を表す。歡喜は意業、踊躍は身業、乃至等は
口業。一念とは実に信行に通ず。行巻は行に約し、和讚は信に約す。

いかんが行巻は行に約す。文（二十九紙）に云く、

おほよそ往相回向の行信について、行にすなはち一念あり、また信に一念あり。行の一念といふは、いはく、称名の遍数について[457a]選択易行の至極を顕開す。ゆゑに『大本』にのたまはく、（註釈版一八七）

等と。按ずるに難易相對は行不能にあらざるが故に、いまししかるのみ。

いかんが和讃は信に約す。文に云く、

五濁悪世の有情の 選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみたり

（註釈版六〇五）

按ずるに恐らく異訳に依る。唐訳に云く、「もしかの仏の名を聞くことありて、よく一念喜愛の心を生ずれば」等、故なり。

「当知」等とは、いわゆる至徳具足の相なり。行巻に云く、

大利といふは小利に對せるの言なり。無上といふは有上に對せるの言なり。まことに知んぬ、大利無上は一乘眞実の利益なり。小利有上はすなはちこれ八万四千の仮門なり。

大いなるかな（※原文「大矣哉」）。至徳具足、ただかくのごとくにあらず。信末（初）に云く、「横に五趣八難の道を超え、かならず現生に十種の益を獲」等と。実に思議しがたしかな。

二に礼讃

善導礼讃^止皆当得生彼

（善導の『礼讃』にはく、

「それかの弥陀仏の名号を聞くことを得ることありて、歡喜して一念を至すもの、みなまさにかしこに生ずることを得べし」と。）

按ずるに初夜の偈は十八願意を総持して云く、

弥陀の智願海は、深広にして涯底なし。

名を聞きて往生せんと欲すれば、みなことごとくかの国に到る。

(一頌、行卷二十一紙所引)(註釈版七祖篇・六七一)

初の二句を經には「如来智慧海」等と云うは、果力に約して讚じ、改めて「智願」と云うは、因願の意に約して、經の「其仏本願力」の句及び上の正因分を撰するものなり。またすなわち成仏の因果なり。

三四句は全く經文に依る。すなわちこれ往生の因果なり。

次下に六段ありて、各々「皆当得生彼」の一句あるは、その文の六段、機の差別を顕す。各々一句あり。益の平等を示す。文に云く、

この世界のなかにおいて、**[457b]**六十**【※原本…六十有】**七億の不退のもろもろの菩薩あり。みなまさにかしこに生ずることを得べし。

これはその一なり。また云く、

小行のもろもろの菩薩、および少福を修するもの、その数計るべからず。みなまさにかしこに生ずることを得べし。

これはその二なり(如上二段、經末の此土往生を明かす文意)。また云く、

十方仏土**【※原本…仏刹】**のなかの菩薩・比丘衆は、その数**【※原本…劫を窮むるも】**計るべからず。みなまさにかしこに生ずることを得べし。

これはその三なり(かくのごとき一段、經末の他方往生を明かす文意)。また云く、

それかの弥陀仏の名号を聞くことを得ることありて、歡喜して一念に至るまで、みなまさにかしこに生ずることを得べし。

これ四なり（予め今の所引）。また云く、

たとひ大千に満てらん火をも、ただちに過ぎて仏の名を聞け。
名を聞きて歡喜して讚ずれば、みなまさにかしこに生ずることを得べし。

これその五なり（如上の二段、経末の嘆法自励の文意）。また云く、

万年にして三宝滅せんに、この『経』（大経）住すること百年せん。
その時間きて一念せんに、みなまさにかしこに生ずることを得べし。

これはその六なり。（かくのごとき一段、またこれ経末の嘆法付属の中の
重示の文意なり。すなわち下章に所引）。

かくのごとき六段、不退より始めて法滅に終わる。皆機は差別にして、そ
の法を論ずるにおいては、ただこれ聞信の益。また平等婆讚（※？）六首の
合讚、全くこの旨を承る。余所に弁ずるがごとし。今集の所依はかの四及び
第六段にある。上章の機別、今章の法同、次章の機列、もって本願普済の相
を顕すなり。今の文意のごときは、経に准じて解すべし。ただ経は現益に約
し、讚は当益を示す。互顕知るべし。

三に私釈に三。初は独讚の所依、二はしばらく三輩を分つ。三は文に就
いて解す。初の独讚の所依に二、初は問、二は答。今は初。

私問曰_レ念仏功德乎

（わたくしに問ひていはく、上の三輩の文に准ずるに、念仏のほかは菩提
心等の功德を挙ぐ。なんぞかれらの功德を歎めずして、ただ独り念仏の功德
を讚むるや。）

文意見るべし。

二に答

[458a] 答曰聖意止分別者也

(答へていはく、聖意測りがたし。さだめて深き意あらんか。しばらく善導の一意によりてしかもこれをいはば、原それ仏意はまさしくただちにただ念仏の行を説かんと欲すといへども、機に随ひて一往菩提心等の諸行を説きて、三輩の浅深不同を分別す。しかるをいま諸行においてはすでに捨てて歎めたまはず。置きて論ずべからざるものなり。ただ念仏の一行につきてすでに選びて讚歎す。思ひて分別すべきものなり。)

「聖意」等とは、恐慮の謙辞。

「且依」等とは、上の初積を承く。准じて知るべし。

二にしばらく三輩を分つに二。初に二義を標す。二に二義を積す。

若約念仏止而分別之

(もし念仏に約して三輩を分別せば、これに二の意あり。一には觀念の浅深に随ひてこれを分別す。二には念仏の多少をもつてこれを分別す。)

「若約」等とは、上を承けて後積す。

「一随」等とは、能修の心相に約す。

「二以」等とは、所修の行相に約す。

二に二義を積すに二。初に觀念の浅深、二に念仏の多少。今は初。

浅深者止上上是也

(浅深は上に引くところのごとし。「もし説のごとく行ぜば、理上上に当れり」(往生要集・下)と、これなり。)

「如上」等とは、三輩の私積を指す。輩品の同異の中の所引の文。

「理当」等とは、心の強弱に約す。

問う。文に觀念と云うは、相違あるに似るや。

答う。彼は念觀に通ず。今は口称に局る。逆意解すべし。

二に念仏の多少

次多少者止是明矣

(次に多少は、下輩の文のなかにすでに十念乃至一念の数あり。上・中の兩輩はこれに准じて随ひて増すべし。『観念法門』にはく、「日別に念仏一万遍、またすべからく時によりて浄土の莊嚴を礼讚すべし。はなはだ精進すべし。あるいは三万・六万・十万を得るものは、みなこれ上品上生の人なり」と。まさに知るべし、三万以上はこれ上品上生の業、三万以去は上品以下の業なり。すでに念数の多少に随ひて品位を分別することこれ明らけし。)

行の勤随に約す。

問う。心は強弱を論ず。行は勤随を弁ず。宗意にあらざるに似たるは、いかんが思念せん。

答う。実は宗意にあらざる。これ傍正の義。しかりといえども横川の常談、吉水の傍用、宗祖は取らず。もつて化因に属す。いわゆる「禹稷顔回地を易れば」(※「孟子」離婁下)と同然なるものなり。

三に文に就いて解釈するに四。初は一念を積す。二に大利を積す。三に無上を積す。四に結勸。今は初。

今此言止上一念也

(いまこの「一念」といふは、これ上の念仏の願成就(第十八願成就文)のなかにいふところの一念と下輩のなかに明かすところの一念とを指す。願成就の文のなかに一念といふといへども、いまだ功德の大利を説かず。また下輩の文のなかに一念といふといへども、また功德の大利を説かず。この「流通分の」一念に至りて、説きて大利となし、歎めて無上となす。まさに知るべし、これ上の一念を指す。)

願成下輩の所明の一念はこれ信の一[458b]念。今はすなわちしからず。行一念なるが故に。信は業成を決す。行は功德を嘆ず。理実互融、上の数談のごとし。

二に大利を積す

此大利者^止為大利也

(この「大利」とはこれ小利に対する言なり。しかればすなはち菩提心等の諸行をもつて小利となし、乃至一念をもつて大利となす。)

大利小利対、無上有上対、この文より出づ。『大経』の序に「真実の利」と云い、また智慧分に「為得大利」と云う。小本に「不可思議功德の利」と云い、また「我見是利」と云う。称讚経に「利益安樂大事因縁」と云う。みな今と同じ。

三に無上を積す

又無上^止如是応知

(また「無上の功德」とはこれ有上に対する言なり。余行をもつて有上となし、念仏をもつて無上となす。すでに一念をもつて一無上となす。まさに知るべし、十念をもつて十無上となし、また百念をもつて百無上となし、また千念をもつて千無上となす。かくのごとく展転して少より多に至る。念仏恒沙なれば、無上の功德また恒沙なるべし。かくのごとく知るべし。)

問う。今の所判のごとき多多増徳はもつて宗承と違す。いかんが思念す。答う。多少に寄らば称名を勤励するのみ。もししからあれば、理は通暢せず。一無上の外更に多無上、無上の言にて、何ぞ無上を得ん。

四に結勸

然則諸願^止小利余行乎

(しかればもろもろの往生を願求せん人、なんぞ無上大利の念仏を廢して、あながちに有上小利の余行を修せんや。)

抑揚褒貶懸重見るべし。

【科段⑤（随文釈）】

五に利益章

標章

引文

大経

礼讃

私釈

独讃の所以

問

答

しばらく三輩を分つ

二義を標す

二義を積す

觀念の深淺

念仏の多少

文に就いて解す

一念を積す

大利を積す

無上を積す

結勸

六に特留章に三。初に標章。二に引文。三に私釈。今は初。

末法萬年^止念仏之文

(【6】末法萬年の後に余行ことごとく滅し、特に念仏を留めたまふ文。)

法滅の相を明かすは、広く『蓮華面經』の当來變經等の説のごとし。その年時を弁ずるは、古鈔には五説を挙ぐ。一は涅槃の第二。説きて滅後四十年後となす。二に摩訶摩耶經。説きて千五百年後となす。【459a】三に『大集月藏經』。説きて五の五百年後を簡ばんとす。四に『法滅尽經』。説きて正しく年月を指さず。ただ衰相を説く。五に『法住記』。説きて増劫七百歳時となす。

私に謂く、かくのごとき異説、機惑不同なり。なんぞ啻だ上三各おの一相を挙ぐ。和会すべからず。また強いて和会せば、涅槃は始めに約し、法住は終に約す。余文は中に約す。ただ相承に依りて、正しく五像千末萬等なり。『安樂集』及び『礼讚』等のごとし。また『要集』上末に云々。今章の相承、その來遠し。また二門偈に云く、「道綽和尚義解曰」等と。また文類偈に云く、「特留此經止住百歳」と。また和讚に云々(經道滅尽ときいたり等)。祖承かくのごとし。輒ち解すべからず。今章の來意、上に准じて二義。もし文に約せば、大本第四の文來りて知るべし。もし義に約せば、次上二章の機法次第、今章重ねて極劣の機を被るを明かして、法徳を反顯するのみ。特留章の名は、あるいは(決疑)末法萬年特留念仏篇と云う。あるいは(大綱)特留念仏篇と云う。あるいは(聞香本義鵜木私集要義等)特留念仏章と云う。今はただ略に従うのみ。

二に引文

無量壽經^止皆可得度

(『無量壽經』の下巻にのたまはく、「當來の世に經道滅尽せんに、われ慈悲をもつて哀愍して、特にこの經を留めて止住すること百歳ならしめん。それ衆生ありてこの經に値ふもの、意の所願に随ひてみな得度すべし」と。

「當來の世」とは、末法の時を指す。『礼讚』に「萬年にして三寶滅せん

に」(註釈版七祖篇六七六)と云うが故に。

「経道滅尽」等とは、すなわち八万法蔵龍宮に入るなり。和讃に云々(末法五濁の有情の等)。

「我」とは釈尊自らを指す。

「慈悲」は体に約す。

「哀愍」は相に約す。

「特留」は用に約す。

「この経」とは私釈の解のごとし。

「其有」等とは、上のいわゆる[459b]「諸有衆生」なり。

「值此」等とは、「聞其名号信心歡喜」なり。

「随意」等とは、「願生彼国」なり。

「皆可」等とは、「皆当得生彼」なり。

二(三)に私釈に四。初に特留の文意。二に止住の文意。三に特留の所以。四に益布の三時。初に特留の文意に二。初に問。二に答。今は初。

私問曰止特留念仏哉

(わたくしに問ひていはく、『経』(大経・下)にただ「特留此経止住百歳」といひて、まつたくいまだ「特留念仏止住百歳」といはず。しかるにいまなんぞ「特留念仏」といふや。)

文意見るべし。

二に答に三。初は直決。二に由を挙ぐ。三に引証。今は初。

答曰此経止念仏止住也

(答へていはく、この経の詮ずるところまつたく念仏にあり。その旨前に見えたり。再び出すにあたはず。善導・懷感・恵心(源信)等の意またかくのごとし。しかればすなはちこの経の「止住」は、すなはち念仏の止住なり。)

「其旨」等とは、上の三章を指す。云く選択撰取の故に、云く一向専念の故に、云く無上大利の故に。

「善導」等とは、三師並べて挙ぐ。三輩を杜ず。余文解すべし。

二に由を挙ぐ。

所以然_止准之_止応知

(しかる所以は、この経に菩提心の言ありといへども、いまだ菩提心の行相を説かず。また持戒の言ありといへども、いまだ持戒の行相を説かず。しかるに菩提心の行相を説くことは広く『菩提心経』等にあり。かの経先に滅しなば、菩提心の行なによりてかこれを修せん。また持戒の行相を説くことは広く大小の戒律にあり。かの戒律先に滅しなば、持戒の行なによりてかこれを修せん。自余の諸行これに准じて知るべし。)

「而説 (※しかるに菩提心の行相を説くことは)」等とは、『莊嚴菩提心経』(羅什訳。六紙欠。「台」の字の函)、『大方広菩提十地経』(吉迦夜共曇曜訳。六紙欠。「台」の字の函)、『金光明最勝王経』「浄地陀羅尼品」(義■)(※浄か)訳。十卷。「場」の字の函)。以上三本同本異訳。『出生菩提心経』(闍那屈多訳。十一紙欠。「羊」の字の函)、『仏説発菩提心破諸魔経』(施護訳。上下合卷。「薄」の字の函)、以上二本同本異訳。『宝授菩薩菩提行経』(法賢訳。半紙欠。「深」の字の函)。これらの説を指す。
「又説」等とは、大小戒律、上のすでに挙げるがごとし。

[460a] 三に引証

故善導和尚_止皆当得生彼

(ゆゑに善導和尚の『往生礼讃』にこの文を釈していはく、

「万年に三宝滅しなば、この『経』(大経)住すること百年あらん。その時に聞きて一念せん、みなまさにかしこに生ずることを得べし」と。)

上の略釈のごとし。

二に止住の文意に二。初に標、二に釈。今は初。

又积此文略有四意^止住滅前後

(またこの文を积するに略して四の意あり。一には聖道・浄土二教の住滅の前後、二には十方・西方二教の住滅の前後、三には兜率・西方二教の住滅の前後、四には念仏・諸行二行の住滅の前後なり。)

かくのごとき四意、初の三は教に約し、後の一は行に約す。正しく機劣を顕し反して法勝を示す。

いかんが機劣。上の引く所の『礼讚』の文これなり。

いかんが法勝。祖の讚に云々(如来興世の本意十八等)。いわゆる貞松は歳寒を彰し、忠臣は国危を出す者なり。

二に积に四。初は聖道浄土の相對。二は十方西方の相對。三は兜率西方の相對。四は念仏諸行の相對。今は初。

一聖道浄土^止機縁深厚也

(一に聖道・浄土二教の住滅の前後といふは、いはく聖道門の諸経は先に滅す、ゆゑに「経道滅尽」といふ。浄土門のこの経は特り留まる、ゆゑに「止住百歳」といふ。まさに知るべし、聖道は機縁浅薄にして、浄土は機縁深厚なりといふことを。)

文のごとく解すべし。

二に十方西方の相對

二十方西方^止機縁深厚也

(二に十方・西方二教の住滅の前後といふは、いはく十方浄土往生の諸教先に滅す、ゆゑに「経道滅尽」といふ。西方浄土往生はこの経特り留まる、ゆゑに「止住百歳」といふ。まさに知るべし、十方浄土は機縁浅薄にして、西方浄土は機縁深厚なり。)

『要集』上末(十三)の十文、第三極樂証拠に云く、

初めに十方に対すとは、問はく、十方に浄土あり。なんぞただ極樂にのみ生ぜんと願ふや。答ふ。天台大師のいはく、「もろもろの経論、処々にただ衆生を勧めてひとへに阿弥陀仏を念じ、西方の極樂世界を求めしめたまへり。『無量寿経』・『観経』・『往生論』等の数十余部の論（※原本・経経）の文に、慇懃に指授して西方に生ずることを勧めたり。ここをもつてひとへに念ず」と。〔已上〕大師、一切の経論を披閲したまへること、おほよそ十五遍。知るべし、述べたまへるところ、信ぜずはあるべからず。

（註釈版七祖篇八八七）

[460b] 三に兜率西方の相對

三兜率西方^止雖遠緣深也

（三に兜率・西方二教の住滅の前後といふは、いはく『上生』・『心地』等の上生兜率の諸教は先に滅す、ゆゑに「経道滅尽」といふ。往生西方のこの経特り留まる、ゆゑに「止住百歳」といふ。まさに知るべし、兜率は近しといへども緣淺く、極樂は遠しといへども緣深し。）

『要集』上末（十五）に云く、

第二に兜率に対すとは、問はく、玄奘三蔵のいはく、「西方の道俗ならびに弥勒の業をなす。同じく欲界にしてその行成じやすきがためなり。大小乗の師、みなこの法を許す。弥陀の浄土は、おそらくは凡鄙穢れて修行成じがたからん。旧き経論のごときは、七地以上の菩薩、分に随ひて報仏の浄土を見ると。新論（瑜伽論を指す）の意によらば、三地の菩薩、はじめて報仏の浄土を見ることを得べし。あに下品の凡夫、すなはち往生することを得べけんや」と。〔已上〕天竺すでにしかり。いまなんぞ極樂を勧むるや。

答ふ。中国・辺州、その処異なりといへども、顯密の教門は、その理これ同じ。いま引くところのごとき証拠、すでに多し。いかんぞ仏教の明らかなる文に背きて、天竺の風聞に従ふべけんや。いかにいはんや、祇園精舎の無常院には、病者をして西に面かへて、仏の淨刹に往く想をなさしめんや。つぶさには、下の臨終の行儀のごとし。あきらかに知り

ぬ、仏意ひとへに極樂を勧むるにあり。西域の風俗、あにこれに乖かぬや。

また懷感禪師の『群疑論』には、極樂・兜率において十二の勝劣を立てたり。「一には化主の仏と菩薩と別なるがゆゑに。二には淨・穢土の別。三には女人の有無。四には寿命の長短。五には内・外の有無。「兜率は、内院は退せず、外院は退あり。西方は内・外なし、また退なし。」六には五衰の有無。七には相好の有無。八には五通の有無。九には不善心の起・不起。十には滅罪の多少。(乃至)十一には苦受の有無。十二には受生の異。(乃至)

慈恩は十の異を立てたり。前の人は感師(※**原本**・**感禪師**)の所立を出でず。ゆゑにさらに抄せず。その第九には、西方は、仏、来迎したまふ。兜率はしからず」と。感師は「来[461a]迎は同じ」といふ。第十には、西方は、經論に慇懃に勧めたまふときはめて多し。兜率は多からず、また慇懃にあらざ」と。(云々)

感師また往生の難易において、十五の同の義、八の異の義を立てたり。八の異の義とは、「一には本願の異。いはく、弥陀には引摂の願あり。弥勒には願なし。願なきは、みづから浮ぎて水を度るがごとし。願あるは、舟に乗りて水に遊ぶがごとし。二には光明の異。いはく、弥陀仏の光は、念仏の衆生を照らして、摂取して捨てたまはず。弥陀はしからず。光の照らすは、昼日の遊びのごとく、光なきは、暗のなかに来往するに似たり。三には守護の異。いはく、無数の化仏・觀音・勢至、つねに行者の所に至りたまふ。また『称讚淨土經』にのたまはく、へ十方の十競(※**原本**・**恒**)河沙の諸仏の、摂受するところなり」と。また『十往生經』にのたまはく、へ仏、二十五の菩薩を遣はして、つねに行人を守護せしむ」と。兜率はしからず。護りあるは、多くの人ともに遊ぶに、強賊に逼めらるることを畏ぢざるがごとし。護りなきは、孤り嶮徑に遊ぶに、かならず暴客のために侵さるるに似たり。四には舒舌の異。いはく、十方の仏、舌を舒べて証誠(※**原本**・**成**)したまふ。兜率はしからず。五には聖衆(※**原本**・**衆聖**)の異。いはく、華聚菩薩・山海慧菩薩、弘誓願を發さく、へもし一衆生として、西方に生ること尽きざることあらんに、われもし先づ去らば、正覚を取らじ」と。六には滅罪の多少。へ如前(※**原本**・**同前**)七には重惡の異。いはく、五逆罪を造れるもの

も、また西方に生るることを得。兜率はしからず。八には教説の異。いはく、『無量寿経』にのたまはく、(横に五の悪趣を截り、悪趣自然に閉ぢ、道に昇るに窮極なからん。往きやすくして人なし)と。兜率はしからず。

十五の同の義あらん。なほ説くべからず。難生において(原本..なお生じがたしと説くべからず。)いはんや、異に八の門あり。しかるをすなはち説きて、往きがたしといはんや。請ふ、もろもろの学者、理および教を尋ねて、その難易の二の門を鑑みて、永くその惑ひを除くべし」と。

(註釈版七祖篇八九〇)

これらの説に准じて相対[461b]来りて久し。その住滅前後に約して説かば、新通義なり。

「兜率」とは、『西域記』に云く、「觀史陀。旧に兜卒陀と曰う。兜術陀の訛りなり。五欲において止足を知るが故に」と。

「上生」とは、具さに『仏説觀彌勒菩薩上生兜率陀天経』一卷、沮渠京声訳(「貞」の字の函)を云う。

「心地」とは、具さに『大乘本生心地觀経』八卷、般若等(「与」の字の函)を云う。この中、第三報恩品及び第九功德莊嚴品に上生兜率の説あり。「等」は取にして、等は『下生成仏』等の経を取る。余文解すべし。

四に念仏諸行の相対

四念仏諸行止百歳代也

(四に念仏・諸行二行の住滅の前後といふは、諸行往生の諸教は先に滅す、ゆゑに「経道滅尽」といふ。念仏往生はこの経特り留まる、ゆゑに「止住百歳」といふ。まさに知るべし、諸行往生は機縁もつとも浅く、念仏往生は機縁はなはだ深し。しかのみならず、諸行往生は縁少く、念仏往生は縁多し。また諸行往生は近く末法万年の時を局る。念仏往生は遠く法滅百歳の代に霑ふ。)

「加之(しかのみならず)」等とは、念仏と諸行、ただ機感の浅深あるのみにあらず。さらに修縁の多少を有するにある。和讃に云々(男女貴賤こと

ごとく等)。またさらに化益の近遠等を有するにあるなり。

三に特留の所以に二。初に問。二に答。今は初。

問曰既云^止唯此經乎

(問ひていはく、すでに「われ慈悲をもつて哀愍して、特にこの経を留めて止住すること百歳ならん」(大経・下)といふ。もししからば釈尊、慈悲をもつてしかも経教を留めたまはんに、いづれの経いづれの教か、しかも留まらざらんや。しかるをなんぞ余経を留めずして、ただこの経を留めたまふや。)

文意見るべし。

二に答に三。初に総。二に別。三に結。今は初。

答曰縦雖^止其深意歟

(答へていはく、たとひいづれの経を留むといへども、別して一経を指さば、またこの難を避らじ。ただ特にこの経を留むる、その深き意あるか。)

「縦雖」等とは、先に無窮を^と誦め、「但特」等とは、次に所以を述べる。

二に別に二。初に師釈に依る。二に伏難を通す。今は初。

若依善導^止不留之也

(もし善導和尚の意によらば、この経のなかにすでに弥陀如来の念仏往生の本願(第十八願)を説けり。釈迦、慈悲をもつて念仏を留めんがために、殊にこの経を留めたまふ。余経のなかにはいまだ弥陀如来の念仏往生の本願を説かず。ゆゑに釈尊、慈悲をもつてこれを留めたまはず。)

善導の釈意の出は何れの文に在らん。疏に「462a」云わざるか。「仏の本願に望むるに(※**原本**…**望むるに**、**意**)、衆生をして一向にもつぱら弥陀仏の名を称せしむるにあり」(註釈版七祖篇五〇〇)等と。

二に伏難を通すに三。初に直通、二に引証、三に結示。今は初。

凡四十八^止為往生規

(おほよそ四十八願みな本願なりといへども、殊に念仏をもつて往生の規となす。)

云何が難を伏す。謂く、上文は難あれども本願なんぞ広を限る。依正主伴等に亘るが故に。故に今通すに規あり。謂く、規矩は『説文』に云く、「法度あるなり」と。『史』の「夏本紀」に云く、「準繩を左にし、規矩を右にし」と。規矩なければすなわち器物は成さず。念仏なければすなわち往生不遂。

二に引証

故善導^止積^止仏知人已上

(ゆゑに善導積していはく(法事讃・上)、

「弘誓、門多くして四十八なれども、ひとへに念仏を標してもつとも親しとなす。人よく仏(阿弥陀仏)を念ずれば、仏還りて念じたまふ。専心に仏を想へば、仏、人を知りたまふ」と。(以上))

文意見るべし。事讃の文なり。

三に結示

故知四十^止中之王也

(ゆゑに知りぬ、四十八願のなかに、すでに念仏往生の願(第十八願)をもつて本願中の王となすといふことを。)

「王」とは、最尊の義を取る。王来臣従の義、准じて知るべし。

三に結に二。初は直結。二に引例。今は初。

是以釈迦^止住百歳也

(ここをもつて釈迦の慈悲、特にこの経をもつて止住すること百歳するなり。)

文意見るべし。

二に引例

例如彼觀^止念仏一行也

(例するに、かの『觀無量寿経』のなかに、定散の行を付属せずして、ただ孤り念仏の行を付属したまふがごとし。これすなはちかの仏願に順ずるがゆゑに、念仏一行を付属す。)

文意見るべし。

四に益布の三時に二。初に問。二に答え。今は初。

問曰百歳^止末法之機也

(問ひていはく、百歳のあひだ念仏を留むべきこと、その理しかるべし。この念仏の行は、ただかの時機に被らしむとやなさん、はた正像末の機に通ずとやなさん。)

文意見るべし。

[462b] 二に答

答曰広可^止其義応当

(答へていはく、広く正像末法に通ずべし。後を挙げて今を勧む。その義知るべし。)

文意見るべし。

【科段⑥（随文釈）】

六に特留章

標章

引文

私釈

特留の文意

答 問

直決

由を挙ぐ

引証

止住の文意

積 標

聖道浄土の相對

十方西方の相對

兜率西方の相對

念仏諸行の相對

特留の所以

答 問

別 総

師釈に依る

伏難を通す

直通

引証

結示

結

直結

引例

益布の三時
問 答

七に攝取章に三。初に

弥陀光明^止行者之文

(弥陀の光明余行のものを照らさず、ただ念仏の行者を攝取する文。)

今章の来意、上に准じて二義。

もし文に約すれば、『大経』の四文。これは上に訖る。『観経』の六文、宜しくここに承ずべし。今その初なり。

もし義に約すれば、第四・第五は機広徳勝を判ず。第六は別して時機劣相を示す。今章は別して照護の益を明かす。あるいは可として、上はすなわち名号、今はすなわち光明、すなわちこれ摂化十方の相なり。故に下に三心章あり。またこれ信心求念の相なり。

攝取章とは、あるいは(決疑)云く、「光明唯照念仏行者篇」と。あるいは(大綱)云く、「光明攝取篇」と。あるいは(鶉木)云く、「念仏攝取章」、あるいは(聞香・本義・私集・要義)云く、「光明攝取章」と。義に別途なし。今は略に従うのみ。

二に引文に三。勸観経、二に経疏、三に念門。今は初

観無量寿経^止攝取不捨

(『観無量寿経』にのたまはく、「無量寿仏に八万四千の相あり。一々の相に八万四千の随形好あり。一々の好に八万四千の光明あり。一々の光明あまなく十方世界の念仏の衆生を照らし、攝取して捨てたまはず」と。)

文は疏釈のごとし。五科に云々。しかるに心身の二光の分別、六要の三末のごとし(十二紙)。この文に明かす。

古に両点あり。一は読んで「生」より「照」に至る(※十方世界の念仏の衆生を照らし)(楷定七の六紙、第三正義の意)。二は読んで「界」より「照」に至る(※十方世界を照らし、念仏の衆生)(伝通三の三紙、新記四の十一紙)。今は按ずるに、疏科の兩段、後の点は文に順ずる。和讃云々(十方微塵世界の等)は、前の点の順と差う。

[463a]二に経疏に二。初に分科、二に問答。今は初。

同経疏云止偏蒙照益

(同経の『疏』(定善義) にはく、「無量寿仏」より下(撰取不捨)に至るまでよりこのかたは、まさしく身の別相を觀ずるに、光有縁を益することとを明かす。すなはちその五あり。一には相の多少を明かし、二には好の多少を明かし、三には光の多少を明かし、四には光の照らす遠近を明かし、五には光の及ぶところの処、ひとへに撰益を蒙ることを明かす。)

文相見るべし。

問う。真身觀の仏は真となすか、化となすか。

答う。上の経文に云く、「無量寿仏身(止)由旬」等と。影の末(四紙)に云く、「眼に准じての定んで『身長六十億那由他由旬恒河沙』とは、あるいは伝訳者の謬り」等と。台(妙宗四の二十四紙)は全くこれに依る。

照(下十八紙)に云く、

仏身は量りなし。機見に殊あり。文中の所挙は仮に數量をもつて非數量を顯す。仏身の不可定を彰さんと欲するが故に。すなわち下に云く、前の所説のごときは、無量寿仏の身量無辺、これ凡夫の心力の及ぶ所にあらざる。またあるいは大身を現じ、虚空中に満ちることを云う。この証を挙げ、前の限量なきことを知る(已上、自立。已下は評他)。蠡(※ひょうたんを割って作った器。巻き貝の一種)の杯にて海を酌み、丈尺じょうしゃくの空を量るはこれ得べきか。喩えて見るべきなり。

この釈粗好し。今謂く、この仏は觀門の化身に應ずるが故に。數量を説くは、ただこの文ならず。あるいは丈六を説き、あるいは身量無量無辺を言う。前後不同は何。けだし機に大小あり、見に微著あるをもつての故に、説をして参差さんしあり、觀をして不同あらしむなり。もしこの義に約せば、その「満虚空中」と言うは、なおいまだ尽十方無礙光の実を尽くしえざるなり。また虫はもつて氷を語るべからず、それこの謂か。しかれば終南の判の「是報非化」となすは、通途の多受用の辺に約するのみ。祖判のごときは、別途の願力成就の辺に約するが故に、他受用、なお報中の化に属するものなり。旨を得て

推し配す。左右差なし。まさに知るべし、終南、報となす。宗祖、報中の化となす。

[463b]二に問答に二。初に問。二に答。今は初

問云備修^止有何意也

(問ひていはく、つぶさに衆行を修してただよく回向すれば、みな往生を得。なにをもつてか仏の光あまねく照らすにただ念仏者を撰する、なんの意かあるや。)

文意解し易し。

二に答に三。初に三縁。二に対辨。三に総結。初の三縁に二。初に総標。二に別釈。今は初

答曰此有三義

(答へていはく、これに三義あり。)

文意見るべし。

二に別釈に三。初に親縁。二に近縁。三に増上縁。今は初。

一明親縁^止名親縁

(一には親縁を明かす。衆生、行を起して口につねに仏を称すれば、仏すなはちこれを聞きたまふ。身につねに仏を礼敬すれば、仏すなはちこれを見たまふ。心につねに仏を念ずれば、仏すなはちこれを知りたまふ。衆生仏を憶念すれば、仏また衆生を憶念したまふ。彼此の三業あひ捨離せず。ゆゑに親縁と名づく。)

「親縁」とは、光明名号は父母のごとく、念仏衆生は子のごとし。天性の相関なるが故に。

「衆生」等とは、三業の所作を名けて起行と曰う。この行は憶念より出づ。

憶念とは信心の異名。この信は仏の憶念をもって体となす。故に云く「聞光力のゆゑなれば 心不断」（和讃云々）と。

他家は彼此の三業を積して云く、「仏ただ見聞知あり。衆生に相い従うが故に『彼此』と云う」（伝通三の六紙）。また云く、「衆生の憶念はすでに三業あり。仏還りて憶念するが故に必ず悉く三密加持あり。護念不離を説きて撰取不捨となすが故に」（楷定七の六紙）。これ並べて然らず。仏智満入、連ねて機法一味の益を感じず。なお炭火のごとし。故に云く「称礼念は自行にあらず、ただ如来の行を行ずる者なり」と。終南は相に約し、玄簡（※曇鸞）は礼に約す。上のごとし。

二に近縁。

二明近縁^止名近縁也

（二には近縁を明かす。衆生仏を見んと願すれば、仏すなはち念に応じて現じて目の前にまします。ゆゑに近縁と名づく。）

伝通（三の七紙）に云く、

上の親縁は彼此の同心を念じ[464a]、今の近縁はすなわち一処来現なり。下文に「つねにこの行人の所に来至す」（観経、註釈版一〇七）と云う。観門の人この益あると雖も、なおこれ化身。念仏の行者は常に真仏を見る。龍樹云く、

もし人仏に作らんと願じて、心に阿弥陀を念ずれば、
時に応じてために身を現したまふ。 （註釈版七祖篇一七）

名義相応なるが故に（約行）。明信仏智なるが故に（約心）。
これを思え。

三に増上縁

三明増上縁^止増上縁也

(三には増上縁を明かす。衆生称念すれば、すなはち多劫の罪を除きて、命終らんと欲する時、仏、聖聚とみづから来りて迎接したまふ。もろもろの邪業繫よく礙ふるものなし。ゆゑに増上縁と名づく。)

六要の釈は強たり(たんに義章を引き、ただこれ訓釈す)。またこれ無上縁起なり。上の親近の二は現生の益を取り、この増上縁は往生の益を明かす。問う。終時の来迎、念仏最勝の徳なり。ここをもつて浄土の宗師、承説相襲す。今家は来迎を斥けるや。

答う。これ宗途を知らざるの言。何ぞ評挙に足らん。吾門の因は無来迎を言わず。しかして不来迎を言う。略して梗槩こうがいを弁ぜば、この二門あり。觀經の録のごとし。

二に對辨に二。初に略して念仏を嘆ず。二に広く經説を出す。今は初。

自余衆行止全非比較也

(自余の衆行はこれ善と名づくといへども、もし念仏に比ぶれば、まったく比較にあらず。)

次上の三縁は義に就きてこれを談ず。宜しく文証に順ずべし。故にこの談あり。

二に広く經説を出すに三。初は標。二は釈。三は結。今は初。

是故諸經止念仏功能

(このゆゑに、諸經のなかに処々に広く念仏の機能を讚む。)

諸經の言、傍正通じて指す。

二に釈に三。初は大經、二は小經、三は觀經。今は初。

[464b]如無量寿止名号得生

(『無量寿經』の四十八願のなかのごときは、ただもつばら弥陀の名号を念

じて生ずることを得と明かす。)

玄義に云く、「四十八願」※を發したまへり。「一々の願にのたまはく、」(註
釈版七祖篇三二六)等と。今の意と同じ。准じて云く、「專」は云くこ
れ字眼たり。

二に小經

又如弥陀_止証誠不虛也

(また『弥陀經』のなかのごときは、一日七日もつばら弥陀の名号を念じて
生ずることを得と。また十方恒沙の諸仏の虚しからずと証誠したまふ。)

「專念」の專、またこれ字眼。

「又十」等とは、小經は諸仏をもつて主となすが故に。

三に觀經

又此經定散_止名号得生

(またこの『經』(觀經)の定散の文のなかには、ただもつばら名号を念じ
て生ずることを得と標せり。)

「唯專」の二字、字眼と見るべし。

上来の三經、二は唯の字を下し、三は專の字を下す。皆これ優劣を対辨す
るの意なり。

三は結

此例非一也

(この例一にあらず。)

傍正並びて結ぶ。

三に総結

広顕念仏三昧竟

(広く念仏三昧を顕しをはりぬ」と。)

これ三義あり。一は文に約す。謂く、広く三経を引くが故に。

二に義に約す。謂く、今は三経に依りてもって得生を決す。ここにおいてか、唯撰の義成ず。本願の意明らかなり。あに広顕に非ずや。

三に疏に約す。謂く、経文は幽玄にして、古師皆迷いて、もって觀念となす。大師は証を請い、広くこの深義を顕すが故に。

三に念門

観念法門止雑業行者

(『観念法門』にはく、「また前のごときの身相等の光一々あまねく十方世界を照らすに、ただもつばら阿弥陀仏を念ずる衆生のみありて、かの仏の心光つねにこの人を照らして、撰護して捨てたまはず。すべて余の雑業の行者を照摂することをば論ぜず」と。)

「観念」等とは、護念増上[465a]縁を明かす文なり。信末(八紙)に引きて心光の撰益を証する。文意見るべし。

問う。真身観の文、本書は引用せざるは何。

答う。釈に依りて経を取りたるこれ一例なり。行卷(十九)は『礼讚』を引き(ただ念仏の衆生を観そなはして、撰取して捨てざるがゆゑに、阿弥陀と名づく)、信末(八紙)は念門を引く(すなわち今の文)等これなり。これに加えて総序に「撰取不捨の真言」と云い、行卷(三十四紙)には、

いかにいはんや十方群生海、この行信に帰命すれば撰取して捨てたまはず。ゆゑに阿弥陀仏と名づけたてまつると。これを他力といふ。

(註釈版一八六)

また行卷(四十三)には「撰不撰対」と云い(禿鈔また同じ)、偈には「撰

取心光常照護」と言い、また「我亦在彼撰取中」と云う。信卷本初には「心光照護の一心」と言い、また（三本の十五紙）『要集』（「我亦在彼」等の文）を引き、また（末の初）「心光常護の益」と言い、また末（八紙）には二文（「唯有念仏蒙光撰」等の文、また「但有專念」等の文云々）を引く。『禿鈔』下（二十紙）には二河の文を釈して云く、

「護」の言は、阿弥陀仏果成の正意を顯すなり、また撰取不捨を形すの貌なり（註釈版五三九）

化本（十六）には云く、「仏心の光明、余の雑業の行者を照撰せざるなり。」（註釈版三九六）と。その他和讃・消息等の中、発口これに及ぶに枚挙すべからざる。これを思え。

三に私釈に二。初に問、二に答。今は初。

私問曰^止有何意乎

（「わたくしに問ひていはく、仏の光明ただ念仏者を照らして、余行のものを照らさざるはなんの意かあるや。」）

文意知るべし。

二に答に二。初に標、二に釈。今は初。

答曰解有二義

（答へていはく、解するに二の義あり。）

文意見るべし。

二に釈に二。初は義に就いて解す。二に文に就いて解す。初の義に就いて解すに二。初は [465b] 三縁に約す。二に本願に約す。今は初。

一者親縁等三義如文

(一には親縁等の三の義、文のごとし。)

所引の文を指す。

二に本願を約すに二。初は直述、二に引証。今は初。

二者本願^止故照撰之

(二には本願の義、いはく余行は本願にあらざるがゆゑに、これを照撰したまはず。念仏はこれ本願のゆゑに、これを照撰したまふ。)

上はすなわち親疎・近遠・強弱対なり。すなわち有願無願対なり。

二に引証

故善導和尚^止為強已上

(ゆゑに善導和尚の『六時礼讃』にはく、

「弥陀の身色は金山のごとし。相好の光明は十方を照らす。

ただ仏を念ずるのみありて光接を蒙る。まさに知るべし、本願もつとも強しとなす」と。(以上))

日中讃の文。信末(八紙)に「心光常護益」を引証する者なり。

二に文に就いて解するに二。初は正牒、二は随釈。今は初。

又所引文^止比较(手扁)也

(また引くところの文(定善義)のなかに、「自余衆善雖名是善若比念仏者全非比较也」といふは、)

文意見るべし。

二に随釈に二。初は行の麤妙に約す。二に願の有無に約す。今は初。

意云此約止全非比較（手扁）也

（意のいはく、これ浄土門の諸行に約して比論するところなり。念仏はこれすでに二百一十億のなかに選取するところの妙行なり。諸行はこれすでに二百一十億のなかに選捨するところの粗行なり。ゆゑに「全非比較也」といふ。）

文意見るべし。

二に願の有無に約す。

又念仏止全非比較（手扁）也

（また念仏はこれ本願の行なり。諸行はこれ本願にあらず。ゆゑに「全非比較也」といふ。）

文意見るべし。かくのごとき二義の差別如何。

答う。初は選択の初相に約し、後は撰取の後相に就く。これ異となすのみ。

【科段⑦（随文釈）】

七に撰取章

標章

引文

勸觀經

經疏

分科

問答

問

答

三縁

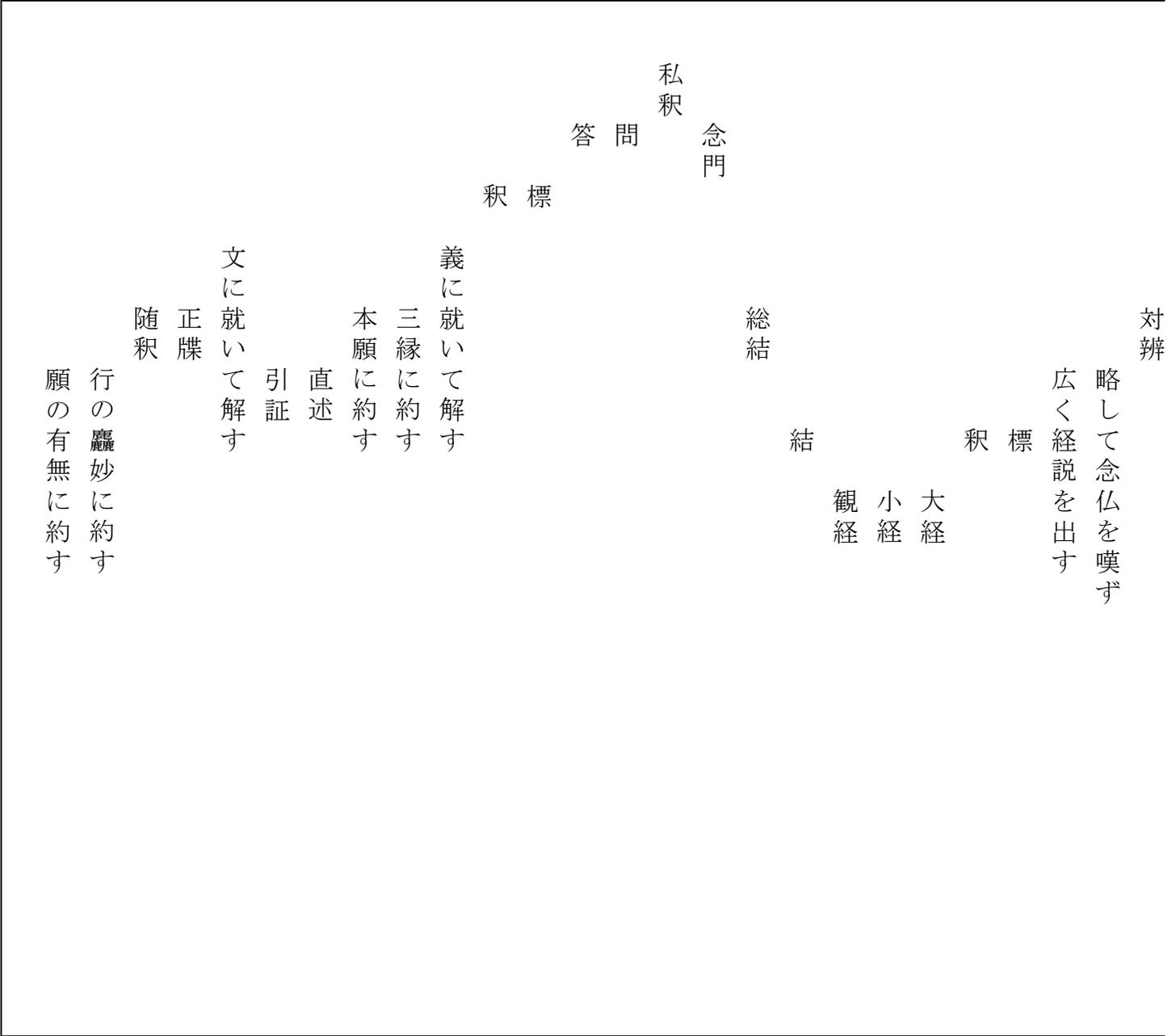
総標

別釈

親縁

近縁

増上縁



八に三心章に三。初に標章。二に引文。三に私釈。今は初。

念仏行者止三心之文

【8】 念仏の行者かならず三心を具足すべき文。

今章の来意、上に准ずるに二義。もし【466a】文に約せば、『観経』第二の上を承けて来るのみ。もし義に約せば、承に近遠あり。その近承とは、次の二章、光明名号摂化十方、今すなわちこれを承ける。「但使信心求念相」なり。その遠承とは、本願章のごとし。

念仏を宗となすは、文の理極成にして、「但其受行」は、猶し濫れることなきにあらず。

今更に判じて云く、信を能入となす、これはこれ真宗の肝要、念仏の奥義なるものなり。来の哲、これを思え。

二に引文に三。初に経文、二に疏文、三に讃文。今は初。

観無量寿止必生彼国

（『観無量寿経』にのたまはく、「もし衆生ありてかの国に生ぜん願ずるものは、三種の心を発して即便往生しなん。なんらをか三となす。一には至誠心、二には深心、三には回向発願心なり。三心を具すればかならずかの国に生ず」と。）

文義、疏のごとし。今祖判に依るに、文に云う「発三種心即便往生」とは、衆義の権輿、談ずるに何ぞ容易ならん。禿鈔下（二十二）に云く、

ひそかに『観経』の三心往生を案ずれば、これすなはち諸機自力各別の三心なり。『大経』の三信に帰せしめんがためなり、諸機を勧誘して三信に通入せしめんと欲ふなり。三信とは、これすなはち金剛の真心、不可思議の信心海なり。また「即往生」とは、これすなはち難思議往生・真の報土なり。「便往生」とは、すなはちこれ諸機各別の業因果成の土なり、胎宮・辺地・懈慢界、双樹林下往生なり、また難思往生なりと、知るべし。

（註釈版五四一）

この文意に准ずれば、三心これ因、往生これ果、因すでに差あり、果あに別なし。云何が因差。定散諸機各別の三心故に。云何が果別。疑城胎宮辺地懈慢諸土故に。

所承あらんとするや、所承なからんとするや。

かくのごとき深義あに所承なきや。因差は玄簡を承く。果別は西河を承く。『論註』上に云く、

「真実功德[466b]相」とは、二種の功德あり。一には有漏の心より生じて法性に順ぜず。いはゆる凡夫人天の諸善、人天の果報、もしは因もしは果、みなこれ顛倒、みなこれ虚偽なり。このゆゑに不実の功德と名づく。

(註釈版七祖篇五六)

等と。これはこれ因差、玄簡を承けるなり。『安樂集』上に云く、

相善は力微なるをもつて、ただ相土に生じてただ報化の仏を見(※原本…観)る。
(註釈版七祖篇一九七)

等と。これはこれ果別、西河を承けるなり。

經疏に云う「真実に二種あり」等、禿鈔の冒註に二力の義を分別すると全く脂合す(?)。

二に疏文に四。初に至誠心。二に深心。三に発願心。四に総結。初の至誠心の中に三。初に標、二に釈、三に結。今は初。

同經疏云_止至誠也

(同經の『疏』(散善義)にはく、『經』(觀經)にのたまはく、へ一には至誠心)と。

六要に云く、

依文の三卷、一々に『経』を釈す。何ぞこの文に限りて、この言を置くや。答。言う所の三心は、一経の眼目、出離の要道なり。故に仏言を挙げて信順を勧むるなり。

(浄真全四一一〇四)

凡そ疏中に「経云」の言を置くは、玄義の釈名の初と二処にして已む。並にこれ枢要の処なり。

二に釈に三。初に字訓、二に総じて勧誡を釈す、三に別して二利を釈す。今は初。

至者真誠者実

(〈至〉は真なり。〈誠〉は実なり。)

信本に云く、

至心といふは、至とはすなはちこれ真なり、実なり、誠なり。心とはすなはちこれ種なり、実なり。

(註釈版二二九)

真実の訓、この文を取るか。六要に云く、

「至」の学(※原本…字)「真」の訓、管見いまだ覃ばず。ただかくのごときの例、聖典にこれ多し。いわんや大権の釈、仰いでこれを信ずべし。

(浄真全四一一〇四)

今謂くかくのごときの義釈、我より始と成し、何ぞ必ず[467a]俗典を取らんとす。私釈の相对、秃鈔の拡充、旨を得て領会す。

二に総じて勧誡を釈すに四。初に真実を勧む。二に虚仮を誠める。三に誠の由を明かす。四に勧の由を明かす。今は初。

欲明一切止心中作

(一切衆生の身口意業に修するところの解行、かならず真実心のうちになすべきことを明かさんと欲す。)

六要に云く、

「欲明」等とは、勸門の積也。須の字の訓用の訓を用うべし。「心中作」とは行者の作に非ず、佛の所作に約す、是則凡心は真実に非るが故に、佛心真実の徳に帰するに依て其の佛徳と為して往生の益を得、其の所歸に就て真実心と云ふ、依主積也。(真聖全二・二七九)

信本に云く、

ひそかにこの心を推するに、一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして清浄の心なし、虚仮諂偽にして真実の心なし。ここをもつて如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひしとき、三業の所修、一念一刹那も清浄ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清浄の真心をもつて、円融無碍不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心をもつて、諸有の一切煩惱悪業邪智の群生海に回施したまへり。すなはちこれ利他の真心を彰す。ゆるぎに疑蓋雜はることなし。この至心はすなはちこれ至徳の尊号をその体とせるなり。

ここをもつて『大経』(上)にのたまはく、「不生欲覚」(乃至)功德成就」已上 (註釈版二三一)

二に虚偽仮を誡める

不得外現止真実業也

(外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ。貪瞋・邪偽・奸詐百端にして悪性侵しがたし。事、蛇蝎に同じ。三業を起すといへども名づけて雑毒の善となす。また虚仮の行と名づく。真実の業と名づけず。)

六要に云く、

「不得」等とは、誠門の[467b]積也。此の句の文点、現より得に還る、当流の学者定て存知か。

(真聖全二・二七九)

「蛇蝎」とは、法華譬喩品に云く、「**蛇** (※**蛇**) **蝎**」と。文句云く、

蛇蝎は毒を盛り、触らずして吸う。非理にして嗔を生ずに譬う。蝎蝎はもし触ればすなわち螫す。理に執して瞋すに譬う。述懐讚のごとし。

三に誠の由を明かす

若作如此止必不可也

(もしかくのごとき安心・起行をなせば、たとひ身心を苦励して、日夜十二時急に走り急になして、頭燃を救(※**原本**・**灸**)ふがごとくすとも、すべて雑毒の善と名づく。この雑毒の行を回らして、かの仏の浄土に生ずることを求めんと欲せば、これかならず不可なり。)

六要云く、

「若作」等とは、自力の善雑毒たるが故に身心を励すと雖も往生を得ざることを明す。

(真聖全二・二七九)

「如灸」等とは、止観に云く、「頭燃を救うがごとし」と。今また准じて解す。

四に勸の由を明かす

何以故止亦皆真実

(なにももつてのゆゑぞ。まさしくかの阿弥陀仏の因中に菩薩の行を行じたまひし時に、乃至一念一刹那も、三業に修するところ、みなこれ真実心のうちになしたまひしによりてなり。おほよそ施為・趣求するところ、またみな真実なるべし。)

六要に云く、

「何以故」とは、懲問の言也。これ雑毒虚仮の行不生の由を懲す。「正由」等とは、(※省略…是れ其の答也。)言うところはかの浄土弥陀の因行・果報より起る、因中の所修皆是れ真実なり。故に生ぜんと欲はん者真実なるべしと也。

問う。凡夫の心は本是れ不実なり、争でか彼の佛の所行の真実に齊からん。答う。佛願に帰するを以て真実と名く也。(真聖全二・二七九)

等と。また云く、

施為の名目之を依用せず、「凡所施」は、是れ如来の施、佛は是れ能施、「為趣求」とは、是れ行者に約す、(真聖全二・二八〇)

三に別に二利を積すに二。初に標列、二に随積。今は初

又真実有_止利他真実

(また真実に二種あり。一には自利の真実、二には利他の真実なり。)

六要に云く、「又真」等とは、重_て[468a]真実を積す」等と。また禿鈔下に云く、

また真実に二種あり、一つには自利真実、二つには利他真実なり」と。

利他真実について、また二種あり。一つには、「おほよそ施したまふところ趣求をなすは、またみな真実なり」(散善義)と、二つには、「不善の三業はかならず真実心のなかに捨てたまひしを須るよ。

またもし善の三業を起さばかならず真実心のなかになしたまひしを須めて、内外・明闇を簡ばず、みな真実を須るがゆゑに至誠心と名づく」

(註釈版五一八)

この文併せて披く。

二に随積に二。初に自利真実。二に利他真実。初の自利真実に二。初は厭離真実。二は欣求真実。初に厭離真実に二。初は標。二は積。今は初。

言自利真実止復有二種

(自利の真実といふは、また二種あり。)

禿鈔に云く、

自利真実について、また二種あり。

一には厭離真実なり。

聖道門

難行道

豎出

自力

豎出とは難行道の教なり、厭離をもつて本とす、自力の心なるがゆゑなり。

二には欣求真実なり。

浄土門

易行道

横出

他力

横出とは易行道の教なり、欣求をもつて本とす、なにをもつてのゆゑに、願力によりて生死を厭捨せしむるがゆゑなりと。(註釈版五二〇)

今はこれを併せて披く。

二に釈に二。初は悪を廃す。二は善を修す。今は初。

一者真実止真如是也

(一には真実心のうちに、自他の諸悪および穢国等を制捨して、行住坐臥に一切の菩薩の諸悪を制捨するに同じく、われもまたかくのごとくならんと想ふなり。)

文意見るべし。

二に善を修す。

[468b]

二者**真実止凡聖等善**

(二には**真実心**のうちに、自他の**凡聖等**の善を勤修して、)

文意見るべし。

二に欣求真実に三。初に口業、二に身業、三に意業。初の口業に二。初に欣求相。二に厭離相。今は初。

真実心中口業止依正二報

(**真実心**のうちに、口業をもつてかの阿弥陀仏および**依正二報**を讚歎し、)

科に准じて解すべし。

二に厭離相。

又**真実心中口業止随喜也**

(また**真実心**のうちに、口業をもつて三界・六道等の自他の**依正二報**の苦悪の事を毀厭し、また一切衆生の三業所為の善を讚歎す。善業にあらざるをばつつしみてこれを遠ざかれ、また随喜せざれ。)

科に准じて解すべし。

二に身業に二。初に欣求相。二に厭離相。今は初。

又**真実心中身業止依正二報**

(また**真実心**のうちに、身業をもつて合掌礼敬し、四事等をもつてかの阿弥陀仏および**依正二報**を供養す。)

科に准じて解すべし。

二に厭離相。

又真実心中身業止依正二報

(また真実心のうちに、身業をもつてこの生死三界等の自他の依正二報を輕慢し厭捨し、)

科に准じて解すべし。

三に意業に二。初に欣求相。二に厭離相。今は初。

又真実心中意業止如現目前

(また真実心のうちに、意業をもつてかの阿弥陀仏および依正二報を思想し觀察し憶念して、目前に現ずるがごとくにし、)

科に准じて解すべし。

二に厭離相。

又真実心中意止依正二報

(また真実心のうちに、意業をもつてこの生死三界等の自他の依正二報を輕賤し厭捨し、)

科に准じて解すべし。

二に利他真実に二。初に悪を廢す。二に善を修す。今は初。

不善三業止心中捨

(不善の三業をばかならずすべからく真実心のうちに捨つべし。)

科に准じて解すべし。

二に善を修す。

又若起善止心中作

(「またもし善の三業を起さば、かならずすべからく真実心のうちになすべし。内外明闇を簡ばず、みなすべからく真実なるべし。」)

科に准じて解すべし。

三に結。

故名至誠心

(ゆゑに至誠心と名づく。)

文意知るべし。上来の分科は全く禿鈔に依る。また信本(六右)の引証に依る。この積は乃至の言を置く。中間の自利真実・欣求真実等の八段の文を越隔す。鈔の意と同じ。また化本(八左)にこの八段を引く。「亦復」の意同じ。

二は深信に二。初は標、二は積。今は初。

二者深信

(「二には深信」と。)

文頭見るべし。禿鈔は七の深信相に広げる。次下に自詳す。

二に積に二。初は総積、二は別頭。今は初。

言深信者止信之心也

(「深信」といふはすなはちこれ深信の心なり。)

六要に云く、「深等と言うは、能信の相を明かす」と。

二に別頭に二。初は略積、二は広積。今は初。

亦有二種

(また二種あり。)

六要に云く、「亦有等とは、これすなわち機法二種の信心か」と。

二に広釈に二。初に就人立信、二に就行立信。初の就人立信に三。初に初信の機、二に信法、三に総結。今は初。

一者決定止出離之縁

(一には決定して深く、自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没しつねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。)

六要に云く、

「無有」等とは、正く[469b]有善・無善を論ぜず自の功を仮らず、出離偏に他力に在ことを明す。聖道の諸教は盛に生佛一如の理を談ず、今の教は自力の功無ことを知に依て偏に佛力に帰す、之に依て此の信殊に最要也。
(聖典全書四・一一〇七)

問う。禿鈔は七深信を列する中、この深信を釈して「すなわちこれ自利信心なり」と言う。この義云何。

答う。次上に並べて二信を挙ぐ。その釈に云く、「いまこの深信は他力至極の金剛心、一乗無上の真実信海なり」と。これはこの三経七祖の伝える所の真印の者なり。しかして今別して七深信を列するは、この衆機に亘り、意は真仮を簡ぶ。なかならずくだ機を信じて法を信ずるにあらざる者あり。ここをもってこれを判じて自利に属するのみ。信本の連引はまた弘願の意。

二信の十義、観経録(泰通先師の説)のごとし。一は聖道安心を揀ばんがための故に(かれはすなわち依心起行。これはすなわち謙敬奉行。六要に云々)。二は諸師の謬解を破らんがための故に(煩惱の賊害は所被の機のためにただ念仏為宗の旨に達せざらんが故にこれを破す)。三に仰信の主となすを示さんがための故に(かれはすなわち解を貴ぶ。これはすなわち仰を貴

ぶ)。四に仏願の正機を明かさんがための故に（逆悪無信の故に信機。願行具足の故に信法）。五に慢怠の二失を護らんがための故に（慢は貢高、怠は下劣）。六に自善に執じて情を遮せんがための故に（他は心より入る。今は仏より入る）。七に偏に宿善に執ずるを付せんがための故に（影解の五逆往生は全く宿善に由らんがための故に）。八は定散俱に回せしめんがための故に（もしこの積なくば定めて人は定に執ずる故に）。九に信心無二を示さんがための故に（もしこの積なくば、信かならず異あり）。十に念報いよいよ深まらしめんための故に（信機故に慚愧、信法故に恭敬）。

二に信法に六。初は仏願を信ずるの相。二に仏教を信ずるの相。三に仏語を信ずるの相。四に仰信の相。五に解信の相。六に自信を建つる。今は初。

[470a]

二者決定_止定得往生

（二には決定して深く、かの阿弥陀仏の、四十八願をもつて衆生を摂受したまふこと、疑なく慮りなくかの願力に乗りてさだめて往生を得と信ず。）

二信十義は次上の積のごとし。これはこれ大経に依るなり。

二に仏教を信ずるの相。

又決定_止使人欣慕

（また決定して深く、釈迦仏のこの『観経』の三福・九品・定散二善を説きて、かの仏の依正二報を証讃して、人をして欣慕せしめたまふを信ず。）

これはこれ観経に依るなり。

三は仏語を信ずるの相。

又決定_止決定得生

（また決定して深く、『弥陀経』のなかに、十方恒沙の諸仏、一切凡夫を証勸したまふ、決定して生ずることを得と信ず。）

これはこれ小経に依るなり。三経鼎峙して常に判ずる所のごとし。

四に仰信の相

又深信_止真仏弟子

(また深信とは、仰ぎ願はくは、一切の行者等、一心にただ仏語を信じて身命を顧みず、決定してより行じて、仏の捨てしめたまふをばすなはち捨て、仏の行ぜしめたまふをばすなはち行じ、仏の去らしめたまふ処をばすなはち去る。これを仏教に随順し、仏意に随順すと名づけ、これを仏願に随順すと名づく。これを真の仏弟子と名づく。)

禿鈔の意に依る。この中具さに三遣・三随順・三是名あり。応のごとく知るべし。

五に解信の相に三。初に総じて勧む、二に別して勧む、三に結勧。今は初。

又一切_止不誤衆生也

(また一切の行者ただよくこの『経』(観経)によりて深信して行ずるものは、かならず衆生を誤たじ。)

解信に約するが故に語は自他に及ぶ。

三(※二)に別して勧むに三。初に果人を揚げる。二に因人を抑える。三に相對して弁ず。今は初。

何以故_止実語故

(なにをもつてのゆゑに。仏はこれ満足大悲の人なるがゆゑに。実語のゆゑに。)

智断は円かに大悲具足するが故に。

二に因人を抑える。

除仏已還_止果願未圓

(仏を除きてよりこのかたは智行いまだ満たずして、その学地にありて、正習二障ありていまだ除かず、果願いまだ円かならざるによりて、)

智断いまだ円かならず。大悲何ぞ満ちん。

三に相對して弁ず。二に別弁。今は初。

[470b]

此等凡聖_止為定也

(これらの凡聖はたとひ諸仏の教意を測量すれども、いまだ決了することあたはず。平章することありといへども、かならずすべからく仏の証を請じて定となすべし。)

文意見るべし。

二に別して弁ず。

若称仏意_止也応知

(もし仏の意に称へばすなはち印可して、(如是如是)とのたまふ。もし仏の意に可はざれば、すなはち(なんぢらの所説、この義不如是)とのたまふ。印したまはざるは、すなはち無記・無利・無益の語に同じ。仏の印可したまふは、すなはち仏の正教に随順す。もし仏のあらゆる言説は、すなはちこれ正教・正義・正行・正解・正業・正智なり。もしは多、もしは少、もろもろの菩薩・人・天等を問はず、その是非を定む。もし仏の所説は、すなはちこれ了教なり。菩薩等の説は、ことごとく不了教と名づく、知るべし。)

禿鈔の判に依る。この中具さに六即・三印・三無・六正・二了あり。応のごとく知るべし。

三に結勸。

是故今時止大益也

(このゆゑにいまの時、仰ぎて一切の有縁の往生人等に勸む。ただ深く仏語を信じて専注奉行すべし。菩薩等の不相応の教を信用して、もつて疑礙をなし、惑ひを抱きてみづから迷ひて、往生の大益を廃失すべからず。)

文意見るべし。上来の五段は並べてこれ利他。禿鈔及び信本の引意しかるが故に。

六に建立自心相 (※自信を建つる) に二。初に上文を標挙す。二に広くその相を釈す。今は初。

又深心深信者

(また深心は「深信なり」とは、)

准じて科す、知るべし。

二に広くその相を釈すに二。初に総じて明す、二に問答。今は初。

決定建立止傾動也

(決定して自心を建立して、教に順じて修行して、永く疑錯を除きて、一切の別解・別行・異学・異見・異執のために、退失し傾動せられざるなり。)

かくのごとき一段はこれ自利に属す。禿鈔及び化本の引意しかるが故に。「建」と云い、「自」と云うは、策励義存の者なり。禿鈔の判に依る。この中具さに二別・三異あり。応のごとく知るべし。

二に問答に二。初に問、二に答。今は初。

問曰凡夫止不生怯退也

(問ひていはく、凡夫は智浅く、惑障処深し。もし解行不同的人に、多く経

論を引きて来りてあひ妨難し、証して（一切の罪障の凡夫往生を得ず）といふに逢はん、いかんがかの難を対治して、信心を成就して、決定して直に進みて、怯退を生ぜざらんや。）

文意見るべし。

二に答に二。初にまず問意を牒す。二に正しく報言を誨える。今は初。

[471a]

答曰若有_止即報云

（答へてはいはく、もし人ありて多く経論の証を引きて、（生ぜず）といはば、行者すなはち報へていへ。）

文意見るべし。

二に正しく報言を誨えるに二。初に正答、二に述由。今は初。

仁者雖將_止不受汝破

（へなんぢ、経論をもつて来り証して《生ぜず》といふといへども、わが意のごときは決定してなんぢが破を受けず。）

文意見るべし。

二に述由に二。初に四別相、二に四信相。今は初。

何以故_止決定奉行

（なにをもつてのゆゑに。しかもわれまた、これかのもろもろの経論を信ぜざるにはあらず。ことごとくみな仰信す。しかるに仏かの経を説きたまふ時は、処別に、特別に、対機別に、利益別なり。またかの経を説きたまふ時は、すなはち『観経』・『弥陀経』等を説きたまふ時にあらず。しかるに仏の説教は、機に備ひて時また不同なり。かれすなはち通じて人・天・菩薩の解行を説く。いま『観経』の定散二善を説くは、ただ韋提および仏の滅後の五濁・五苦等の一切凡夫のために、証して《生ずることを得》とのたまふ。この

因縁のために、われいま一心にこの仏教によりて決定して奉行す。

文意見るべし。禿鈔の判に依らば、この中に具さに四判あり。一は所別、二に時別、三に対機別、四に利益別。応のごとく知るべし。

二に四信相に四。初に往生信心、二に清浄信心、三に上上信心、四に畢竟信心。今は初。

縦使汝等止往生信心也

（たとひなんぢら百千万億ありて《生ぜず》といふとも、ただわが往生の信心を増長し成就せん）と。）

文意見るべし。

二に清浄信心。

又行者更止所破壊故

（また行者さらに向かひて説きていへ。へなんぢよく聴け。われいまなんぢがためにまた決定の信相を説かん。たとひ地前の菩薩・羅漢・辟支仏等、もしは一、もしくは多、乃至、十方に遍満して、みな経論の証を引きて《生ぜず》といはば、われまたいまだ一念の疑心を起さじ。ただわが清浄の信心を増長し成就せん。なにをもつてのゆゑに。仏語は決定成就の了義にして、一切のために破壊せられざるにゆるがゆゑに）と。）

文意見るべし。

三に上上信心に二。初は直答、二に由を述べ。今は初。

又行者止上上信心

（また行者よく聴け。たとひ初地以上十地以来、もしは一、もしくは多、乃至、十方に遍満して、異口同音にみないはく、《釈迦仏、弥陀を指讚し、三界・六道を毀訾して、衆生を勸励し、《専心に念仏し、および余善を修して、こ

の一身を畢へて後に必定してかの国に生ず」といふは、これはかならず虚妄なり、依信すべからず」と。われこれらの所説を聞くといへども、また一念の疑心を生ぜずして、ただわが決定して上上の信心を増長し成就せん。」

文意見るべし。禿鈔の判に夜。この中に五実二異あり。応のごとく知るべし。

二に由を述ぶ。

何以故止不違仏教也

（なにをもつてのゆゑに。すなはち仏語は真実の決了の義なるによるがゆゑに。仏はこれ実知・実解・実見・実証にして、これ疑惑の心中の語にあらざるがゆゑに。また一切の菩薩の異見・異解のために破壊せられず。もし実にこれ菩薩ならば衆く仏教に違はじ。）

文意見るべし。

[471b] 四に畢竟信心に二。初に直答、二に由を述ぶ。今は初。

又置此事止生彼仏国也

（またこの事を置け。行者まさに知るべし。たとひ化仏・報仏、もしは一、もしは多、乃至、十方に遍満して、おのおの光を輝かし、舌を吐きて、あまねく十方に覆ひて、一々に説きてのたまはく、[（]釈迦の所説にあひ讚め、一切の凡夫を勧発して、[）]専心に念仏し、および余善を修して、回願してかの浄土に生ずることを得」といふは、これはこれ虚妄なり、さだめてこの事なし」と。われこれらの諸仏の所説を聞くといへども、畢竟じて一念の疑退の心を起して、かの仏国に生ずることを得ずと畏れじ。）

文意見るべし。

二に述由に二。初に道理、二に文証。今は初。

何以故^止不相違失

(なにをもつてのゆゑに。一仏は一切仏なり。あらゆる知見・解行・証悟・果位・大悲、等同にして少しき差別なし。このゆゑに一仏の制したまふところは、すなはち一切の仏同じく制したまふ。前仏の殺生・十悪等の罪を制断したまふがごとく、畢竟じて犯せず行ぜざるは、すなはち十善・十行と名づけ、六度の義に随順す。もし後仏ありて世に出でんに、前に前の十善を改めて十悪を行ぜしむべけんや。この道理をもつて推驗するに、あきらかに知りぬ。諸仏の言行はあひ違失せず。)

文意見るべし。

二に文証に三。初に直指、二に引文、三に結。今は初。

縦令^止釈迦一仏所化

(たとひ釈迦一切の凡夫を指し勧めて、へこの一身を尽して専念専修して、命を捨てて以後にさだめてかの国に生ず)といふは、すなはち十方の諸仏ごとくみな同じく讚め、同じく勧め、同じく証したまふ。なにをもつてのゆゑに。同体の大悲のゆゑに。一仏の所化は、すなはちこれ一切の仏の化なり。一切の仏の化は、すなはちこれ一仏の所化なり。)

文意見るべし。

二に引文に二。初に釈迦讚嘆、二に諸仏証讚、初に釈迦讚嘆に二。初に讚、二に勧。今は初。

即弥陀^止經種種莊嚴

(すなはち『弥陀^止經』のなかに説きたまはく、釈迦極樂の種々の莊嚴を讚歎し。)

文意見るべし。

二に勧

又勸一切_止定得往生

(また一切凡夫を勧めて、(一日七日、一心にもつぱら弥陀の名号を念じて、さだめて往生を得しめたまふ)と。)

文意見るべし。

二に諸仏証讚に二。初に讚、二に証。今は初。

次下文云_止即其証也

(次下の文(同)にのたまはく、(十方におのおの恒河沙等の諸仏ましまして、同じく釈迦を讚めて、よく五濁悪時、悪世界、悪衆生、悪煩惱、悪邪、無信の盛りなる時において、弥陀の名号を指讚して、衆生を勧励して、(称念すればかならず往生を得)と。すなはちその証なり。)

文意見るべし。

二に証。

又十方仏_止必無疑也

(また十方の仏等、衆生の釈迦一仏の所説を信ぜざることを恐れして、すなはちともに同心同時におのおの舌相を出して、あまねく三千世界に覆ひて、誠実の言を説きたまふ。(なんぢら衆生、みなこの釈迦の所説・所讚・所証を信ずべし。一切の凡夫、罪福の多少、時節の久近を問はず、ただよく上百年を尽して、下一日七日に至るまで、一心にもつぱら弥陀の名号を念ずれば、さだめて往生を得ること、かならず疑なし)と。)

文意見るべし。

三に結。

是故一仏_止其事也

(このゆゑに一仏の所説は、すなはち一切の仏同じくその事を証誠したまふ。)

文意見るべし。

[472a] 三に総結。

此名就人立信

(これを人に就きて信を立つと名づく。)

文意見るべし。

二に行に就いて信を立てる。

次就行止二者雜行

(次に行に就きて信を立つとは、しかるに行に二種あり。一には正行、二には雜行なり。「云々。前の二行のなかに引くところのごとし。繁きを恐れて載せず。見る人、意を得よ。」)

上に已に弁ずるがごとし。

三に回向發願心に二。初に標、二に釈。今は初。

三者回向發願心

(三には〈回向發願心〉と。)

六要に云く、

「三者」等とは、又經文を牒す。先づ此の心を釈するに二種の意あり。「廻向」と言より「願心也」に至るまで五行余は廻因向果、(※省略…今「乃至」と言て略する所是也、)是れ自力に約す、(※省略…故に且く之を除く。今の所引)「又廻向」の下「大益也」に至までは廻思向道、是他

力に約して証得の義を明す。「問曰」已下「得益也」に至までは是れ問答也。
(二・二八二)

『観経』の影疏に云く、

直爾に趣未(※原本・求)す。これを説いて願と為す。善を挟んで趣求するを説いて回向と為す。

『要集』の中に云く、

発願と回向とは、なんの差別かある。答ふ。誓ひて求むるところを期する、これを名づけて願となす。所作の業を回してかしこに趣向する、これを回向といふ。
(註釈版七祖篇九六四)

二に積に二。初に牒文、二に随積。今は初。

言回向発願心者

(〈回向発願心〉といふは、)

文意見るべし。

二に随積に二。初に往相回向、二に還相回向。初に往相回向に二。初に自利回向、二に利他回向。今は初。

過去及次^止発願心也

(過去および今生の身口意業に修するところの世・出世の善根、および他の一切の凡聖の身口意業に修するところの世・出世の善根を随喜して、この自他の所修の善根をもつて、ことごとくみな真実の深信の心のうちに回向して、かの国に生ぜんと願ず。ゆゑに回向発願心と名づく。)

いわゆる回因向果の相なり。

[472b] 二に利他回向に三。初に直釈、二に問答、三に結。今は初。

又回向止大益也

(また回向発願とは、かならずすべからく決定の真実心のうちに回向して、得生の想を願作すべし。この心深く信ずることなほ金剛のごとく、一切の異見・異学・別解・別行の人等のために動乱破壊せられず。ただこれ決定して一心に捉りて、正直に進みて、かの人の語を聞きて、すなはち進退ありて、心に怯弱を生じて、回顧して道に落ちて、すなはち往生の大益を失ふことを得ざれ。)

いわゆる回思向道相なり。禿鈔の引用の義は利他に属す。また云く、

回向発願して生るるものについて、信心あり。信心とは、「得生の想をなす、この心深信すること、なほ金剛のごとし」となり。この深信について、一譬喩・二異・二別・一問答・二回向あり。
(註釈版五三二)

等と。中について初の三はこの文を出し、旨を得て領会す。信本(二十五)に全文を引く(云々)

二に問答に二。初に問、二に答、今は初。

問曰若有止不退位也

(問ひていはく、もし解行不同の邪雑の人等ありて、来りてあひ惑乱して、種々の疑難を説きて、へ往生を得ず」といひ、あるいははん、へなんぢら衆生、曠劫よりこのかたおよび今生の身口意業に、一切の凡聖の身の上においてつぶさに十悪・五逆・四重・謗法・闡提・破戒・破見等の罪を造りて、いまだ除尽することあたはず。しかもこれらの罪は三界の悪道に繋属す。いかんぞ一生の修福念仏をもつて、すなはちかの無漏無生の国に入りて、永く不退の位を証悟することを得んや」と。)

禿鈔に云く、

一問答について、七悪・六譬・二門・四有縁・二所求・二所愛・二欲学
・二必あり。
(註釈版五三三)

等と。いわゆる七悪はこの文を出す。

六要の三(本の十一紙)に云く、

問う。今この問答、深心の中に致す所の問答と、何の別かあるや。

答う。上は無有出離の縁の機に約してこれを言ふ、故に凡夫難生の義に就てその四重問答の積あり。今は一生修福の念仏、過現三業の悪業を消し難きことを問いて、答うるに佛力不思議の益を明す。上下の問答差異これに在り。

今按ずるに上の難は外より。且く法徳に就く。文に引経論来等を云うが故に。今の難は内より。且く機相に就く。文に七悪等を列するが故に。

二河の譬喩の護に二相あり。一は内の守護。招喚の文に云く、「われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」とはこれなり。二に外の守護。群賊[473a]等の喚び廻すを云うはこれなり。すなわち上難の意なり。

二に答に二。初に法説、二に譬喩。初に法説に五。初に総示、二に引例、三に得益、四に返詰。五に解行。今は初。

答曰諸仏止随情非一

(答へていはく、諸仏の教行、数塵沙に越えたり。稟識の機縁、情に随ひて一にあらず。)

いわゆる適化無方。陶誘一にあらざるものなり。

二に引例に二。初に正挙、二に比況。今は初。

譬如世間止千差万別

(たとへば世間の人の眼に見つべく信じつべきがごときは、明はよく闇を破し、空はよく有を含す、地はよく載養す、水はよく生潤す、火はよく成壊するがごとし。かくのごとき等の事、ことごとく待対の法と名づく。すなはち目に見つべし。千差万別なり。)

禿鈔六譬はこの文より出す。

二に比況。

何況仏法止種種益也

(いかにいはんや仏法の不思議の力、あに種々の益なからんや。)

義は通別あり。通は一代を指す。別は念仏を斥ける。

三に得益

随出一門止各求解脱

(随ひて一の門より出づといふは、すなはち一の煩惱の門より出づるなり。随ひて一の門より入るといふは、すなはち一の解脱智慧の門より入るなり。これがために縁に随ひて行を起して、おのおの解脱を求む。)

浄名不二、楞嚴円通、みなその義なり。善財証入またこの類なり。もし円解に約せば、一出一切、一入一切、不可思議なるものなり。禿鈔の二門はこの文より出す。

四に返詰

汝何以乃止得解脱也

(なんぢ、なにをもつてかすなはち有縁にあらざる要行をもつてわれを障惑する。しかもわが愛するところは、すなはちこれわが有縁の行なり。すなはちなんぢが所求にあらず。なんぢが愛するところは、すなはちこれなんぢが

有縁の行なり。またわが所求にあらず。このゆゑに所樂に随ひてその行を修すれば、かならず疾く解脱を得。）

文意見るべし。禿鈔の四有縁・二所求・二所受、この文より出す。

[473b] 五に解行

行者当知止多得益也

（行者まさに知るべし。もし解を学せんと欲はば、凡より聖に至るまで、乃至仏果まで、一切無礙にみな学することを得よ。もし行を学せんと欲はば、かならず有縁の法によれ。少しき功勞を用ゐるに多く益を得。）

世人になお博文約礼と言う。今この一句、衣被苟からずや。日溪に云々。常に所談のごとし。禿鈔の二欲学・二必はこの文より出す。

二に譬喩に三。初に略標、二に正説、三に結勸。今は初。

又曰一切止異見之難

（また一切の往生人等にまうす。いまさらに行者のために一の譬喩を説きて、信心を守護して、もつて外邪異見の難を防がん。）

あるいは出抛を経論中に求める。何ぞその迂なり。もしそれ因縁は宜しくその抛を求むべし。事を因とし理を談ずるが故に。譬喩はすなわち理をなして事を施さざるが故に。

二に正説に二。初に譬文、二に合文。今は初。

何者是也止此是踰也

（何の者かこれや。たとへば、人ありて西に向かひて百千の里を行かんと欲するに、忽然として中路に二の河あり。一はこれ火の河、南にあり。二はこれ水の河、北にあり。二河おのおの闊さ百歩、おのおの深さ底もなく、南北辺なし。まさしく水火の中間に一の白道あり。闊さ四五寸ばかりなるべし。

この道東の岸より西の岸に至るまで、また長さ百歩、その水の波浪交過して道を湿す。その火の炎また来りて道を焼く。水火あひ交はりてつねに休息することなし。この人すでに空曠のはるかなる処に至るに、さらに人物なし。多く群賊・悪獣のみあり。この人の単なるを見て、競ひ来りて殺さんと欲す。この人死を怖れて直に走りて西に向かふに、忽然としてこの大河を見る。すなはちみづから念言すらく、へこの河南北に辺畔を見ず。中間に一の白道を見る。きはめてこれ狭少なり。二の岸あひ去ること近しといへども、なによりてか行くべき。今日さだめて死すること疑はず。まさしく到り回らんと欲すれば、群賊・悪獣漸々に来り逼む。まさしく南北に避り走らんと欲すれば、悪獣・毒虫競ひ来りてわれに向かふ。まさしく西に向かひて道を尋ねて去らんと欲すれば、またおそらくはこの水火の二河に墮することと。時に当りて惶怖することまたいふべからず。すなはちみづから思念すらく、へわれいま回るともまた死なん。住すともまた死なん。去るともまた死なん。一種として死を勉れじ。われむしろこの道を尋ねて前に向かひて去らん。すでにこの道あり。かならず度るべし」と。この念をなす時に、東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く。へなんぢ、ただ決定してこの道を尋ねて行け。かならず死の難なからん。もし住せばすなはち死なん」と。また西の岸の上の人にありて、喚ばひていはく、へなんぢ一心に正念に直に來れ。われよくなんぢを護らん。すべて水火の難に墮することを畏れざれ」と。この人すでにここに遣り、かしこに喚ばふを聞きて、すなはちみづからまさしく身心に當りて、決定して道を尋ねて直に進みて疑怯退心を生ぜず。あるいは行くこと一分二分するに、東の岸に群賊等喚ばひていはく、へなんぢ回り來れ。この道險悪にして過ぐることを得じ。かならず死すること疑はず。われらすべて悪心をもつてあひ向かふことなし」と。この人喚ばふ声を聞くといへども、また回顧せず。一心に直に進みて道を念じて行くに、須臾にすなはち西の岸に到りて、永く諸難を離れて、善友とあひ見て慶樂已むことなきがごとし。これはこれ喩へなり。」

和讃に云々（貪瞋二河の譬喩をとき等）。信卷序文はみなこの譬喩に拠るものなり。按ずるに疏の文の合法十三句あり。源流合して四十番の釈あり。これを思え。

二に文を合す

次合喩者止慶樂何極也

（次に喩へを合せば、〈東の岸〉といふは、すなはちこの娑婆の火宅に喩ふ。〈西の岸〉といふは、すなはち極樂の宝国に喩ふ。〈群賊・悪獸詐り親しむ〉といふは、すなはち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩ふ。〈人なき空迴の沢〉といふは、すなはちつねに悪友に随ひて眞の善知識に値はざるに喩ふ。〈水火の二河〉といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとし、瞋憎は火のごとしと喩ふるなり。〈中間の白道四五寸なる〉といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、よく清淨の願往生の心を生ずるに喩ふ。すなはち貪瞋強きによるがゆゑに、すなはち水火のごとしと喩ふ。善心は微なるがゆゑに、白道のごとしと喩ふ。また〈水波つねに道を湿す〉といふは、すなはち愛心つねに起りて、よく善心を染汚するに喩ふ。また〈火炎つねに道を焼く〉といふは、すなはち瞋嫌の心よく功德の法財を焼くに喩ふ。〈人の道の上を行きて直に西に向かふ〉といふは、すなはちもろの行業を回して直に西方に向かふに喩ふ。〈東の岸に人の声の勧め遣るを聞きて、道を尋ねて直に西に進む〉といふは、すなはち釈迦はすでに滅して、後の人見たてまつらざれども、なほ教法ありて尋ぬべきに喩ふ。すなはちこれを声のごとしと喩ふるなり。〈あるいは行くこと一分二分するに群賊等喚び回す〉といふは、すなはち別解・別行・悪見人等の、妄りに見解を説きてたがひにあひ惑乱し、およびみづから罪を造りて退失するに喩ふ。〈西の岸の上に人ありて喚ばふ〉といふは、すなはち弥陀の願意に喩ふ。〈須臾に西の岸に到りて善友あひ見て喜ぶ〉といふは、すなはち衆生久しく生死に沈みて、曠劫に輪廻し、迷倒してみづから纏りて、解脱するに由なきに、仰ぎて釈迦の発遣して西方に指向したまふことを蒙り、また弥陀の悲心をもつて招喚したまふによりて、いま二尊（釈尊・阿弥陀仏）の意に信順して、水火の二河を顧みず、念々に遺ることなく、かの願力の道に乗りて、命を捨てをはりて後にかの国に生ずることを得て、仏とあひ見えて慶喜なんぞ極まらんと喩ふるなり。）

文意見るべし。

三に結勸

又一切^止常作此想

(また一切の行者、行住坐臥三業に修するところ、昼夜時節を問ふことなく、つねにこの解をなしつねにこの想をなすが)

問う。禿鈔の引文、自利の言を冒すは何。

答う。深意にして測り難し。試みにこれを会通せば、信本の所引、この章を除かず。まさを知るべし、**[474a]**この文は弘願の相を顕す。しかりといえども、「常にこの解を作し、常にこの想を作す」の意は策励に亘る。それ建立自心の者に似る。故に自利の判あるか。

三に結

故名回向発願心

(ゆゑに、回向発願心と名づく。)

文意見るべし。

二に還相回向

又言回向^止名回向也

(また(回向)といふは、かの国に生じをはりて、還りて大悲を起して、生死に回入して衆生を教化するをまた回向と名づく。)

禿鈔に利他の言を冒^{かぶ}せる。

六要に云く、

「又言」等とは、重て廻向を積す、これすなわち還相廻向の意なり。

証卷に云く、

二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還

相回向の願と名づくべきなり。『註論』（論註）に顕れたり。ゆゑに願文を出さず。

等と。けだし積に依りて積を発するの例なり。

四に総結に二。初に信行一具を明かす。二に三信通因を明かす。今は初。

三心既具^止無有是処也

（三心すでに具すれば、行として成ぜずといふことなし。願行すでに成じて、もし生ぜずは、この処あることなからん。）

信は必ず行を具す。業事成弁なり。

二に三信通因を明かす。

又此三心^止之義応知

（またこの三心はまた通じて定善の義に摂す、知るべし」と。）

三心は散善中にありといえども、説義は定善に通ず。理実は散にあらざるものなり。隠顕の旨、応のごとくこれに会す。

三に讚文に二。初に問、二に答。今は初。

[474b] 往生礼讚^止彼国土也

（『往生礼讚』にはく、「問ひていはく、いま人を勧めて往生せしめんと欲はば、いまだ知らず、いかんが安心・起行して業をなしてか、さだめてかの国土に往生することを得んや。」）

前序文なり。引意は上の三心積を助顕す。

二に答に四。初は問意を牒す。二に経文を引く。三に三心を積す。四に総結。今は初。

答曰必欲_止国土者

(答へていはく、かならず浄国の土に往生せんと欲はば、)

牒意見るべし。

二に經文を引く。

如觀經說_止必得往生

(『觀經』の説のごときは、三心を具すればかならず往生を得。)

上の所引の文なり。

三に三心を釈す。

何等為三_止回向發願心

(なんらをか三となす。一には至誠心、いはゆる身業をもつてかの仏を礼拝し、口業をもつてかの仏を讚歎稱揚し、意業をもつてかの仏を專念觀察す。おほよそ三業を起すに、かならずすべからく真実なるべし。ゆゑに至誠心と名づく。二には深心、すなはちこれ真実の信心をもつて、自身はこれ煩惱を具足せる凡夫、善根薄少にして三界に流轉して火宅を出でずと信知し、いま弥陀の本弘誓願、名号を称すること下十声・一声等に至るに及ぶまでさだめて往生を得と信知して、乃至一念も疑心あることなし。ゆゑに深心と名づく。三には回向發願心、所作の一切の善根ことごとくみな往生に回願す。ゆゑに回向發願心と名づく。)

この中深心の一釈、信本(十四紙)に引証す。至誠心及び回向發願心の二釈、化本(十紙)に引証す。上に准じて解すべし。

四に総結

具此三心_止具說応知

(この三心を具すれば、かならず生ずることを得、もし一心少けぬれば、すなはち生ずることを得ず。『観経』につぶさに説くがごとし、知るべし」と。)

「若少」等とは、解に二義あり。もし顕意に約して、三中に一を欠く。もし隠彰に依らば他力心に欠く。和讃に云々(眞実信心えざるをば等)

三に私積に三。初に至要に嘆ず。二に文に就いて釈す。三に通局に弁ず。初に至要を嘆ずに三。初に直述、二に引証、三に結勸。今は初。

[475a] 私云所引_止至要也

(わたくしにいはいはく、引くところの三心はこれ行者の至要なり。)

隠顕に二意。上に准じて解すべし。

二に引証に二。初に経文、二に釈文。今は初。

所以者何_止必応得生

(所以はいかんど。『経』(観経)にはすなはち、「具三心者必生彼国」といふ。あきらかに知りぬ、三を具すればかならず生ずることを得べし。)

この文は隠顕、上の已に弁ずるがごとし。

二に釈文

積則云_止更不可

(『釈』(礼讃)にはすなはち、「若少一心即不得生」といふ。あきらかに知りぬ、一も少けぬればこれさらに不可なり。)

「一少」とは隠顕。准釈知るべし。

三に結勸

由茲欲生_止三心也

(これによりて極樂に生れんと欲はん人は、まったく三心を具足すべし。)

文意見るべし。

二に文に就いて釈すに三。初に至誠心、二に深心、三に回向發願心。初に至誠心に二。初に総指、二に別釈。今は初。

其中至誠_止如彼文

(そのなかに「至誠心」とはこれ真実の心なり。その相、かの文(散善義)のごとし。)

隠顯知るべし。

二に別釈に二。初は牒、二に釈。今は初。

但外現_止虚仮者

(ただし「外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐く」といふは、)

文意見るべし。

二に釈に二。初は外現文意。二に内懐文意。今は初。

外者对内_止忘備出要

(外は内に対する辞なり。いはく外相と内心と不調の意なり。すなはちこれ外は智、内は愚なり。賢といふは愚に対する言なり。いはく外はこれ賢、内はすなはち愚なり。善は悪に対する辞なり。いはく外はこれ善、内はすなはち悪なり。精進は懈怠に対する言なり。いはく外には精進の相を示し、内にはすなはち懈怠の心を懐く。もしそれ外を翻じて内に蓄へば、まことに出要に備ふべし。)

禿鈔下、至誠心に五番の対あり。内外対において二十五番の諸対を開出す。

みなこの意を承くものなり。また題下の分註、またこの意なり。けだし謙辞のみ。

いかんが謙。謂く賢とは七祖を指す。内賢外愚は専ら深心の義に順ず。故に「信」と云う。愚禿の祖は自ら指して、内愚外賢と。常に[475b]深心の相と違うが故に「心」と云う。和讃に云々（小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり）。禿鈔の判釈、古今を座断す。

「而爾云」とは謙の至なり。

二に内懐文意

内懐虚仮止可是出要

（「内に虚仮を懐く」と等とは、内は外に對する辞なり。いはく内心と外相と不調の意なり。すなはちこれ内は虚、外は実なり。虚は実に對する言なり。いはく内は虚、外は実なるものなり。仮は真に對する辞なり。いはく内は仮、外は真なり。もしそれ内を翻じて外に播さば、また出要に足りぬべし。）

上に准じて解すべし。

二に深信に二。初に直ちに伝承の真印を顕す。二に因りて師資の同軌を示す。今は初。

次深信者止往生者也

（次に「深信」とは、いはく深信の心なり。まさに知るべし、生死の家には疑をもつて所止となし、涅槃の域には信をもつて能入となす。ゆゑにいま二種の信心を建立して、九品の往生を決定するものなり。）

正信偈に云々。和讃に云々。原夫れば信を勧め疑を誠むは、三經七釈に文義充塞す。大經の招喚はもつて法疑を除く。觀經の發遣はもつて機の疑を遣わす。小經の証誠は二疑双べて遮る。龍樹に云く、「疑へばすなはち華開けず」は、密疑を遮るなり。今云々とは、疎疑を遮るなり。義に疎密あり、文に具略あり。互顯旨深。一切通じて遮るが故に。

宗祖は三信を釈す。一一結びに「疑蓋無雜」と言う。その指す所は真実五

卷に帰す。これ勸信門。方便一卷はこれ誠疑門。三帖またしかり。あに真宗の肝要念仏の奥義とならずや。

二に因りて師資の同軌を示す。

又此中_止此二門也

(またこのなかに「一切の別解・別行・異学・異見」等といふは、これ聖道門の解・行・学・見を指す。その余はすなはちこれ浄土門の意なり。文にありて見るべし。あきらかに知りぬ、善導の意またこの二門を出でず。)

文意見るべし。

三に回向発願心

[476a] 回向発願心_止行者_止知之

(回向発願心の義、別の釈を俟つべからず。行者これを知るべし。この三心は総じてこれをいへば、もろもろの行法に通ず。別してこれをいへば、往生の行にあり。いま通を挙げて別を撰す。意すなはちあまねし。行者よく用心して、あへて忽諸せしむることなかれ。

古に二義あり。一に云く「通諸等とは二門に通ずるなり。別而等とは浄土に局るなり」と。

一に云く、「通諸等とは定散に通ずるなり。別而等とは、念仏に局るなり」と。

今謂く、「通諸」等とは二力に通ずるなり。「別而」等とは他力に局るなり。

往生諸行義、准じてかくのごとし。

【科段⑧（随文积）】

八に三心章

標章

引文

經文

疏文

至誠心

標

积

字訓

総じて勸誠を积す

眞実を勸む

虚仮を誠める

誠の由を明かす

勸の由を明かす

別して二利を积す

標列

随积

自利眞実

厭離眞実

標

积

悪を廃す

善を修す

欣求真実

口業

欣求相

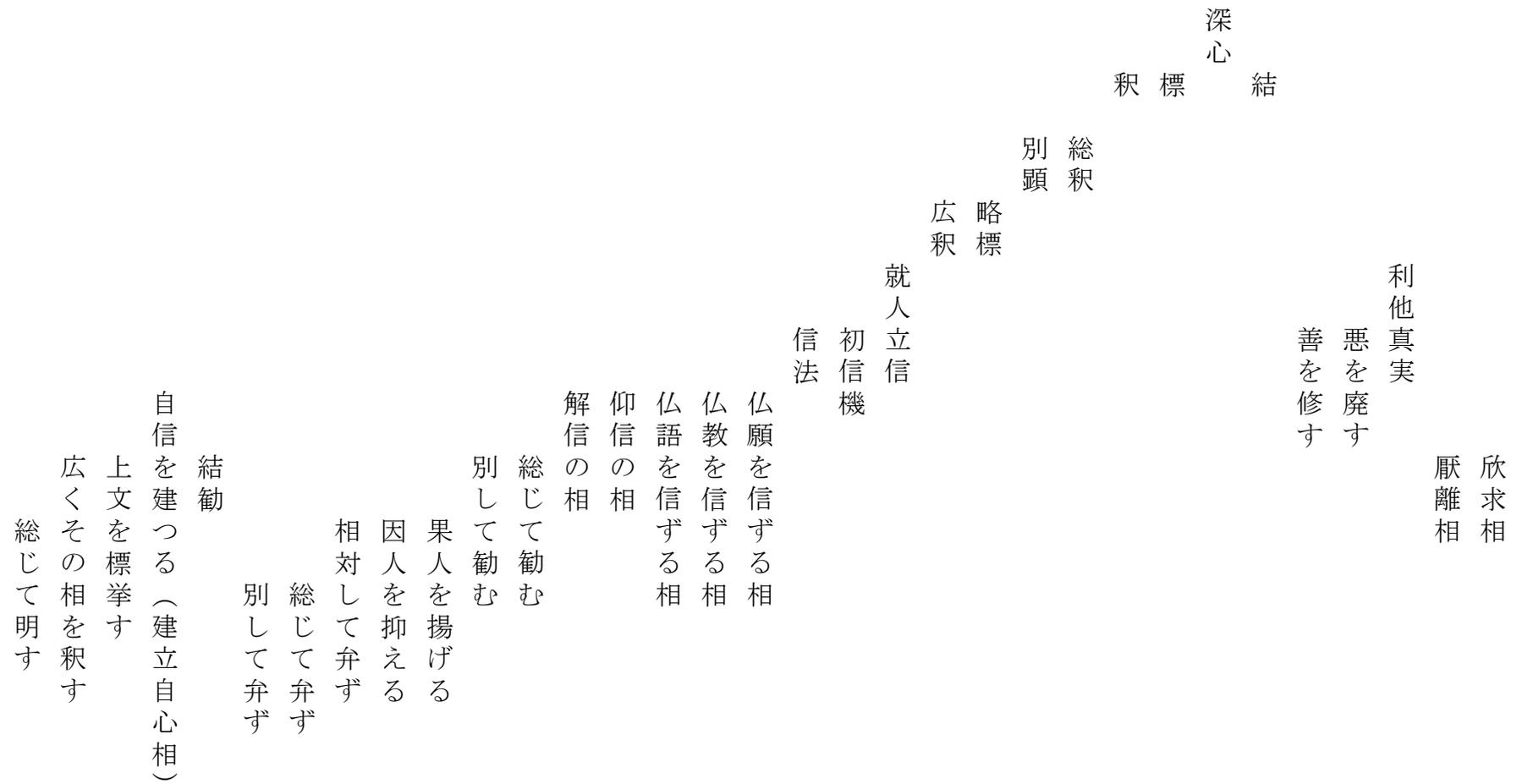
厭離相

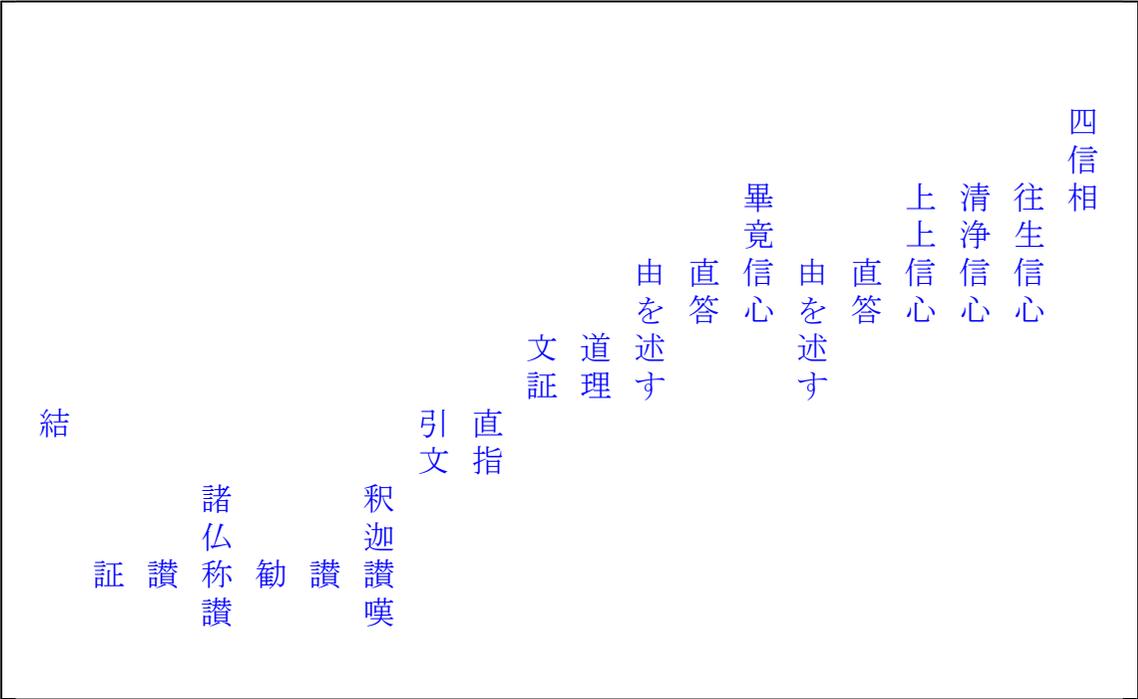
身業

欣求相

厭離相

意業





問答
答 問

先に問意を牒す
正しく報言を誨える

正答
述由

四別相
四信相
(以下別図)

總結

還相回向

結

結勸

合文 譬文

正說

略標

譬說

解行

返詰

得益

比況 正舉

引例

總示

法說

答問

問答

直積

利他回向

自利回向

往相回向

隨積

牒文

積標

回向發願心

就行立信

總決

信行一具を明かす
三信通因を明かす

讚文

答 問

問意を牒す

經文を引く

三心を積す

總結

私積

至要を嘆ず

直述

引証

經文

積文

結勸

文に就いて積す

至誠心

総指

別積

牒

積

外現文意

内懷文意 (475g)

深心 (信)

直ちに傳承の真印を顯す

因りて師資の同軌を示す

回向發願心

通局を弁ず

- ・ 言葉の補足説明は、(※〴〵)
- ・ 言葉の補筆は、「※〴〵」
- ・ 引文に省略がある場合は、(※省略…〴〵)
- ・ 引文が原本と異なる場合、(※原本…〴〵)
- ・ 省略記号
- 真聖全…真宗聖教全書
- 註釈版…浄土真宗聖典註釈版
- 浄真全…浄土真宗全書
- 大正…大正新脩大藏経